

山ざら

第24号 平成5年10月

関東氷上郷友会



くつろぎ多彩、いま1枚のカードから...



お問い合わせ・資料請求は

エスカイクラブ本部事務局/〒530 大阪市北区芝田2-1-18西阪急ビル10F TEL06・372・8571

フリーダイヤル 0120・10355

エスカイクラブ東京事務局/〒104 東京都中央区銀座7-2-22同和ビル9F TEL03-3574-7340



30年の歴史と80,000名のエグゼクティブ達。

1枚のカードで全国200店をご利用いただける。

比類なきスケールの会員性クラブとして、

おらかなクラブライフをおとどけています。



●当クラブでは、品位と風格を守るため、敢てご入会資格を30歳以上の
の自営または管理監督職以上の方とさせていただきます。

嗚呼青春讃歌。

ロマンあふるる恋歌、胸躍る軍歌、情感こもる唱歌、
ヒット歌謡まで、魂を揺さぶり、心の琴線に触れる数々の
歌・唄・詩……。専属のコラスガールと
ご一緒に心ゆくまでお楽しみください。



すすきのビル店 札幌市中央区南四条西3-3 すすきのビル6F 011-512-5191
銀座店 東京都中央区銀座6-5-16 銀座みゆき館4F 03-3573-5885
名古屋店 名古屋市中区錦3-19-6 ワンダフルプラザビル4F 052-951-5122
北新地店 大阪市北区曽根崎新地1-2-28 古沢ビル4F 06-344-6316



浮世を彩る舞い扇。

旬の味を盛りこんだ日本料理の数々、宴をいろどる美酒。

そして、舞妓・芸妓の艶舞のおもてなし。

都心の夜を華麗に演出するお座敷情緒——。

心ゆくまで演舞を楽しめるクラブです。



銀座店 東京都中央区銀座7-7-6 アスタープラザ4F 03-3574-7745
北新地店 大阪市北区曽根崎新地1-5-18 笠井ビル2F 06-344-2913
南店 大阪市中央区東心斎橋1-6-5 南・VOビル2F 06-253-0581



大和実業株式会社

代表取締役社長 岡田一男

本社：大阪市北区芝田町2丁目1-18西阪急ビル10F TEL06(372)8571

山 ざ ら

第
24
号



山ざる 第24号 目次

表紙……………常岡幹彦画・霧はるか(青垣町晩秋……………平成四年作)

口絵写真……………丹波の春(氷上町朝坂)……………渡邊隆男

白挽歌・唐竿打歌……………青垣町史より……………4

郷友会の一〇〇周年について……………村上末吉……………5

平成四年度郷友「集い」の会……………7

小谷正雄氏逝く……………12

《ふるさとの話題》

柏原八幡神社・三重塔修復……………14

上田三四二さんの歌碑……………15

旅の石工・丹波左吉……………16

《ふるさと随想》

丹波・氷上の地名とその歴史……………西畑健一……………20

ふるさとの想い出……………井上陽一……………22

故郷とは……………小田知尊……………23

思いつくまま人生雑感……………足立勲平……………24

丹波に帰省して……………谷口捷……………27

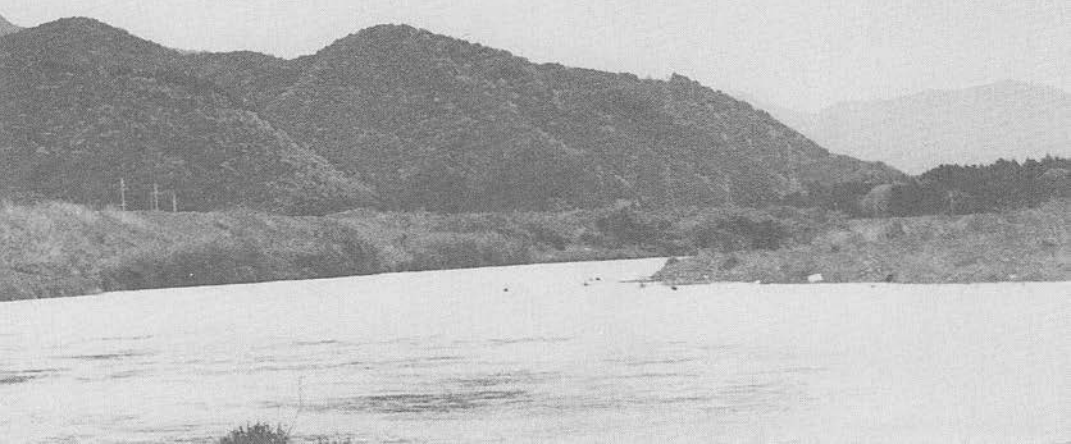
中尊寺と丹波の山寺……………高見秀史……………28

感性を求めて……………足立明子……………30

丹波への熱き思い……………廣瀬安伸……………32

私の半生を振り返って……………山田貞子……………34

終戦記念日に思う……………大坪真子……………35



“ふるさと”創り……………	仲一聰……………	37
柏高卒業三十年……………	上田脩……………	38
還暦からの再出発……………	北村貞子……………	40
△近況・エッセイ▽		
古稀に思う……………	生田正輝……………	41
南米滞在十七年……………	前田武彦……………	43
上山顕著『様々な出会い』を読んで……………	坂本重雄……………	45
真理を求める旅人……………	池田達人……………	46
中高年とダンス……………	大垣忠男……………	47
情緒不安を克服して……………	岡原裕泰……………	49
父と私と就職と……………	本城英明……………	51
転勤に想う……………	増井攻……………	52
私の経歴……………	久安敏夫……………	54
社会主義国の崩壊についての私見……………	余田士郎……………	54
郷友会総会に出席して……………	鈴木大助……………	56
山ざる兄弟、カラコルムを行く……………	吉川誠司……………	58
病床にて……………	渡辺久子……………	65
福知山線複線電化物語……………	梶原清……………	66
△インフォメーション▽		
展覧会／同好会／柏陵同窓会／寄付者芳名録／訃報……………		72
お便り短信／関東氷上郷友会々則……………		78
丹波の動き／会計報告／協賛広告……………		83



白挽歌

——青垣町誌より——

- ひいておくれよ一番びきを 二番びきなら誰もひく
- うすは大うす おもたいうすじや 殿が門に立ちや ちゆでまわる
- 秋の庭では 千石どりも 腰が痛かる しんどから
- 団子ひきすりや 嬉しうてならぬ 食わぬ米つき 腹が立つ
- 思いがけない 六月日でり 殿は夜水にいかな夜も
- 妻は可愛いや 二十日の月が 棟をこすまで 夜なべする
- 野にも 山にも 子は産みおきやれ 子ほど 宝のものはない

唐竿打歌

- 五月しもたら さなぼり休み 麦ししもたら 大休み
- 見捨てられたる 私の身より 見捨てるお前の行末が
- いばらばたんの 優しい花に 針があるとは 知らなんだ

郷友会の一〇〇周年について

会長 村上末吉



皆様お元気で活躍、ご清勝のこととお喜び申し上げます。

不況が長引き、良い話の少ない時ですが、郷友会では平成七年が創立一〇〇周年という千載一遇の好機を迎えることとなりました。皆様と共にこの時期に生を享受したものとして、何ができるか、考えてみたいと思います。

郷友会の目的は申すまでもなく、会員相互の親睦でして、政治目的でもなく、事業目的の会でもありません。従いまして一〇〇周年だからといって、特別に盛大なイベントを企画して、会員の精神を啓蒙しようなどという大それた行事は考

えておりません。ただ郷友会にふさわしい一〇〇周年の集いができることを期待し、これを契機に参加会員を増やしたいと願っております。

ところで、昭和五十八年に行われた八十八周年の時は十数名のご来賓と会員二五〇人余の参加を得、寄付金は約二〇〇万円を協賛して頂きました。それなりに充実したイベントで好評を得たことは皆様もご記憶のことと思います。

来る一〇〇周年においてもこれに優るとも劣らぬものになるうかと思っております。

それでイベントのポリシーは、参加された方々が「今日は楽しい日だった」と心から喜んでくださることです。同じ故郷に生まれて、田舎の文化に育まれた者同志として童心に帰り、和やかな雰囲気包まれて数時間を過ごし、その後永い間余韻が漂うような会になったらいいなア——と考えております。作家の司馬遼太郎氏の言によると、「文化」とは「そこにいることで心がなごみ、楽しくなって、母親に抱かれているような温もりを感じるもの」となっており、私もこの易しい言い方に同感です。

今のところ私は次のようなことを考えております。

品等々

「参加者は、普段出席されていない方もきつと参加してくださるだろうから最低二五〇名からできれば三〇〇名を超える

だろうな。皆様の参加費は一万円前後が必要だろうな。場所はまだ特定してないけど、自然の環境が楽しめてこの集いを盛り上げてくれるような処がいいな。寄付金は皆様大変だろうけど沢山出して頂ける方も、たとえ少しの方でも奮って出して頂きたいし、イベントは寄付金の集まり具合によって決まってくるので、まだ分からないが、余興、福引き等が主となるのかな。他に郷土物産、出版物の発行も悪くないし、お土産物、記念品等が考えられるし、皆様に心から喜んで貰えるものは何だろう……」と毎日思案しております。

皆様もぜひアイデアと申しますか、お考えをお聞かせ願えないでしょうか。郷友会では実行委員会を構成して、その委員の方々にご活躍願うことになるのですが、考える期間は平成六年の三月末日まででして、平成七年の新年と共に具体案に沿って直ちに実行していくことになります。

何でも結構ですから、良い案を募集しておりますので、ご提案くださるようお待ちしております。

（一〇〇周年行事アイデア募集）

- 一、開催月日（予定は平成七年十一月となっております）
- 二、場所（予算との関係もありますが、足の便が良い所）
- 三、余興、福引き、郷土の物産、出版物、お土産物、記念

四、募集締切 平成六年三月三十一日
五、郵送先 〒二三 東京都千代田区神田小川町一―十一

DMSビル内 関東水上郷友会事務局 坂上勝朗様宛

☎〇三―三三九三―〇七〇七

（追記）

創立一〇〇周年の起源について

関東水上郷友会創立の起源については、創立年を明治二十八年、同二十九年、同三十五年等文献により異なりますが、次の理由により、明治二十八年の創立をもって正当とし、平成七年が創立一〇〇周年であることに統一いたします。

水上郷友会は明治二十八年に氷上郡柏原町で有志相寄り創立されました。当初は柏原を本部とし、神戸支部、大阪支部、京都支部、東京支部等から成り、その後明治三十五年に東京支部は氷上郷友会から分離独立して関東水上郷友会となりました。確実なる資料によりますと、関東水上郷友会は明治三十五年と言えないこともありませんが、それは氷上郷友会から発展的に独立したものですから、創立は明治二十八年とすべきです。昭和五十九年十一月十一日に開催された当会の創立八十八周年記念大会も、明治二十八年創立説を正当とした結果であります。

平成4年度郷友「集い」の会

懇親会も賑やかに1年ぶりの再会

総会時期に合わせ

会誌『山ざる』11月発行に変更

平成四年度総会、祝寿会、懇親会は標題のとおり、郷友「集い」として、十一月二十九日（日）九段会館真珠の間で行われた。出席者は総勢六十三名。

総会では村上会長あいさつのあと、議事に移り、理事会より提案された『山ざる』誌発行月の変更の件について審議されたが、満場一致の承認を得た。

これにより、『山ざる』の発行は、従来五月ないし六月に出されていたものを、十一月に移すことになった。

理事会では、毎年十一月に開催される総会（郷友「集い」）への参加者をふやし、さらに親睦の実をあげようと、ここ数年検討をくりかえした。議論は百出したものの、これという決め手のないまま今日まで推移したが、幸い『山ざる』誌は、会員諸兄弟に好評を得ており、これを総会の一か月前にお届けすることにより、郷友会への関心をさらに高めて

もらうとともに、総会へ足を運んでいただけるようにという働きかけができるという見通しで、本議案の提案となった。つぎに坂上理事より平成四年度の会務報告、足立和巳理事より会計報告、藤田、荻野両監事の会計監査報告があり、滞りなく総会を終えた。

なお、会計報告は別記のとおりであるが、台所事情はたいへん苦しいのが実情である。理事会では会費値上げ論もあるほどだが、できるかぎりやりくりして行おうと、会計担当理事は必死である。事情ご賢察の上、会費納入と『山ざる』協賛広告への参加をお願いしたい。

続く祝寿会では、次のかたがたに、会長より祝詞と記念品を贈呈した。因みに、今回の祝寿を申し上げたかたがたは、明治四十五年・大正元年のお生まれである。（五十音順）

足立治殿（青垣町）、足立徹殿（青垣町）、足立護殿（春日町）、秋山一男殿（春日町）井上陽一殿（春日町）、池上碩郎殿（柏原町）、石倉軍二殿（永上町）、清藤節子殿（青垣町）、谷垣博殿（柏原町）、谷垣美代子殿（春日町）、田浩殿（柏原町）、能勢次郎殿（春日町）、山蔭あや子殿（柏原町）、山田淑子殿（柏原町）以上。

席上では代表の石倉軍二氏から謝辞が述べられ、なお、かくしくたるお姿に一同感激した。

懇親会はいつもの通り、なごやかな語らいの輪がいくつも

できあがる。

今回も氷上六町関係の来賓はなかったが、柏陵同窓会会長吉見文憲先生、氷上高等学校々長上井寛之先生を囲んで、柏原高等学校創立百周年記念事業や、相変わらざるの無敵ぶりを發揮している氷上高等学校女子バレーボール・チームの話題に花が咲いた。

余興では、おなじみのザ・トップクラブ・ミュージック・サルーンのコーラス（岡田一男氏提供）、恒例の「お楽しみ抽選会」では大小の幸運をそれぞれ満喫して、午後四時散会した。

当日の出席者、並びにお楽しみ抽選会の景品提供者は次のとおりである。（敬称略）

■来賓

土居 辰男（兵庫県東京事務所）

吉見 文憲（柏陵同窓会々長）

上井 寛之（県立氷上高等学校々長）

奥田 泰輔（神戸新聞社丹波総局）

■祝 寿

石倉 軍二

■出席会員

○青垣町（1名） 足立和巳

○市島町（11名） 井田悦子 岡山充 荻野武 木村つた江

近藤勇 渋谷要之助 高見秀史 田中篤郎 森下千壽子

余田士郎 鶴田ゆき子

○柏原町（12名） 安達美都子 上村愛子 上山顕

加賀山一郎 志村勝郎 陶山笑子 谷達雄 常岡幹彦

出町京子 野村文子 宮野近 村上善英

○春日町（12名） 井手梅野 岡田一男 木呂子恵美子

足立かをる 斎藤陽子 波多洋三 畑秀史 船越祥郎

村上末吉 村上久夫 吉住重造 吉見敏子

○山南町（7名） 池田忍 大木正徳 久保春雄 千葉淳子

仲一聰 中居篤子 渡辺貴美子

○氷上町（13名） 芦田やよい 足立謙悟 足立美矢子

足立正 安達健一郎 上野重喜 大地富美子 岸本昌子

坂上五朗 坂上勝朗 佐藤道子 新田浩迪 樋口ふみ子

○黒田庄町（1名） 藤田正雄

■お楽しみ抽選会賞品御寄贈者芳名（順不同）

足立かをる殿 サポートパンスト 一〇本

吉住 重造殿 高級セーター 五本

木村つた江殿 市島の山菜佃煮 七本



総会であいさつを述べる村上会長

■特別協賛 岡田 一男殿	岡田 吉明殿	織田煮	三本
	明日香園殿	煎茶和染ミニ缶	五〇本
郷友会	常岡 幹彦殿	野沢菜漬	一五本
	池田 忍殿	自分史年表	
村上 末吉殿	「昭和メモリー」		
	笹倉 強殿	白砂糖（一kg入）	五本
足立 和巳殿	オラトリオ天地創造	七八本	
足立 誠一殿	「演奏会入場券」		
野村 文子殿	日高昆布	一〇本	
出町 京子殿	テレホンカード	一〇本	
兵庫 県殿	お菓子	五本	
堀井 隆川殿	創作舞踊展公演入場券	一〇組	
足立 謙悟殿	海苔	四本	
神戸新聞社殿	セロテープセット	一〇本	
岡田 一男殿	男物ゴルフ用ベスト	一本	
せんべい	テレホンカード	五本	
	八ッ橋	五本	
参加者全員			
ザ・トップクラブ・ミュージック・サルーン			



総会・懇親会

スナック

村上会長から祝寿の記念品を贈られ、
お礼のあいさつを述べる石倉重二氏





関東水上郷友会名誉会長

小谷 正雄氏 逝く



関東水上郷友会の名誉会長・小谷正雄氏が平成五年六月六日、日本はもとより世界の物理学会にも画期的な業績を残し、八十七歳で世を去った。葬儀・告別式は十一日、文京区護国寺で、東京理科大学葬は七月六日、青山葬儀所で行われた。喪主は長男・正博氏。

小谷正雄氏は柏原下小倉の名門・田家、艇吉翁（健治郎氏の兄）の孫にあたる。小谷安太郎氏の養子となった艇吉氏の子息（次男）哲氏を父とし、安太郎氏に嫁いだ艇吉氏妹の娘を母として、明治三十九年、京都に生まれた。父・哲氏が京都帝国大学を卒業後、大阪、東京と居を移された関係から、正雄氏も京都に生まれ育ち、大阪天王寺中学、一高、東京帝大へと進まれた。従って正雄氏は先祖の墓参時のほか、古里の氷上を知らない。

八重夫人によれば、正雄氏は生来寡黙で、先祖や柏原のことはむろんのこと、なべて過去のことを語ることがなかった。海外の学会にしげく出かけることがあっても、観光ひとつせずつに、最短コースで往復し、羽田から大学に直行するといった、一途な人柄であったという。学究一徹の生涯というか、それでこそ分子物理学の立場から生物物理学という特異な分野に切り込み、DNA（遺伝子）の解明に大きな影響を与えろという、極めて先進的な研究ができたのであろう。一九四八年に朝永振一郎氏とのマグネトロンの研究「磁電管及び立体回路の理論」で日本学士院賞、一九八〇年には「配位子場理論の研究」で文化勲章を受けた。

正雄氏は晩年、郷友会の会合にはときたま出席され、遠い丹波の地（血）を垣間見られるのか、味わっておられたのだろうか、いつも温顔ひときわ親しみを増すかのようにであった。氏の本籍はなぜか、柏原町下小倉で通されたという。左に氏の経歴の一部を掲げる。（玄）

（略歴）

明治三十九年 一月一四日京都市にて誕生

昭和四年 東京帝国大学理学部物理学学科卒業

昭和十八年 東京帝国大学教授

昭和二十二年 宮内府御用掛兼宮内府事務官東宮職勤務

昭和二十三年 日本学士院賞受賞

昭和二十五年 京都大学教授併任

昭和二十九年 日本学術会議会員

昭和三十〇年 国際純粋応用物理学連合副会長

昭和三十二年 東京大学理学部長

昭和三十五年 東京大学物性研究所教授併任

昭和三十六年 国際生物物理学機構理事

昭和四〇年 日本学術振興会日米科学協力事業委員会委員／大阪大学教授に配置換、東京大学教授

併任

昭和四一年 国際学術連合会議執行委員／東京大学名誉

教授／国語審議会委員／国際学術連合会議
科学技術データ委員会日本代表／国際生物
物理学連合理事

昭和四二年 学術審議会委員／「分子構造の量子力学的
理論」の研究に対し東洋レヨン科学技術
賞受賞

昭和四五年 東京理科大学学長／日本学士院会員・国際
量子分子科学アカデミー会員

昭和四九年 「分子物理学および生物物理学の基礎的研
究」に対し藤原賞受賞

昭和五〇年 理化学研究所相談役

昭和五一年 外務省日米科学協力委員会委員／勲二等旭日
重光章受賞／日本私立大学協会理事會常

務理事

昭和五二年 文化功勞者に顕彰／科学技術庁参与

昭和五三年 国際量子生物学協会一九七七年度賞受賞／
国際学術連合会議科学技術データ委員会会長

昭和五五年 文化勲章受賞

昭和五七年 東京理科大学名誉教授

平成元年 東京理科大学生命科学研究所顧問

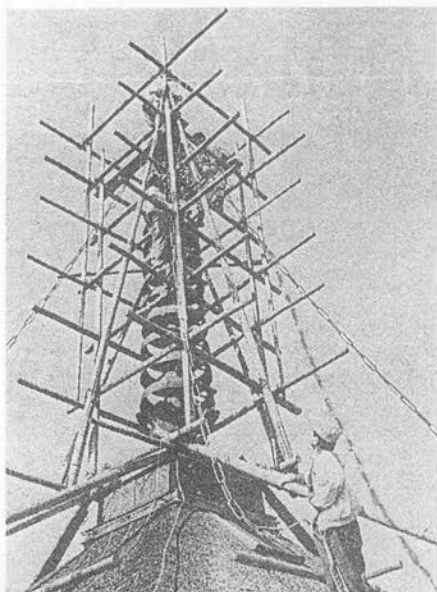
平成五年 六月六日永眠・従三位勲一等瑞宝章受賞

柏原八幡神社・三重塔修復

宝輪に元和四年の刻銘

柏原の八幡神社は平安時代の万寿元年（二〇二四）、京都・石清水八幡宮の丹波別院として創建された。社殿は南北朝・貞和元年（一三四五）の兵火で焼失、再建されたが、それも天正七年（一五七九）、明

智光秀軍の兵火で再び焼け落ちた。間もなく羽柴秀吉が黒井城主・堀尾茂助吉晴に奉行を命じ、三年がかりで天正十三年（一五八五）に竣工したのが現在の社殿である。建築は桃山時代の様式、彫刻は室町時代の手法による。昭和四年に国宝、二十五年に重要文化財に指定された。昭和五十年から



28年ぶりに取り替え工事中の三重塔（左）と柏原八幡神社の全景（下）



五十一年に大々的な解体修理が行われた。八幡神社のシンボル三重塔は、室町時代の応仁年間に建立されたが、社殿同様、天正の戦乱で炎上し、その後元和五年（一六一九）に再建、再び万治二年（一六五九）に落雷で焼失、文化十二年（二八一五）に、当時柏原の彫刻家・中井権治氏らが中心となって三度めの再建を果たしたのが現在のもの。

一昨年九月の台風で三重塔最上部の宝珠が傾き、檜皮葺の屋根も傷んだため、今年二月から二十七年ぶりの修復工事が始まった。ひわだ葺きのふきかえとともに、「宝輪」と呼ばれる三重塔上、青銅製の九つの輪飾り（高さ八メートル・円周四十〜八十五センチ）の傾きを正すために四本の宝鎖をとりにかえて締め直した。銅製の宝鎖は柏原町の板金業・臼井秋太郎さんが作ったもので、太さ一センチほどの銅線を長さ二十五センチの環にしてつなぎ、一本十二メートル、重さ九十キロにも及ぶ。総修復費は八千万円、県や町の補助のほかは一般の寄進でまかなうため、町内に寄付を呼びかけている。

この修復工事中に柏原町歴史民族資料館が調査を行ったところ、宝輪に「元和四年十月吉良日」の銘が刻まれていた。つまり落雷で焼失前四十一年、三度めの再建より約二百年前のものであることがわかった。今から三百五十七年前の宝輪が使われていたわけである。柏原八幡神社に伝わる古文書『三重塔由緒書』にも、元和五年に再建したとあり、それが

実証されたことになる。そのほか寄進者の名前なども刻まれ、一番上の宝輪には「西之坊現在祐照」とあった。西之坊は八幡神社の神宮寺だった乗宝寺（現在の社務所跡）のこと。同資料館では近く発行予定の『乗宝寺の伝来資料館目録』で宝輪の刻銘を発表するという。（丹波新聞より）

上田三四二さんの歌碑

柏中同級生が八幡神社下に建立

旧制柏原中学を昭和十六年に卒業、京都大学医学部を出たあと、医者として療養所などに務める傍ら作歌や文芸評論で名をなし、数々の文学賞を受賞、宮中歌会始の選者も務めた上田三四二さんが亡くなったのは四年前、平成元年のことだった。昭和四十一年にガンを患ってからは『死すべきものの自覚』『この世この生』（読売文学賞）などの著書で、人生や自然を見つめた歌にひとときわ鋭い冴えを見せた。東京清瀬市に住み、歌境いよいよ熟した六十五歳の死が惜しまれた。

その後、柏原中学四十回生たちが、「上田君は包容力のある男で慕われる存在だった。従容と笑みを浮かべながら死んだその死に際しみごとで、私たちの誇りでもある」と、黒田庄の上月安重郎さんが代表世話人となり、同級生三十九人が



八幡山下に建てられた上田三四二さんの歌碑と碑板

ら約二百万円の寄付を募って、八幡山下に歌碑を建立した。歌は、上田さんが昭和五十四年に柏原八幡神社を訪れた際に作ったもので、「八幡社頭」と題し、「蟬声のしげき人なき社頭には 受験少年のわがまぼろしあゆむ」「拝殿の石に 蜥蜴のはしるさへ 昔日に似てうつつなきかも」の二首。歌碑は花崗岩で高さ約二メートル、幅約七十センチ、傍に上田さんの略歴などを紹介した碑板も建てられている。

(丹波新聞より)

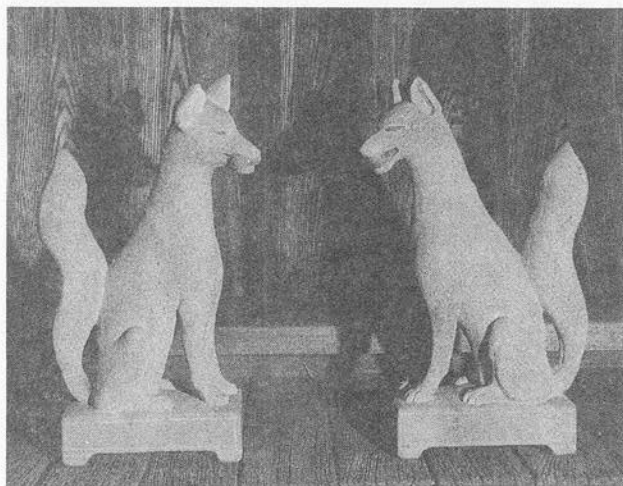
旅の石工・丹波佐吉

柏原町大新屋の上山家、十三代当主・上山顕さん（東京都港区・郷友会顧問）がこのほど、丹波佐吉を広く知ってほしいと、上山家に伝わる石工・丹波佐吉作・狐一對と不動明王像（絶作）の二点を柏原町歴史民族資料館に寄託された。

孝明天皇から「日本一の石工」と称賛された丹波佐吉の名を知る人は少ないと思われるので、この機会に紹介しよう。昭和三十四年に出版された『新井村誌』から引用する。

「——丹波佐吉はもと、日下氏、後、村上照信と称す。佐吉はその通称である。但馬国竹田の貧家に生まれ、幼にして父

母を失い孤となる。たまたま本郡大新屋村の石工難波金兵衛これを憐み、かつ己れに子なきをもつて養子として連れ帰る。時に文政三年（一八二〇）佐吉僅かに五歳であった。後に金兵衛（二代金兵衛）を生むに及んで、佐吉出て、村上氏を名乗り、石工をもつて業とした。長ずるにおよんで、大和・伏見・大阪の各地で業を習う。天才的の技能益々熟し、長ずる



上山家から寄贈された狐一对（安政4年の作）

におよんで殆ど天下佐吉に比肩する者なしと称せられた。大阪にては専ら南堀江竜平橋の石屋に仮寓していたが、酒を飲まず妻を迎えず、専心斯業に傾倒したのでその名声益々揚がる。而してな旧師金兵衛の恩を忘れず、己が郷里を問わば、必ず、丹波大新屋なりと答えた。よつて人皆これを丹波佐吉と称した。

佐吉初め丹波にいる頃、読書を大新屋上山孝之進に学ぶ。

その関係よりして、上山孝之進は田口金治と共に狛犬を柏原八幡宮に献ずるため、これを佐吉に命じて作らしめた。その手法等殆ど他に見ない逸品である。その台石に彫刻せる文字は筑前の女儒者・亀井少葉の筆であるが、少葉揮毫の依頼を受けた時、佐吉のこれを彫すべきを聞き、喜んで筆を執つたと伝う。今八幡社前にあるもの即ちこれである。

本村北山稻荷神社前の石狐一对も同人の名作である。その他大阪難波五番町石工小西家伝吉の所持せる文珠菩薩像、大新屋上山家所蔵の不動尊像、大阪舍利寺の役行者像等、逸品中の逸品として推奨に値する。

また佐吉大阪にあった頃、石をもつて尺八を作ろうと同業者間に互いに競い、何れも成功しなかったが、独り佐吉は遂にこれを製作し、その音実に微妙を極めた。よつて公卿某の手を経て、孝明天皇にこれを献じたところ、天皇痛くこれを賞せられて、日本一なりとの賞辞を給うた。爾来日本一の名

世に顕わる。晩年精神に異常を來したので大新屋に帰り静養したが、治せず、遂に一日飄然と家を出て帰らず。ためにその終わる所を知らない。

以上の新井村誌の一文に興味をもった日本民族学会々員の金森敦子さんが、十年がかりで佐吉の業績を訪ね歩き、一冊の本『旅の石工―丹波佐吉の生涯―』（B6判・二七四ページ・法政大学出版局刊・二二六六円）を書いた。郷里丹波を中心に今も散在する佐吉の作品をことごとく調べあげて、そのすばらしさを解く本書は、われわれにとっても、あ、あれが、これもそうなのかと、興味つきの内容である。この本は今も版元の法政大学出版局に残部があるので、ぜひ購読をおすすめしたい。以下に当書から二、三の引用を試みる。

―後に日本一といわれるまでになった佐吉と、その養父金兵衛との出会いに、次のような逸話が残されていた。

竹田（現在の朝来郡和田山町竹田）で石を彫っている金兵衛のもとに、毎日遊びに来る子供がいた。あまり熱心に見ているので、金兵衛が道具を貸し与えたところ、母親らしい面影のあるものを彫りあげて、金兵衛を驚かせた。その非凡な才能を見込んで、五歳の佐吉を引きとった。……以来佐吉は故郷を離れ、旅回りの石工・難波金兵衛と生活を共にする。

―佐吉の最期―そしてこの頃、佐吉の体には梅毒の第



宮物作りの左吉の伎倆を示す
傑作・柏原八幡神社の狛犬

三期の症状があらわれはじめていたようだ。妻もなく子もない佐吉が身を寄せるところ、それは丹波大新屋しかなかった。悄然として大新屋に戻ってきた佐吉を見て、義継も母のフミも、その変りように驚いただろう。病毒に冒されて死を覚悟している佐吉には、日本一の石工などという気負いは全く失せていたにちがいない。柏原八幡宮の狛犬の一件で、ツンボ棧敷に置かれてしまった義継は、佐吉のことを快く思えるはずもなかったのだが、すっかり毒気を抜かれてしまった佐吉に頼られれば、むげに追い返すわけにもいかなかっただろう。

佐吉はこのとき、大新屋で不動明王を彫っている。佐吉は自分の命がそう長くはないことを悟っていたようだ。日ごと



上山家から寄贈された不動明王像（絶作）

に骨の髄の痛みが増し、皮膚がただれて血膿が噴き出すのはもう時間の問題である。自分がだんだん腐っていくことを思うと、気が狂いそうになっただろう。死は確実にそばまでやってきている。その中で佐吉はもう一度執念のようにノミを手にしているのだ。

義継の仕事場の片隅を借りて彫り出したのは、不動明王像であった。広大無辺の慈悲の仏より、激しくいきりたち、焼き尽す勢いの不動明王こそ、今の佐吉にはふさわしい。体の中に巣くっている梅毒を焼き尽し、爪の先にまで染み込んでいる無明の闇を焼き尽す、そんな不動明王こそが求めるものであったろう。

上山家に残されている佐吉のこの不動明王像は、全身の忿怒が凍りつくような静けさをもっている。のぼり立つ火炎を背にして立つ像の顔は、荒々しさと苦悩を同居させながら、全体としてはひどく物静かな印象がある。全高およそ六十七センチ。火炎にはうっすらと赤と金の彩色が残っている。

慶応二丙寅二月日

上山治郎右エ門藤原有績

作 但州竹田産村上照信（花押）

台座にこう彫られている。

この不動明王像が完成すると、佐吉は誰にも告げず大新屋を去り、そして二度と帰ることはなかった。

（玄）

丹波・氷上の地名とその歴史

西 畑 健 一（春日町）

丹波・氷上郡との関わりあい、旧大路村が父の出身地であり、昭和二十年三月十日の東京大空襲にあり、疎開して旧制柏原中学校に転校、新制柏原高校第二回生として卒業するまでの五年間を大路で過ごしたことによる。帰京して法政大学に入り、しばらくあって角川書店に勤務。「角川日本史辞典」や「新修日本絵巻物全集」などの編集に従事、退職までの十四年間はひたすら「角川日本地名大辞典」全四九巻の編纂にあたってきた。そうしたことから、思いつくまま丹波・氷上の地名とその歴史について書きとめてみる。

*

○丹波 旦波（古事記・藤原宮跡出土木簡）、但波（正倉院文書）とも書かれた。古くは「たには」とよばれ、語源説に、田庭（諸国名義考）、谷端（倭訓栞）の意とするものがあるが、むしろ「丹波」の文字から、むかしこの辺りは大き

な湖で、その水面の波が夕陽に赤く丹色に輝く様から名づけられたという伝承のほうに夢がある。丹波には福知山、篠山、園部、亀岡などの盆地があり、氷上低地も盆地状になっている。それらの盆地は山波に幾重にも囲まれ、夕陽に映えた様はあたかも湖底にあるかのような錯覚に襲われる。

和銅六年に丹後国を分立して、桑田・船井・天田・何鹿・氷上・多紀の六郡となるが、丹波郡は丹後にあり、国名の由来はこの丹波郡の地にある。海に面する郡が多い丹後国の中で丹波郡は内陸の郡である。丹波は、本来山国である。

奥丹波の冬の厳しさは、但馬と同様、農業には不向きで、灘五郷への丹波杜氏を出し、丹波の霧が丹波茶と山椒・松茸を生み、冬期には猪肉の牡丹鍋が賞味されることになる。

○氷上 氷上とは加古川の古称「氷の川」の最上流の意。加古川は兵庫県の中央部を南流し、播州の加古川市で瀬戸内海に注ぐ。その源は青垣町の西端栗鹿山（あわがさん）付近。

篠山川との合流地点（山南町）までを佐治川と呼ぶ。また、支流の柏原川と日本海に注ぐ由良川の支流竹田川とは氷上町石生の水分（みわかれ）で、分水嶺の形ではない平地の分水界（標高九四・五メートル）を形成する。

旧幸世村氷上の地が、江戸・戦国時代の氷上村、それ以前には「和名抄」に氷上郷と見え、氷上郡の名はこの地を起源とする。古来都との交渉が深く、「日本書紀」天武紀に氷上娘、「続日本記」に氷上塩焼ら、「播磨国風土記」に氷上刀売などの名が見える。平城宮跡出土木簡に「丹波国氷上郡石□里・笠取□子・和銅□年」とあり、柏原町を中心にして条里遺構が広く見られる。「和名抄」には、栗作・拳田（あぐた）・石生・船城・春部（かすかべ）・美和・竹田・前山（さきやま）佐治・伊中・賀茂・氷上・石前（いわさき）・葛野（かどの）・沼貫（ぬぬき）・井原・余部（あまるべ）の十七郷、式内社は十七が記載されている。莊園が早くから立てられ、皇室領や神社領、その他あわせて二十と数が多い。古代に建立されたという伝承をもつ寺は約二十五（丹波志）、平安時代の仏像を安置してある寺は十二を数える。

○大路 律令の山陰道の丹後国への支道が通っていたこと、すなわち長柄（ながら）駅（現在の多紀郡篠山町那家）から西紀町宮田、三尾山の尾根越えて旧大路村中山に下り、大路川を渡って鹿場（かんばん）から旧国領村柚津、旧春日部村野上野（のこの）、多利を経て、日出駅（現在の市島町段宿）に至る大きな路が通っていたことによるか。なおこの官道は前浪（さきなみ）駅（現在の福知山市小田）を経て丹後国府（宮津）に至る。

山陰道の本道は、長柄から星角（ほしずみ）、佐治を経て栗鹿へと延びる。星角は現在の氷上町石生とされ、佐治は青垣町佐治で、遠坂峠を越えて但馬に入り、朝来郡山東町和賀に比定される栗鹿に至る。

○柏原・石生 氷上郡での難解な地名として間違ひなく挙げられるものに、柏原と石生がある。

柏原の地名には「かしわばら」「かしはら」などがあるが、「かいばら」とはどうしても読めない。柏原高校で国語を教えていただいた山鳥鋭男先生は「柏原」は「かやはら」が「かいばら」と音転したもので、「かやはら」の「かや」は「栢」である、と考証された。旧大路村には栢野という地名がある。カヤの木が多くあったと思われる。

石生は、「和名抄」高山寺本には「原生」とあるが、「いしおう」が「いそう」と音転したものと考えられる。

*

二万年以上も前の旧石器時代の春日七日市遺跡や、国史跡で奈良前期の、金堂と東西両塔が一直線に並ぶ類例のない伽藍配置をもつ三ツ塚廃寺（市島町）、平安末から鎌倉初期の丹波仏師の工房とされる達身寺（氷上町）、元弘三年の六波羅探題攻めに関わった神池寺衆徒（太平記）のこと、天正四年、明智光秀の攻撃をかわした黒井城の赤井直正、天正七年、黒井城落城後黒井に入った斎藤利三、その娘お福がのちの春

日局で、黒井の興禪寺が館跡とされていることなど、書いてみたいことは多いが、とりあえず筆をおく。

〔参考文献〕

丹波路 竹岡林 昭和五十一年一月 学生社
角川日本地名大辞典 26 京都府 昭和五十七年七月 角川書店
角川日本地名大辞典 23 兵庫県 昭和六三年一〇月 角川書店
丹波史を探る 細見末雄 昭和六三年十二月 神戸新聞総合出版センター

ふるさとの思い出

井 上 陽 一（春日町）



わたし、生まれ育ちともに東京であります。しかし故里に付いて聞かれると「丹波」と答えるのが常です。というのも、祖父父母の時代、また、両親が東京に出るまで、先祖代々長いこと氷上の船城村山田に居住し、お

世話になっておりましたからです。

父の雅二、母の秀子ともに丹波で生まれ育ち、この両親が

東京・小石川に住いしてから、私は生まれました。少年の頃には毎年二、三度は祖父父母の住む船城に両親に伴われて帰郷し、祖父父母に可愛がられるのが楽しみであったものです。父は篠山の鳳鳴塾から海軍兵学校に進み、後に早大、ベルリン、ウィーン各大学で、殖民政策を専攻し、マレーでのゴム栽培をはじめ、比島でマニラ麻、ペルーで綿花等々、後にブラジル移民を世話する海外興業会社の社長を務めるなど、おおむね海外事業に専従しての一生でした。

なお、この間の一時期には、丹波氷上を地盤として衆議院議員に当選し、一期を務めたと聞いております。

母の秀子は、まだ鉄道もなかった頃、船城村小学校を卒業すると祖父に付きそわれて徒歩で京都まで出かけ、京都府立高女に進学、のちに米国コロンビア大学を経て、日本女子大学創立に参画し、その三代目学長を勤め、日本の女子教育に献身した生涯でありました。

遠くなった昔になりますが、父母と共に丹波の祖父父母の家に帰郷した時、大雨が降り続き田圃から水が溢れ、どじょう、子ブナなどが畦道にピンピン跳ね上がっているのを捕まえるに出かけたりした、まさに「子ブナつりしかの川……」の歌の通り懐かしい少年時代の思い出が心に残っております。

また、東京帝大を卒業し、徴兵検査を受けたのも柏原でありました。船城の山田から徴兵検査を受ける同年の若者ども

数名と共に、下駄ばきで柏原役所まで歩いて出かけました。

ちょうどこの頃、私には足首骨折の後遺症が残っており、柏原まで下駄で歩かされたために、着いた時にはこれが悪化してしまいました。このため一見頑強に見えた私も、ピッコひきひきの有様となっていたので、「兵役に適せず」として丙種合格との結果となりました。しかし、これが幸いしてか、その後直ちに、カルカタ、ベルリン等の海外支店勤務で外地に出かけることとなり、第二次大戦で倒れた同輩も多かったに拘らず、私は北ヨーロッパで戦争中を過し砲弾の洗礼一つ受けることなく、今日まで生きのびて来た次第です。

ただ今は、和歌山と旭川に工場を持つ外資系企業の社長としての勤務を続け、既に二十数年になりますが、年に一度は春日町山田にある先祖の墓参りに帰郷するのを常としております。余談になりますが、数年前の『山ざる』誌を読んでおりましたところ、畏友の田口正男氏（ニュースター社長）が柏原出身の氷上郷友であることをこの時初めて知りました。わたしは大体趣味のない、いうなれば、仕事オンリーの男ですが、ただ一つ、カルカタに在勤中（戦前）に始めたゴルフだけは今になっても続けております。田口君とは共に霞ヶ関カントリー倶楽部の古くからのメンバー同士で、週に一度ぐらいいは顔を合わせております。この倶楽部の会員数は千人近くありますものの、故郷を共にするのは、私達二人だけ

ということ、特別の親交を持てるようになりました。

これも『山ざる』誌の取り持つご縁かとの思いにかられております。終りになりましたが、氷上郷友皆様のますますのご健康とご発展をお祈りいたします。

〈筆者略歴〉明治四十五年生れ。東京帝大卒、バスケットボールの元全日本代表。三菱商事、旭硝子等を経て、昭和四十五年日米合併による日本リックウイル株式会社を創立、代表取締役就任して現在に至る。

故郷とは

小田 知 尊（柏原町）

私の母は四十三歳で難産が原因で死んだ。その時、私は八歳で「母は年だから死んでも致し方ない」と思いあきらめた。私の娘は他所へ嫁いでいるが、今四十六歳、私の死んだ母の年を越している。

母の四十三歳の死は、若死だったと今更思い返される。だが私の脳裏には母は私より年よりだったから先に死んで当然だと納得していた。私は今七十五歳である。考えてみれば不思議なことである。

自分が死んだ母より三十二歳も年上であるのに母は自分より年下とは感じられない。これと同じく若いときに感じた故郷の印象は死ぬまで、その人の脳裏に焼きついて忘れられないものである。それは鮭の稚魚が川に放流され、海で育っても産卵期には、放流された川を覚えていて帰ってくるというのに似ている。

鮭の脳裏（？）に焼きついた生まれ故郷はいつまでも忘れないと同様、生まれた所、幼いときに育った所の思い出は、良かれ悪しかれ、その人の一生につきまとい離れない宿命があるように思う。

人間と鮭とは同じでないといえ、それまでだが、遠く離れて暮らしている人が、郷友会を結成し、生まれ故郷の思い出を語るとき、自然と同志的共感が得られるものである。故郷がある人間はこの点、幸せだと思う。

かつて参議院議員全国区に出馬された「田英夫氏」が第一回選挙の結果を見て「何故私の支持者が兵庫県氷上郡に多いのだ」と不思議がられたという。丹波では彼の祖父、故田健治郎氏（通信大臣就任）が、柏原町の出身であり、郷土丹波の人は彼を英雄視している。そしてそのお孫さんが参議院に出馬されるということを知り、政党を度外視して田英夫氏を支持したものである。

郷土の者はその出身者の成功を祈り、郷土出身者は、ふ

るさと”の発展を願う。これは理屈抜きの人情である。この思いが『山ざる』に結集されている。関東郷友会の存続と『山ざる』誌の一層の発展を祈念しながら。（丹波新聞社社長）

思いつくまま人生雑感

足立勲平（青垣町）

大正世代は遙か遠くなりました。何もかも、昨日のことにように思えるのに、大正生まれの私は紛れもない一人の老人です。

孔子の言葉「逝くものは斯くの如きか、昼夜を舍かず」この言葉をつくづく味わっております。

大正のロマンといわれ、明治に比して多少遅しさに欠けるがロマンチストで頑固者、非打算的で純粋な幼児性を残している人物が多いのは大正世代のようです。それはもちろん私自身かもしれません。

二十一世紀の大半を私なりに一生懸命生きてきましたが、まさに濁流を泳いだというべきかもしれません。昭和五年に始まる満州事変、昭和十二年の日支事変、昭和十六年に大東亜戦争勃発、昭和二十年の敗戦、日本全土は焼土と化し、廃

墟の中に茫然と夏雲を仰いで生きていることを確認したことを思い出します。私の青春の殆どは戦争の中に埋没していた計算になります。

旧制の小学、中学、高校、大学の多くの友人が若くして散華していったのを思うと痛恨の極みです。戦争への怒りが込み上げてまいります。

どれも好い奴だった。どの名前も面影も忘れることはできません。長生きに対し自責の念に駆られます。女性もよく戦った。よく生きた。子を、夫を戦場に出して耐えに耐えた。思えば熱い涙が込み上げてまいります。日本は廢墟の中からフェニックスのようによみがえり、復興の担い手となった吾々は、老人となりましたが、この戦争体験の悲惨さだけは心に銘記し、戦争は二度と繰り返さないよう子孫に伝えねばならないと思います。今や繁栄は飽食と甘えの構造を生み出し、物質万能の快樂主義的混迷が日本民族の不幸につながらないことを祈ります。

私は旧佐治町出身ですが、今は当時の芦田村、遠坂村、神楽村、佐治町を合併して青垣町となりました。大箕山、岩尾山の四季折々の山容を懐かしく思い出します。「兎追ひし彼の山、子鮒釣りし彼の川」の唱歌を聞くと胸痛むような郷愁を感じます。今のような自動車社会でなかった当時は、青垣町では小学校を出るまで海を見ることもなく、風の方

によって聞こえてくる遠い汽笛の音に広い世界を夢見たものです。

当時は柏原中学へ進学する者は各町村で三、四名で、一年百名前後のクラスでありました。私は中学一年から屋敷町や東奥に下宿していましたが、夕暮れの淋しさは格別でした。以来学生生活、社会生活を通じ故郷を離れたので、望郷の念に耐えられないような思いを致すこともありました。故郷は遠きに在りて憶うものかもしれません。

佐治町に二台のアメリカ製のタクシーがあったのを思い出します。町中に自動車はその二台だけです。母と一緒に客用馬車に乗った記憶もおぼろげながらあります。

サーカスや映画が河原や広場でテントを張って上演されました。サーカスの去った河原に月見草が咲いて淋しい思いを致しました。荷物の運搬は馬車でした。ゆっくりと町中を行く馬車に勝手にとび乗って叱られたものです。ラッパを吹き鳴らしながら興行の宣伝の隊列が進んでゆくのも、邪気のないのどかな田園風景の一駒でありました。夏の夕方は冷房機などありませんから、皆戸毎に床几を玄関先に出して夕涼みをするのです。黄金虫が音をたてて通り過ぎるのを白扇を持って追いかけたのも楽しい思い出です。寒さがきびしく十二月から三月まではさながら氷室の中で春を待つようでした。雪達磨を作ったり雪合戦をしたのも楽しい思い出です。スキー

も極も手作りです。

何もかも遊び道具は手作りです。田舎にはゆるやかな、どこかな時が流れたものです。幸か不幸か今は望むべくもありません。

今湘南に住んでいます、私の小さな庭へ昔の友達、蜻蛉や蝶や、蟬や、黄金虫が飛んできます。小さな池へ鴨や目白や鳶や雉鳩が水を求めて飛んできます。

これらの旧友と遊んでいる一時が、私の一番幸福な時かもしれません。この怠惰な恍惚の一時、私は若き日の追憶に浸ります。

桑の実の熟する頃、一人の女性の通り過ぎるのを、ただそれだけで何時間も待った純粹な青春の日々、中学へ入学したばかりのころ、突然訪問してくれた母が観音菩薩のように見えたこと等々、追憶というものはいつも美しく楽しいものです。池に自然発生した暮の恋の季節、悟りを開いたような構えも面白いものでした。

振り返ってみると飢餓の時代もまた、飽食の時代に比して劣らず楽しかったように思います。得るものあれば失うものがあり、表があれば裏がある。物事の表裏得失は相対的なものであり、此の世には絶対というものはありません。此の世のことはすべて相対的比較の世界であり、本人がどう受けとめるか理解するかの違いであります。所詮人間は死すべきも

のであります。私は一見樂觀論者であり、時には呑気過ぎてお叱りを受けるのだが、私には寸分の邪気もなく当惑することがあります。他人の苦勞を見過ごすことのできない性質のため、 unnecessary 苦勞もありますが、また一方、何かと他人の愛情に甘え、他人に支えられて生かされて来たように思います。人との出逢いは誠に神意であり、自らの意志ではどうすることも出来ないものです。人との出逢いが人生を決するほど重大なものであることを若い人は銘記して下さい。人間大好きな私の人生にもいずれ幕が下りるでしょう。人生は芝居のようなもの、花の下にて春死なん、シラノド・ベルジュラックのような幕切れを期待致します。

育英高校の準優勝戦の勝利の校歌を聞きながら擲筆します。『山ざる』誌への多年に亘る文責を果たしほつと致しました。明日は丹波へ旅立ちます。

会誌『山ざる』への投稿を歓迎します。

『山ざる』は、同じふるさとをもつ者の、ささやかな憩いのオアシスです。異郷にあって、上を向いて歩こう、前を見つめて進もうと、ひたすらに生きている仲間たちに、ふと我に帰るひとときを、互いに分ちあう誌面です。

ぜひ書いてください、あなたの“ふるさと”を。

丹波に帰省して

谷 口 捷（水上町）

『山ざる』投稿の案内を頂きました。いつもは、そういった能力なしと、自他ともに認めており、柏原高校卒業のとき、作文能力「アヒル」を頂戴した小生としては、気にはしながら、何も出来ずに過ごしていました。しかし今回は事情が異なりました。御存知のごとく世の中不況で、特に小生の関わっているコンピュータ応用技術開発の分野では、この二十年間で未経験のひどさであります。こういうときは気にせず、遊ぶに如かずと、テニス、囲碁に精を出し、こんな歳になっても上達するものだと、認識を改めているような状態です。それにたまたま、父の二十五回忌、祖母の十七回忌の法事で帰省し、丹波のことを考えたことでもあり、作文の時間にまともになくなり、「つづく」と書いて提出した苦い思い出を振り払いながら、書いてみました。

東京での新聞に紹介されたことでもあり、ドイツ人モニカさん経営のペンションがある水上町西地区を、同級生の案内で見て回りました。そこには見学しようとして制止させられた、会員権何千万円とかのゴルフ場あり、関西地区創価学会

の巨大な霊園あり、どれも丹波人の手でなされたものではなく、果たして地域の人が潤っているのだろうか、疑問を感じざるをえない状態でした。最近都会では、ゴミの処理場に困っています。今度帰ったときには、それが造られているのではないのかと心配するのは杞憂であってほしい。その直前に、三田で、同級生の親戚という方が所有されている水車小屋を訪れ、そこでは独り占めすることなく、一般に無料公開しながら、自然を楽しみ、生活しておられるお姿を拝見したので、特にそのように感じた次第です。途中、道路が便利になった代わりに、山が所々壊され、失われたものが多いのを見て、これからは外国からの木材輸入も難しくなるので、山を大切にしたいと念じたことでした。

田舎では農業のやりてがなくなったといわれています。確かに農業のみの収入では、建設業の人の数パーセントにしかならないようで、致し方ないと思います。しかし有識者は米の自由化を当然と主張しておられます。食物に関する問題は非常に多く、特に米のように、常食としているものについては、慎重であらねばと思います。

娘の好物のバナナを家内は絶対に買いません。知人が整腸のため常食していて、神経の病に苦しんでいると聞いたからで、少々高くなってもよい、薬づけでないものをと念じているときに、コクゾウ虫が死ぬような米しか手に入らなくなれ

ば、市の農園を借り、野菜やさつまいもを作っているぐらいでは、とてもダメだと、本格的に土地探しを始めた小生のような者もいます。ぜび米作りは続けていただきたいものと思えます。

もう一つお寺の維持が困難と聞きました。小生が週二回、囑託として顔を出している(株)コーの先駆技術研究所でも、人材育成のために、江戸時代の塾を参考にしようとしています。一般には吉田松蔭の松下村塾が有名ですが、個人的には政治に無関係で純民間から自由な雰囲気のもと、しかも広い分野にわたって、多くの逸材を生みだした緒方洪庵の適塾が素晴らしいと思っています。(百瀬明治著『適塾の研究』P H P 研究所とか、『福沢諭吉自伝』を参照して下さい)

かつては真の意味での教育の場でもあったお寺です。そろそろ我々の世代で、現業を離れる有能な人たちがおられるのではないかと思います。単なる受験塾でない何かを考えてくれる人の出現を切に願っています。

この不況についても、これからはこの状態が普通なんだというのがやはり有識者の意見であります。自動車、電気製品等、なにをとってもほとんど誰もが所持しているし、新規の開発といっても、不特定多数の人にとって必需品といえる物がなかなか見あたらない。秘密書類とか紙幣のように、特殊なものはコピーできないコピー機といった、本来の目的と少

しずれたことを考えなくてはならない世の中となり、物を作れば売れた時代は過去のものと考えるべきであります。こういった世の中での生き方を、全ての日本人に要求されているのだと思います。

丹波人のご活躍を期待しています。最後に「結縁、尊縁、随縁」という言葉を身にしみて感じていることを記し、筆を置きます。(株)環境計画コーオペレーション代表取締役

中尊寺と丹波の山寺

高 見 秀 史 (市島町)

初夏の一日、仙台での仕事を終えて、みちのくの京といわれる平泉へ、はじめての足を運んだ。ここは藤原三代による栄華の治世が平安朝文化を花開かせた地。そして今は、NHK大河ドラマ「炎立つ」の舞台地として脚光を浴びている。北の国東北に頭を擡げたローカリズムの火種が、炎となって勢いを増し、ついに百年余の間、陸奥は光の国となった。ここで炎を燃した男たちを描くこのドラマにも、当地への興味をそそられた。しかし、私に最も関心があったのは、黄金の都としてよりも、ここに理想の仏国土が築かれたことであっ

た。藤原初代清衡が、東北の民をまとめる力として仏教を根底に置き、王道楽土を願って建立した中尊寺。平泉文化の基となったこの古刹を訪ねたかった。

仏教はこの時期、国を護り現世の平安を祈る法であった。それは二代基衡、三代秀衡らに受け継がれ、毛越寺など数々の寺院を建立、一大仏教王国を出現させることとなった。

仏教への関心が「炎立つ」で触発されたこともあるが、実は私は、丹波の寺院の生まれであり、本来ならば長男の故で僧職として、父の後を継ぐべきところであった。幼時から朝晩の勤行は欠かさず、十歳で得度した。そのまま素直に成長するべきが、大学進学の時点で自分の運命に疑念を抱き、大学一年で勝手に還俗、遂に勘当されてしまった。卒業後、仕事もマスコミの世界と、全くの別世界。両親への親不幸と檀



家への不義理で、長い間故郷へは顔向けができなかった。幸いにも弟の一人が後を継いでくれたので何とか救われたが、今だに自責の念に耐えない。

そんな父が、二十年ほど前、中尊寺の貫主に擬せられたことがあった。作家でもあった今東光貫主の後をというこで、大変名誉なことではあったが、父は丹波の寺を離れるわけにはいかなかったので、そのまま丹波に留まったのであった。丹波への愛着と地元の人々とのつながりがそうさせたのであろう。中尊寺は天台宗東北大本山でもあり、格式も高いため、父にすれば魅力はあったと思われるが、丹波の寺に後継者が育っていれば、つまり私の親不幸がなければ、またちがったことになっていたのかもしれない。

そんな想いとともにやって来た平泉。弁慶墓のすぐ先、中尊寺の参道へ入る。月見坂との標示があるこの表参道は、天を指すような老杉木立ちが一キロ近くも続き、かなりきつい上り坂だ。息を切らせながらやっと開けた展望台からは、古戦場だった盆地が見渡せる。そこを縫って流れる北上川は、当時の名は「日高見川」だったときいて偶然ではあるが何やら因縁めいたものを感じる。しばらくして、ようやく幾つもの堂坊、僧坊が現れてくる。その中に一際大きな本坊。そこに「中尊寺」の標柱があった。本堂へお参りし、病床の父の息災を祈る。

案内の僧侶によれば、今の貫主は江戸の再興期から数えて二十七代目。今東光師は二十五代目だった由。いろいろ説明を受ける間も相続いで参拝者の波。寺院としての静寂さが薄れている。再びご本尊に手を合せつつ、いささかの感慨を後に、やがて杉木立ちが切れて金色堂だ。拝観料の徴収で現実へ戻されながら、覆堂へ入ると、金堂は、昔、歴史の教科書で学んだ姿のまま。金箔につつまれたまばゆい輝きに息を呑む。創建当初からの唯一の遺構として、まさに平泉文化の栄華を今に伝える貴重なシンボルだ。金の産出を中心とする財力を背景に、藤原三代はそれぞれの代で「地方の時代」を築こうとし、仏教の理想郷に集まる民衆のためにも極楽浄土を目指したことに驚く。特に清衡が二十一年の歳月をかけたこの中尊寺は、当時僧坊三〇〇、堂塔四〇余りの大寺院であった。その後の野火などで多くを焼失、今日往時をしのぶものはない。建武四年の野火の際、金色堂の焼失を懸念に防いだ民衆の活躍は、仏教と人びとの連帯を物語る。

父の住む丹波の山寺は、規模と格は全く比ぶべくもなく、なぜこのような貧乏寺の和尚に白羽の矢が立ったのか不肖の息子にはよくわからないが、栄達を求めず、社会福祉事業や地元の人々とのふれ合いに意をつくした父の生きざまが比較山から評価を得てのことになったのだろうか。

みちのく・平泉に目を向けなかった父。それはちょうど、「炎立つ」の原作者高橋克彦氏が、先に直木賞を得て脚光を浴びた後も、自分の原点はみちのくにあるとして、住まいを盛岡から離れなかったが、彼のその地元の想いが、このたび黄金の王国を夢みた男たちのロマンを見事に描き上げたのだろうと思われる。父は仏教の徒として、丹波でその小さな炎を燃そうとしたのだろう。ドラマ「炎立つ」の題字は父が師と仰ぐ天台座主山田恵諦師の揮毫になる。

中尊寺の僧坊群からの下り道は裏街道。往き交う観光バスのほこりを避けながら、尚不義理を重ねている父に対して、そしてひっそりとたたずむ丹波の山寺を懐かしく、また誇らしく想い浮べながら東京への帰途についた。

感性を求めて

足立明子（永上町）

私は、この五月で東京の分野に嫁してから三十四年になります。忠臣蔵の大石蔵之助の軍学の師として知られる山鹿素行は、「およそ物必ず十年にして変ずるものなり。」と、「十年一昔」という言葉もよく使われます。

嫁いだ中野の家は、合板や新建材など住宅機器を取り扱う総合卸問屋で、当時は若い住み込みの人達が何人もいる大家族の中からの出発でした。

この環境は、私をいやおうなく変身させました。出雲弓だ、つばめだという時代で、テレビもそれこそ珍しい時代でしたから、丹波はそれはそれは遠く彼方の存在でした。

あまりの環境の違いと寂しさに当惑し、当初は自分の選択



平成5年度柏陵同窓会で、西垣和美さん（柏原高校校長）、上野重喜さんと

を責めたりもしましたが、それを支えてくれたのは、やはり丹波で生まれ育った気骨（やわらかな大自然）と青春時代に得た数々の事柄が大きくかかわっているようです。

四年生で終戦。五年生のとき軍人だった父がソ連抑留から帰国、このとき文化祭帰りの女学校三年の姉が石生の水分（みわかれ）で父にぱったり出会ったこと、父が長靴をはいて継ぎはぎのリュックサックを背負っていたこと、お父ちゃんが帰ってきたと嬉しさのあまり庭の中を走りまわったことなど、今でも鮮明に憶えています。

柏原高校への自転車通学は、私の細い体を鍛えてくれましたし、後藤校長の校庭での訓話「うっそうたる大森林の如くあらしめよ」も思い浮かんでまいります。

京都女子大での寮生活はさまざま人間模様を肌で感じながら、親鸞の教えとともに、その後の私を大きく勇気づけてくれました。

嫁家が浄土真宗だったのも何かの縁なのでしょう。佛守りをする身になって一層深く感じております。

三人の子供に恵まれて家事や育児に専念し、子育ての妙味も人並みに経て、かつての大家族から今は三人暮らしになりました。

商家での大勢の暮らしや、子育ての生活の中から、私は人の感性（触感）の尊さを知らされました。五感（味わう、聴

く、視る、嗅ぐ、触感)の中でも触感はリーダー的存在で、

他の四感を導いているように思われます。この感性によって新しい生活形態や時代が作られてきたのではないのでしょうか。

ひとつぶの水滴が止まる所なく、水の輪を広げてやがて大海へと流れこむように、永年つちかった感性にさらに磨きをかけながら限りなく広がりをもたせたいと思っています。

どんな些細なことでも感性が豊かであれば、あたたか味があり、いい暮らしにもつながってきます。それが五十路後半の心境なのかもしれません。

今年は我が母校に同級生の西垣和美校長誕生で、先日柏陵同窓会に上京され、嬉しい限りで、同級生みな諸手を挙げて祝福いたしました。

東京在住の同級生の皆さんも、それぞれに活躍され、丹波弁の飛び交う私達の会は素晴らしく、どこでも味わうことのできない人情豊かな賑やかなひとときです。それぞれの顔が見事で、この丹波の息吹きに触れたくって万難を排して集まります。今年はサロンカーで犬吠岬や銚子に小旅行を楽しみました。

お互いに健康で、いつまでもいつまでも「いい顔」して集まり、丹波をたたえたいと思っています。

丹波への熱き思い

廣瀬 安伸 (山南町)



関東氷上郷友会の皆様には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。早いもので、私も、会社の転勤で、神奈川県茅ヶ崎市へ参りまして六年目を経過するに至りました。その間、郷友会先輩諸兄のご活躍ぶり等、同

郷人の一人として、大変嬉しく拝察させて頂いてきました。今回、山ざる編集部の方より、投稿依頼を受け、筆不精の私が……との戸惑いもありましたが、丹波への思いも熱く、一大決心でペンを執る運びとなりました。

私は、山南町井原に生まれ、田辺幼稚園、小川小学校、山南中学校、柏原高校にと、思い出多き丹波で、元氣印で過ごしてまいりました。四十数年前まで振り返れば語りつくせないまでも、走馬燈のように頭を過り、心も熱くなります。幼稚園の卒園祭では、大根引きのお爺さん役を演じさせていただき、当時、優しく美しかった北山先生が、今なお鮮明に思

い浮かびます。小学生時代は、懐かしの悪友との、山川でのチャンバラごっこ等々、演歌が好きで（当時二年生）、叔母に連れられ、円応教での素人のど自慢大会に出場、そして特別賞受賞。中学時代には、部活に軟式テニスを始め、現在も現役でプレーできる基礎が作れました。

高校時代にも、好きなテニスを継続し、丹有地区大会・県大会にと、真っ黒になりながらのプレー、そしてシーズンオフ中は、八幡神社の石段を一気に駆け登ったり、ハードトレニング三昧、反吐をはきつつ、体力作りと勉強に？ 励んだものです。当時は、三田学園と一位・二位を競いつつ青春時代を謳歌してまいりました。高校在学中には、東京オリンピックや創立七十周年記念行事として当時、衆議院議員で、“丹波の黒牛”といわれた有田文部大臣をお迎えし、盛大に行事が行われたものでした。

そうした思い出多き良き丹波を離れるきっかけは就職でしたが、長男であった私は、地元の会社かJR（当時国鉄）で自宅から通勤可能なところと腹を決めておりました。ところが某家電メーカーの就職試験の紹介を受け、最初は、将来の親の面倒をも考え断わるつもりで職員室に入ったものの、断わり切れず、次回の紹介を期待し、テストケースのつもりで受験、ところが合格。今度は、後輩のことを考えると断わり切れずに入社。大阪での生産および販売実習を経て、奈良

県大和郡山市にある事業部に経理社員として配属。それ以来、二十年強、同一地域で勤務。その間、二十六歳で同郷（山南町和田）で高校の後輩であった家内と結婚し、その五年後には、山あり、川あり、田畑ありで、丹波と良く似た景観の大和郡山市内に自宅を構えました。

奈良在住中には、人生楽しいことばかりではなく、人生での苦しみ悲しみといったことも、人並み以上に体験したものです。結婚直後、実父の死去、その三十五日には私自身が高熱で倒れて入院。海外経理要員としての研修の身であったものの、その夢も儚く破れ去ったものです。そして、その四年後には、家内の母親が若くして癌で亡くなり、その告別式の翌朝には、私の母親が癌で入院、二箇月後に死去等々。ほんとうに暗く辛い日々もあったものです。“本来、明るく楽しいはずの家庭が”と考え込むこともあり、また“これではない”“と思い、我が家の宿業転換と人生観の確立を目指し、東洋哲学ともいわれた仏法をも学び、現在まで十四年を経過しました。

六年前、転居を伴う初めての転勤で、奈良（関西）を離れ、茅ヶ崎市（湘南）へ家族共々転宅してまいりました。近くには、全国的にも有名で素晴らしい湘南海岸（江ノ島）もあり、長男は高校三年、次男は中学一年に在学中で、全員元氣印で頑張っております。

私の半生を振り返って

山田 貞子（春日町）

私の勤務先は、ＪＲ東海道線辻堂駅近辺に位置する、乾電池製造会社の経理責任者として、丹波人の本領を発揮すべく、経営経理の指揮をとらさせていただいております。仕事の信条として、出来ない理由を述べる前に、出来る方法を考え実行しよう、途中で止めたら愚痴になるをモットーに、最近では93年総実労働時間千八百時間の効率経営（タイム・マネージメント）をも目指しつつ、乾電池メーカーでのナンバーワン工場、そして夢工場づくりへと、獅子奮迅の取り組みを展開いたしております。

郷里へは、なかなか帰省できなくなりましたが、お隣りの藤沢市には家内の実弟（広内康邦君）家族が在住しており、交流を深めております。昨年五月には、柏原高校時代の担任で恩師であった佐藤裕之先生の伊丹市立高校への校長就任祝賀会への参加（川西池田にて）、そしてこの六月には、永友会開催への参加（宝塚にて）等々、同窓へのコミュニケーションも、今後とも大切にしていきたい。また丹波への思い熱き関東水上郷友会の皆様、今後とも、共々のご健勝を祈りつつ、何卒よろしくご指導のほどお願い申し上げます。

昭和三十一年三月、柏原高校を卒業後、あらかじめ受験していた国家公務員試験（初級）の合格発表がありまして、私の場合は通商産業事務官として、神戸で勤務することが決まりました。丹波の山奥で生まれ育った、ずぶの田舎娘ではありましたが、憧れの都会へ出られる喜びもあり、新社会人として、大きな夢を抱いて、生活の場は神戸へと移りました。

幸い下宿先の叔母の温かい励ましもありまして、何とか順調にスタートできました。卒業早々に故郷を離れてしまったために、同窓生の方々との交流も疎遠になってしまったように思います。

その間、幸か不幸か、福知山線の中で、偶然乗り合わせた男性と将来を共にすることになりました。海あり、山あり、そして異国情緒豊かな神戸の街は、私の青春時代の思い出と共に、第二の故郷となりました。山歩き好きな夫は、六甲山をこよなく愛しました。勤続十余年にして、長男の小学校入学と長女の出生が重なりまして、この機会に自ら育児に専念しようと決意し、通産省を退職しました。時間に追われた

気ぜわしい生活から解放されて、あどけない子供の寝顔を心豊かに受けとめられる母親の幸せを実感できました。

昭和四十九年、夫の仕事の關係で、家族四人は、初めて関東へ移り住むことになりました。慣れない環境の中で、歯切れのよい会話に改めて孤独感や戸惑いを感じ、長年馴染んだ関西の温和な人柄や口調を恋しく思う日々もありました。

長女が漸く学齢期に達した頃、ふと、市の公報誌で、市職員（給食調理員）募集の記事が目にとまりました。四十歳に近い年齢になってもう一度、公務員として採用されるのなら、試験に挑戦してみました。仕事の内容も具体的に知らないうちで、今更現業職に従事することへのためらいもありましたが、運よくと申しますか、かなりの倍率のなかで合格できました。何事も前向きに、新しい分野で自分を試してみようと、再び市職員となり、市内の小学校の「給食調理員」として、勤務に就きました。

職場においては、各々の体力はさることながら調理員全員のチームワークでもって、仕事が成り立っていることを身をもって知りました。どちらかといえば、料理は苦手な方でしたが、この職業に就くことにより、調理の正しい技術と食品に関する豊富な知識を取得することが出来ました。毎日、規則正しい生活と適度に手足を動かすことにより、中高年に差しかった身体の健康維持にも繋がっているように思います。

育ち盛りの子供達の命と健康を支え、なおかつ食べる楽しさを提供する使命を深く認識し、健康が続く限り、六十歳の定年まで、栄養のバランスのとれた、おいしい給食作りに励みたいと思っております。

桐工芸や麦わら細工の生産でも有名な、緑豊かな武蔵野の郷、春日部は、私の第三の故郷として、根付きつつあります。私の心の故郷、氷上郡春日町には、既に身内は亡くなり、生家も廃墟となりました。しかし、時おり墓参に訪れる霧深い丹波の山河は美しく、柏高校歌とともに、今なお私の脳裏に深く刻み込まれております。

終戦記念日に思う

大坪 真 子（氷上町・旧姓空閑）

わたしが小学校に入学したのは昭和十九年の春であった。

わたしの家は成松小学校の真向いにあつたから、県道を横切ればそこがもう学校だったが、当時は部落毎の集団登校が義務づけられていて、わざわざ百メートルほど先の公民館前まで行き、整然と並んで軍歌を歌いながら登校した。

校門の前には高等小学校の男子生徒の当番が二名、銃剣を

捧げ持つて立っていた。列を先導する上級生が「東町X名通ります」といい、当番が「よし通れ」と言って初めて校門をくぐる事ができる。父が医者だったせいとか、わたしの家はほかの家庭より朝が遅かった。わたしと二人の姉はよく集団登校の時間に遅刻し、三人で登校した。わたしは動作が鈍かったので、姉たちにまで置いて行かれることがあった。三人で行くときは、一番上の姉が「東町三名通ります」と言ってくれるが、一人のときは自分で「東町一名通ります」と言わなければならぬ。一年生のわたしは胸をどきどきさせながら、心の中で何度も練習しながら県道を渡った。校門をくぐると天皇陛下のご真影が納められた小さな建物があった。集団であれ一人であれ、わたしたちはその前で姿勢を正し、深々とお辞儀をした。そうすることに何の疑念も感じなかった。天皇は神であり、鬼畜米英を討つことこそ神の御心に沿う正義であった。

田舎町のことで空爆の恐ろしさとは無縁だったが、それでも戦争は庶民の暮らしの隅ずみにまで影を落としていた。

わたしの父も徴兵された。出征は名誉なこととされ、「おめでとう」と送り出される。父の場合も神社で盛大な壮行式が執り行われた。ほかに数人の出征兵士が一緒だったと思う。参列者の後ろに隠れて母は泣いた。わたしも泣いた。幸い、若い頃患った結核の翳がレントゲン写真に出たとかで、父は

すぐ帰された。そして、よほど兵力が払底していたのであろう、終戦の何ヵ月前になって再び徴兵された。父の留守中、母と四人の幼い娘は町当局から当てがわれた山の斜面や河川敷を耕し、さつまいもを植えた。米のとき汁や、ときには下肥まで運んで懸命に世話をしたが、収穫できたのは小指の先ほどのお芋が数本だったのを思い出す。

終戦の玉音放送があったとき、わたしは友だちと近所の小川でどじょうをすくっていた。帰宅し、日本が戦争に負けたことを知った。寝耳に水とはまさにあのことだった。負けるはずのない神国日本が負けたのだ。しかし、わが家は好運であった。父が戦場に送られる前に帰還することができたのだから。あの戦争で父親を失った友だちも少なくなかった。

戦後五十年近く経った今、さまざまなことが次々と明るみに出てきている。従軍慰安婦のこと、強制労働のこと、生体実験のこと、南京大虐殺のこと……。終戦記念日の八月十五日、NHKで特別番組が放映され、ボツダム宣言受諾に至る日本政府と軍部の動きが詳細に報じられた。当時、わたしは戦争の意義を疑ったこともなかったが、それはわたしが幼かったせいではなかった。老いも若きも、日本中の人々が何の疑いも持たず、戦争の大義を信じていた。情報がコントロールされていたためだ。そして今、戦争の内情を知れば知るほど、その愚かさややりきれない悲しさで胸に迫る。

日本武道館で行われた政府主催の戦没者追悼式で、細川首相と土井たか子衆院議長が近隣諸国に対し初めて日本の過ちを認めたという。本当によかった。わたしたちの犯した過ちを率直に認め、自分自身にも他者にも同じ過ちを繰り返させないこと、それが「歴史に学ぶ」ということなのだから。

“ふるさと”創り

仲 一 聰（山南町）



昭和三十九年、東京オリンピックが開催された年、“氷上郷友会”のご案内を頂き、まだ学生であった私は、当日会場に行きました。

会場は、日本橋の東洋経済新報社の会議室でした。なぜ、会場が経済専門誌の会社の会議室なのか、丹波との繋がりはあるのか、不思議に思ったことを覚えています。

私の育った和田からも戦前・戦後、経済界で活躍された高橋省三、植木憲吉といった方々がおられ、経済誌との係りも

何となく理解できるように思ったのを覚えています。

いま手元にある『山ざる』第一号（昭和四十一年六月刊）のページを繰りながら、丹波と私との関係を改めて思い出しています。

昭和十九年三月、東京での何度目かの空襲の後、夜汽車に乗り、列車を乗り継いで谷川駅に着き、駅から随分長い時間歩いて、夕方和田に着いた日のことを思い出します。満四歳の時、両親と弟の四人でした（その後、弟が一人増えました）。それから私は、和田小学校、和田中学校、柏原高等学校を卒業して、昭和三十三年二月に上京するまでの十四年間で丹波で過ごしたことになります。

上京後の四十年近い年月の間に、丹波と関係ある方々との出会いを何度も経験しました。私と丹波を結びつけているのだと考えています。

私の大学時代の恩師、T先生と故人となられた氷上郷友会の伴仲元会長は譚いの会のお仲間でおられました。偶然とはいえ驚きました。

私が勤務する会社の元親会社であったM物産のU氏は、本籍が私の丹波の家の道路の真向かいであり、彼の疎開中、どうも一緒に遊んだ仲のようでした。

私と同業である会社のY営業所長の奥様は、私と同じ小学校・中学校・高校の同級生であり、また同じ町内でもありま

した。

また、会社のお得意先であるZ社では、部門は各々違いますが、高校の同級生三人がお世話になり、たまには出くわすことになります。C社のA君は、高校で同じクラスで机を並べていました。時間によっては、即同級会となるのですが、中々チャンスがないのが残念ではあります。まだ確認をしていないのですが、Z社の某部長の奥様は、同級生K氏の妹さんであるらしい。



山南町の実家から城山（岩尾城跡）を望む

そのK氏を私の友人の先輩が知っており、仕事の関係でよく会っているとのこと。

いろいろな所で、丹波が、関係ある人々を私に紹介してくれているようです。

何の関係もなかった丹波への疎開でしたが、母が丹波で健在で、もう五十年もお世話になっています。しかも今、東京で元々丹波にご縁

のある方々と巡り会え、不思議な縁を感じています。

年に何度かの丹波行き度に、私のこれからの“ふるさと”創り、“田舎”創りを考えております。多くの方々とは逆に、“ふるさと”を創りに丹波に帰るのです。

柏高卒業三十年

上田 脩（春日町）

平成四年四月二十九日、県立柏原高等学校を昭和三十七年三月に卒業した第十四回生による、卒業三十周年記念同窓会が母校にて開催された。当日一堂に会したのは、同年の卒業生五百五十六名中二百七十余名と、恩師十五名であった。卒業三十年を経て約半数もの同級生が再会できたことは大変すばらしいことであった。恩師としては、当時の校長、姉崎岩藏先生が八十八歳の高齢ながら元気なお姿をお見せ下さった。社会の吉見文憲先生、人文地理の大槻隆先生、国語の荻野巨舟先生、英語の植田憲男先生、同じく荒木逸郎先生、数学の舟川勇先生、保体の藤本幸男先生等、なつかしい顔が揃ってお見えた。また三年六組担任の由良琢郎先生も駆けつけてくださり、ホームルームをなつかしく思い出した。た

だ、保体の松尾源三先生（故）のお姿がなかったのは、誠に残念であった。松尾先生は「ボンちゃん」の通称で親しまれ、私の「柔道部」「応援団」と、高校時代の一番思い出深い部活で、ご指導を受けた先生であった。

私は、元国領村の進修小学校から明徳中学校、そして柏原高校と十八歳まで丹波で育ち、関西学院大学から社会人となった。社会人としても二十七年ほど経つ。その間、約四年の名古屋生活以外は、すべて東京での生活である。丹波大好き人間の私は、毎年八月のお盆には、欠かすことなく家族で丹波の我が家で過ごすのが恒例だ。また関西に出張の際、時間があれば田舎に立ち寄るのが楽しみである。

このような生活だから、ほとんど同級生に会う機会はなかった。今回の三十周年記念の企画で一堂に会し、なつかしい顔ぶれと出会えたのはほんとうに嬉しかった。これもひとえに、郷土にいて、この企画をしていただいた、実行委員の方々のお陰と感謝している。

さて高校時代の思い出は、たくさんあり、話せばつきることがない。しかし、特筆すべきことといえば、我々の同級生が第三十三回選抜高校野球大会に出場したことであり、当時柔道部にいた私が応援団長に任ぜられ、甲子園球場の丹波一色のアルプススタンドで精いっぱい応援をしたことである。

昭和三十六年二月六日午前十一時より、毎日新聞の大阪本

社で開催された選考委員会で、晴れの三十三校が決定され、その中に柏原高校が選ばれたのだった。柏原高校の前身、柏原中学校が明治三十年四月に創立、また、野球部が大正五年に開設されて以来初の快挙であった。当時の野球部は、木真部長、浜田監督のもと部員はなんと十四名という小世帯であった。部員の内、投手の井尻君、二塁手の足立君、三塁手の前川君は私も野球部員であった明徳中時代、丹有地区代表として県大会に出場したメンバーである。

従来柏原高校で応援といえば、一部の有志達がリーダーとなり応援に努めていたが、正式な応援団というものは結成されたことがなかった。松尾源三先生のもと、応援団のリーダーとして、各学年より選抜された男十三人、女子六人のレギュラーは、柏原高校OBで、前関学応援団長の前田氏より、一から、手とり足とり、コーチを受けた。

三月二十九日の大会第一日の第三試合、一塁側アルプススタンドに陣取った応援団は、約四千人と広いスタンドいっぱい膨れあがった。柏原町民の総数は当時八千人といわれていたから、まさに町ぐるみの応援であった。プラスバンドも篠山鳳鳴高校、三田学園高校から友情参加していただき、総勢七十五人の大世帯となった。試合の結果は、井尻投手の好投むなしく、現ロツテ監督の八木沢投手を擁した作新学院に二対〇で惜敗した。

選抜高校野球大会への初出場は残念な結果に終わった。しかし、私はこの出来事が柏原高校の校風を一変させる大きな引き金になったに相違ないと信じている。

その当時言われていた校風とは「開校当時から校訓『質実剛健・自治創造』の精神が受けつがれており、生徒気質もいたって地味、黙々と働き続ける『丹波牛』にも似た忍耐力で勉学に励む素朴な姿が大きな特色。また反面、都会地に比べておとなしすぎ、積極性と気迫にやや欠けるきらいがある」といわれるものであった。しかし選抜高校野球大会で全国二十三校に選ばれ、甲子園球場に出場したことが大きな引き金になり、これまで足りなかった積極性を全校の生徒に植えつけ、郡部の高校という劣等感を取り除いたことは、大きな貢献であったと確信する。

還暦からの再出発

北村 貞子（柏原町・旧姓大野）

私も今年で還暦を迎えます。そんなに歳月が過ぎたとは思えませんし、一方アツという間だったというのが実感です。キンさんギンさんを頂点とした高齢化の中にあつて、「なお

死ぬまで元気だ」との健康志向ブームにあおられて、私も体によいといわれる漢方薬を愛用したり運動したり、お陰さまで健康そのものの、何よりの幸せと感じています。

先日もある方が「喜寿の祝い」を人生まだまだこれからだとのお気持ちから断わられたとのお話を聞きし、一歩も二歩も手前の「還暦の祝い」を子供たちから言われても断わるつもりでいます。

昨年はタイ、今年はスペイン、南フランスへ行っていました。異文化、異文明を肌で感じますと、日本のことさえ知らないことばかりという思いが一層つのり、還暦を境に習いごとも含めて、心新たに再出発をと心に期している昨今です。

郷友のみなさまへ——たとえ10行でも20行でも、『山ざる』誌に何かお書きください。文章が苦手だなんて考えず、話し言葉でいいんです。おしゃべりそのままがいいんです。書きはじめたらあのことこのこと、きつとつきないはずですよ。郷友会事務局へお送りいただければ、あとは編集者におまかせを。25号の締切りは平成六年八月上旬。写真もどうぞ。

古稀に思う

生 田 正 輝 (柏原町)

去る五月十二日には、私の古稀を祝つての盛大なパーティーを、慶應義塾大学の教え子たちを中心に、銀座の交詢社で催してもらった。また、六月九日には皇太子殿下の結婚の儀に、十六日には饗宴の儀に、それぞれ家内ともどもお招きをいただく光栄に浴することができた。まことに有難く、また嬉しく感じた次第であるが、同時に七十歳という年齢をあらためて認識し、これまでの人生がしみじみ思われたことも偽らざるところである。

お祝いの席上、ある人のいうには、「昔は『古来稀なり』ということであったが、今はむしろ『昔は稀なりき』と読むべきであり、人生七十などはあまりめずらしいことではない」と。たしかに、その通りであり、かつて古稀をお祝いした先輩たちに比べれば、私自身まだまだ若いと感ずるのであるが、やはりこれまでの七十年の過ごし方は、決して平坦なもので

はなかったと思うことも事実である。

顧みれば、旧制柏原中学を卒業し、筈を負つてというほどのものではなかったかもしれないが、上京したのが昭和十五年のことである。したがって、私のこれまでの人生の大半は東京で過ごしたことになる。この間に折に触れて故郷の風景や人びとのことを思わないではなかったが、何かと多忙にまぎれてついつい無沙汰に打ち過ぎてしまった。ことに、一人下小倉の旧宅に残していた母が、一昨年八十九歳の生涯を閉じてからは、故郷との連絡もとだえがちで申しわけなく思っている。

今年の七月には、母校柏原高校の創立百周年ということで、記念事業の募金の件で、中学時代の友人からの手紙や電話に接したが、それも久しぶりのことで大変なつかしく思った。七十ともなつて、別にあくせくすることもないと考えているが、どうも思ったほどにはひまにならないのが現状で、両親の展墓もままならないとなげいている今日この頃である。

上京後、慶應義塾大学予科に入学し、昭和十八年の学徒動員による軍隊生活をはさんで、二度にわたる学生生活を経て、ようやく法学部政治学科を卒業したのが昭和二十二年の九月

である。ただちに、助手として大学に残り学生生活に入ったが、昭和六十三年に名誉教授となるまで、実に四十年余も慶應義塾の教壇に立っていたことになる。この間、法学部長、新聞研究所長、慶應義塾常任理事、同塾長代理、あるいは日本新聞学会会長等のいろいろな仕事に携わってきた。

また、昭和五十八年からは、慶應義塾に在籍しながら二足のわらじをはいて、水戸にある常磐大学の創設に携わってきたが、これも本年創立十周年を迎え、大学院も博士課程まで設立することができ、ほぼ目的を達した。それを機に、古稀となったということもあって、辞任を申し出たが、なかなか許してもらえず、それでもこの四月からは、大学院人間科学研究科科長だけを残し、他の役職から引退することになった。何となく私の履歴書を綴って来たようになってしまったが、他意はなく、丹波から出て来て今日までの経過をあらためて郷里の皆様にご報告したいと思ったからである。これが、日頃ご無沙汰をしている方がたへのお便りのかわりであるところご理解いただければ、誠に幸いだといわざるを得ないのである。このようなわけで、いわば本職である大学関係あるいは学界関係では、財団法人情報通信学会の副会長以外は、ほとんど引退することができた。その結果、前にも述べたように、ひまを得て大いに余生を楽しみたいと考えていたが、なかなか思う通りにならず、家内からも文句をつけられている次第

である。

というのも、郵政省電波監理審議会会長をはじめとする各種の政府審議会、調査研究会の仕事、財団法人日本ユニフォーム・センター会長、省エネ・フォーラム21理事長、BRBフォーラム代表理事等々の社会的、公共的な役割が何となく増加してきたからである。しかし、これも老後の奉仕であるということまで致し方ないのかもしれない。また、長年にわたって情報通信、マス・コミュニケーションなどの研究に携わってきた私としては、この辺でライフ・ワークともいうべきものをまとめたという気持ちも決して失ってはいないが、果たして成就するかどうか、いささか心もとない次第である。

ともあれ、これからは出来得る限りひまをつくって余生を楽しむとともに、故郷にも大いに足を延ばしたいとひそかに考えている。丹波の山なみも、まだ残っている生家のたたずまいも、なお鮮烈に脳裏に残っている。年と共に思い起こされ、なつかしさが増してくるが、それが故郷というものであらうか。

南米滞在十七年

前田 武彦（春日町）

今年の梅雨の頃、四年ぶりに海外勤務から帰国し、空き家になっていた我が家に入りましたら、沢山の郵便物の中に貴誌からの原稿執筆依頼がありました。

海外在勤中は、貴誌により丹波の古い時代のこと等、興味深く読ませて頂き、私としまして、貴誌に何かお役に立つべき、と思いペンを取る次第です。

この六月に帰国しましたが、振り返ってみますと、主に南米に通算十七年間滞在中に於いてのことになります。京都で学生生活を過ごしている頃、途上国で仕事をしてみたいものだと思ひ、現国際協力事業団の前身に奉職し、以来日本での生活より海外での滞在の方が長くなってしまいました。仕事から、ボリヴィア、アルゼンティン、ブラジル、パラグアイと後進国で過ごしてきました。

帰国直前まで住んでいました所は、パラグアイの南、エンカルナシオン市という国境の都市で、大河パラナ河を挟んで対岸にはアルゼンティンのポサダスという都市があります。

た。

エンカルナシオン市はパラグアイ第三の都市とはいえ、人口は五万人程度に過ぎず、小国の小さな都市ですから、ご存じの方は少ないであろうと思います。

しかも、この小さな都市が、近代世界史の裏面史に関与させられてきたことを知る人は、もっと少ないかも知れません。エンカルナシオン市が世界史と係わるようになったのは、国が公式に認めた訳ではありませんが、パラグアイが第二次世界大戦後元ナチの要人を庇護した南米諸国の内の一国で、このエンカルナシオン市とこの近郊に元ナチ要人が隠れ住んだが故でした。

この辺りは、ドイツ系コロニーが多く、又危機が迫った時容易に国境を行き来できたからであろうと思います。

パラグアイは、一九五四年から一九八九年まで実に三四年間に亘り、ドイツ系のストロエスネルという大統領が独裁的に統治し、新聞報道によりますと、彼が配下の秘密警察と軍によりナチの残党を保護したと言われています。

ナチ残党の秘密組織に「オデッサの組織」というのがあり、南米ではポルトアレグレともう一つの拠点が、このパラグアイにあったと言われます。

私が住んでいたエンカルナシオン市から、プロジェクトサイトに行く途中に、古めかしいチロルというリゾートホテル

がありますが、ここもナチの残党が逗留していたということ
で有名でした。私は、日本から来客があると、このホテルに
案内し昼食をとるのが常で、元ナチの隠れ家であったと説明
するのが得意でした。

南米に隠れ住んだ元ナチで有名なのに、ブエノスアイレス
の近郊で捕まったアドルフ・アイヒマンがいます。アイヒ
マンには妻の誕生日に花束を贈る習慣があり、それが決め手
となってイスラエルのコマンドに拉致され、潜水艦でイスラ
エルに送られ、法廷に引き出されたのでした。

このアイヒマンの逮捕を指揮したのはイスラエルのイッセ
ル・ハールという人物で、彼は、元アウシュビッツ収容所
長で「死の天使」と呼ばれたジョセフ・メンゲレを、このエ
ンカルナシオンで逮捕寸前まで追い詰めるのですが、パラグ
アイ秘密警察の厚いガードに阻まれ拉致に失敗しました。

この時、イスラエルの女性秘密機関員がメンゲレをボサー
ダスへ誘い出す手はずになっていたいて、ボサーダスではイスラ
エルの秘密機関員が待機していたのですが、直前になってメ
ンゲレはその場を逃れ、又その女性機関員は何者かによって
葬りられました。

その後メンゲレはドイツ系の多いブラジルに入りました。

一九八五年になって、メンゲレの足跡を執拗に追いかけて
いたブラジル警察のロメオ・トゥーマという男の執念の結果、

一九七九年にサンパウロに近い海岸で溺死し、エムブーの墓
に埋葬されていた男の遺骸が掘り出されました。そして、イ
スラエルから依頼された十一人からなる法医学の専門家グルー
プによって、その遺骸がメンゲレのものであることが検証さ
れました。

このほかニュールンベルグ裁判で死刑判決を受けたマルティ
ン・ボルマンもパラグアイへ逃げこみ、イタの墓地に埋葬さ
れているという情報があります。

帰国する少し前、私はエンカルナシオンの行きつけの床屋
で、その頃特集されたナチに関する新聞記事を読んでいまし
た。

すると突然、その床屋のオヤジは「ワシはメンゲレの頭を
刈っていたヨ。ウォルマンという名で医者をやっていたヨ。
温和な人柄でとても大量殺戮者とは思えなかったナ」と話し
かけてきました。

私は、身近な所に歴史上の人物を知っていることにしば
し啞然とするとともに、メンゲレの頭を刈った同じ床屋の同
じイスで同じ人物によって頭を刈ってもらっているのが意外
であり、世界の近代史を身近に感じないわけにはゆきません
でした。

上山顯著『様々な出会い』を読んで

坂本重雄（柏原町）

柏陵同窓会東京支部長・上山顯さんの「出版と米寿をお祝する会」が、一九九二年四月九日、九段会館で開催された。労働法や社会保障の研究に従事し、本書から深い感銘を受けながら、祝賀会にも出席できなかった者として、遅ればせながら、読後感を記させて頂きたいと思います。

一、昭和二年に内務省に採用され、第二次大戦後の混乱期の占領体制下で、厚生省保険局長、労働省職業安定局長の要職を歴任された上山顯さんは、医療保険、失業保険、労災補償保険の制定・発展に大きな功績を残された。

その現職時代、退職後永きにわたる、健保連、政府関係の審査会、審議会、調査会等における公職での貴重な体験を回想して、上山さんは、一九七五年古稀を記念して、『回想と覚書』（社会保険新報社刊）を出版された。

それから十数年を経て、このたび米寿（八十七歳）記念として、その後『山ざる』誌等に掲載された数稿に、新稿や巻頭写真を加え、旧著から約十編を削り、新著『様々な出会い』（ホンゴ出版）を公刊された。本書は、三部からなり、I

は、随想ふうにな若い時代からの読書や生活のテーマをまとめ、IIは、趣味と自称されるが造詣の深い「美術鑑賞」に関するもの、とくに『山ざる』誌上掲載の三編と新稿「展覧会図録のコレクション」を加えており、IIIでは、現役時代とその後十五年以上にわたる労働行政、社会保障行政に関する公職を通じての貴重な体験の回想と記録をまとめられている。以下では、IIIの論稿に限って感想を述べることにしたい。

二、第二次大戦後、時代と社会の激動、転換の時期に厚生省保険局長として、軍人恩給廃止に伴う善後措置、インフレ下の医療保険の崩壊阻止、さらに労働省職業安定局長として、職業安定法、失業保険法の立案、制定など、占領体制下で総司令部との折衝という大変な苦勞が語られる。制定後十年余を経て刊行される『十年史』での記述は、制定後の運用の問題点にも言及され、正確な記憶に基づく回想の記録として、後学にとって貴重な立法資料であるといえよう。

厚生省退官後、健康保険組合連合会の常務理事に就任され、健康保険をはじめとする社会保障制度の発展への政府計画に協力され、『社会保障年鑑』の発行、健保連の調査部や研究室は、社会保障の研究調査に今日まで大きく寄与している。私自身、社会保障法の研究に関して健保連から多くの便宜を受け、四年前から『年鑑』の編集委員会に参加している。

三、労働保険審査会会長（昭三十一―四十年）としての貴重

な体験は、労作『労働保険裁決例解説』（有斐閣、昭四十二年）として集大成された。同書は、労災補償保険の業務上、外の認定を中心とし、失業保険をも含め、注目すべき代表的な裁決例八四件を選んで系統的に配列し体系的にまとめた文献である。この専門分野では先駆的な研究成果であり、この労作の意図と労苦の一端が「審査会のことども」のなかで語られている。通勤途上災害保護制度の発足（昭四十八年）に先立って設置された同調査会の会長として、その設置後の経緯については、巻末の四〇頁にわたり詳細に述べられ、労・使・公益の三者構成の機関において全員一致の意見をとりまとめる役割を見事に果たされている。

労災保険裁決の著作や通勤途上事故保護制度調査会のお仕事での上山さんの労災事故への姿勢や対応は、労災立法・行政の担当責任者として立派であり、極めて説得力がある。この成果のあと、一九八〇年代以降、労働災害は質量ともに多発しはじめ、近年では「過労死」は日本の労働災害の実態を象徴する国際語となり、企業や労働行政側の労災への取り組みの遅れや不備への批判が強まっていることは周知の事実といえよう。

四『様々な出会い』は、やきものや社会保障との出会いを契機とする随想に由来していると思われるが、公の仕事、趣味と生活、人間関係をいずれに対してもその出会いを真剣に

受けとめ、郷土出身の優れた行政官としての活動、実績を積み重ねながら、素晴らしい教養人としての人格を形成されていく過程が、本書の一つ一つの論稿から感じとることができよう。

厚生省退官後も現職時代と変らぬ貴重な公務活動を継続し、古稀を迎えられる頃まで健康に活躍され、このたびの米寿記念の新著において新稿を加えるなど、不断に意欲的な生き方を実践されている大先輩として敬服せざるを得ない。これからもこの新著からの多くの御教示を期待するとともに、上山さんのご健康とご多幸をお祈り致します。

（柏原高三回卒、静岡大学教授、日本労働法学会代表理事）

真理を求める旅人

池田 達人（永上町）

いつも『山ざる』を拝見し、なつかしく思っております。沢山の記事を集め、このように立派な本に仕上げ、無料で送付していただき、感謝しております。

私も四十歳を過ぎますと、今までの人生、これでよかったのかと振り返る毎日です。これがもう六十歳、七十歳を過ぎ、

あと何年生きられるかと思うと、なおさら自分の人生を振り返り色々と考えられることでしょう。若い者は今自分の歩んでいる道がこれでよいのかと、迷われることはないでしょうか。先日一家六人が車内で排ガスを引き込み心中されましたね、あとで借金苦によると新聞に出ておりましたが、「何も借金で死ぬことはないじゃないか」、これを田舎では「金ぐらいで何いうとんじやい」となりますが、しかしこれは、お金の苦労をしたことがない人の言いぶんで、このご家族にすれば考えに考えた末に、奥さんも子供たちもきつと理解してくれたのではないのでしょうか、私達には彼らの苦しみをどんなに理解できるでしょうか。

人間は金、出世、又、家族の幸せなどあらゆる事に人生をかけ、又生きてゆくものです。これを哀れだとは思っても言えません。真理とは何であろうか、キエルケゴールという方は「真理とはその為に生き又その為に死ぬるものである」と言われました。又、トルストイは、「親はなくとも子は育つ、神がなくては生きてはゆけぬ」と言われております。私達は、真理を求める旅人ではないでしょうか。では、それを教えてくれる方がいかなーと考えますと、いました。私達の郷土の先輩で高崎に住んでおられる太田牧師です。皆様も一度、日曜日に先生を訪ねられることをおすすめします。先生は、きつと真理についてお話ししてくださること

でしょう。

では、最後に私の知り合いが書いた詩をご紹介します。終わりにします。

たんぼぼ 星野 富弘

いつだったか、きみたちが
空をとんでゆくのを見たよ

風に吹かれて、ただひとつのものを持って

旅する姿が嬉しくてならなかったよ

人間だって どうしても

必要なものは ただひとつ

私も余分なものをすてれば

空をとべるような気がしたよ

中高年とダンス

大垣 忠 男（山南町）

ダンスと言えば、知らない人はすぐに薄暗いナイトクラブで男女が抱擁しているあの映画やテレビドラマなどでジメジメしたシーンを連想されることでしょう。我々のダンスはそれとは多少異なり、正しい姿勢で男女が組む、これをホール

ド Hold といつて抱擁エンブレース Embrace とは明確に區別しています。社交ダンス（欧米では社交ダンス、ソシアルダンス Social Dance という言葉はありません。これは和製英語でボールルームダンス Ball room Dance と呼ばれています。）という世間の人は概して偏見をもっています。人から聞いた話ですが、ある会社の社長さんが銀行からの融資を受ける際に、趣味がダンスだということが銀行に知られて、その会社への融資に難色を示したとか、嘘のようなほんとうの話であります。

私はダンスが健康増進、ストレス解消に役立つと思って軽い気持ちで始めたのですが、それが運のつき、ダンスは麻薬、すっかりその魅力にとりつかれてしまいました。これからの高齢化社会、中高年の生涯スポーツとして健康維持増進に、ダンスは最高のスポーツと思っています。そこでダンスの効用について、

一、脳溢血、心臓発作等、急死の事故例を殆ど聞いたことがない。（ゴルフやジョギングではたまに聞く）

二、自分で運動量を調節できる。

三、足だけでなくボディ、腕、頭部の全身運動になる。

四、次第に高度な複雑な運動ができるようになる。

五、老年者でも楽しく行っている。

六、音楽が楽しい。

七、長期間続けていると、次第によい姿勢になる。
八、社交に役立つ。

九、技術的に高度になれば美的表現の追求ができる。
十、更に高度になれば創作もできる。

（日本医事新報 第三三六六号 昭和六三・一〇・二四
産業医・労働衛生コンサルタント・三宅先生の「私のダンス考」より）

今や日本のダンス人口は、一〇〇〇万人とも一五〇〇万人ともいわれています。ダンスブームの到来、そのダンス人口の大きな基盤となっているのが、全国各地の公民館やスポーツ施設、学校の体育館などを会場にして活動しているサークルです。やつと大きく胸を張れるスポーツとして、芸術性を帯びた文化として、社会的に認識されるようになりました。お堅い自衛隊さんも駐屯地（市ヶ谷駐屯地など）での練習風景が誌上やテレビで紹介されるようになりました。更に加えて、文部省認可の財団法人「日本ボールルームダンス連盟」が昨年設立されて活動を開始しました。すなわちダンスが学校教育の一環として取り上げられ、近い将来、国体やオリンピックの正式種目となるのも夢ではないということです。（ジュニアスクールの開設、日本体育協会への加盟などの準備が着々と進んでいます）

スポーツにもいろいろありますが、男女が交流し、しかも

高度な芸術性をも加味できるスポーツはダンスしかありません。またフォーメイションダンス部門など国際親善にも貢献しているサークルもいくつかあるようです。

ダンスの楽しさは、私ごとやかく、くどくどと説明してもこればかりは体験した者でなければわかりません。私の友人でもダンスに偏見を抱き見向きもしなかった者が、ダンスの楽しさに魅せられゴルフなどの趣味から転向した者が何人もいます。皆さんもチャンスがあったらぜひ一度チャレンジしてみてください。日本チャンピオンでもはじめは初心者、少しは辛抱が肝要です。

ところで私は今、我が家の近くの大田区立雪谷文化センターで毎週日曜日、午後一時より四時三十分まで、大田区教育委員会承認のダンスサークルで中高年を対象に指導しながら楽しんでいきます。現在は、まだ会社勤めのサラリーマンですが、来年は満六十五歳、年金受給生活者となります。家庭で粗大ごみ扱いされないように、ダンスという趣味を活かしながら地域社会の中・高齢者の健康維持と人々の交流の輪を更に広げつつお役に立てばと願っています。

情緒不安を克服して

岡 原 裕 泰（柏原町）

昭和三十四年柏高を卒業、田舎で一年間浪人生活をいたしました。昭和三十五年以来東京で生活をいたしております。昭和四十二年、二十五歳で結婚し、娘が昨年三月結婚、五十歳にして「おじいちゃん」とあいなりました。若いときは仕事柄、子供達の面倒も見やれず、今は孫娘に罪滅ぼしを兼ねて、それは優しい好々爺になりました。

年には勝てないと申しますが、健康面でも色々不都合が起きております。二十年来、健康管理のつもりで、サイクリングなどをやっておりますが、その爽快さ故に、腰痛との因果関係など最近まで露とも疑わなかったのですが、これが大変です。最近やっと整形外科にかかったのですが、幸い腰椎等の損傷はないとのことですが、痛みが生じたときは対症療法しかない、根本的には体重を減らすしかないと宣告されました。また悪いことに右足の膝痛を併発、医者のお勧めもあり、現在は通勤時などは杖を頼りにしています。

ここまで申し上げると、大変不自由な生活を強いられるとおもいかもれませんが左にあらず。右手の杖に体重を

預け、一ストローク四歩前進のリズミカルなこと、前よりも歩く速さは優っております。さすがに手に荷物を持つことはできませんので、背広にリュックのスタイルです。ここで粋なハンチングが頭に乗つかれば、ちよいとした有閑紳士といったところでしょう。

健康と言えば、躁鬱の気がある私は春五月ともなると落ち込みが激しく一番嫌な時期だったのですが、これがある時克服したことをお話ししましょう。

もう十年にもなるでしょうか、五月三日の憲法記念日にNHKが特別番組を編成しました。旧日活が政界の主要人物の演説を撮影していたものを中心に構成したものです。反軍演説として勇名を馳せた斎藤隆夫（兵庫県出身）のことは、噂では知っておりましたが、この番組でしっかりと聞いたのです。裂帛の、気迫に満ちた演説は、国民の知らぬところで軍部が行っている横暴を糾弾するもので、軍部が国民を蔑ろにしているところを鋭くついています。反軍というよりも軍部の姿勢をただす肅軍演説と言うべきでしょうか。

私はこの演説を聞き、勇気が漲り、心晴れる思いがしたのです。それ以来、私の情緒不安定は治まりました。NHKからこの番組は発売されておりますので、興味ある方はぜひ視聴してください（「昭和の名演説・激動期の政治家達」）。斉藤の偉大さ、真の勇気とは何かがしっかりと伝わってきます。

す。

父が大変な読書家でしたので、小学校低学年のころから手当たり次第に本箱を漁りました。最初のうちは小川未明、巖谷小波などが中心でしたが、芥川龍之介、夏目漱石、吉川英治など、小学五年には改造社、六興出版の小説の類いはあらかた読破していました。中学時代は、兄が教職に就いたこともあり、河出書房の文学全集などが身近にあり、これらにも熱中、かの有名な伊藤整翻訳の『チャタレイ夫人の恋人』を読んだのは中学二年のことでした。大人のことは何でも分かっているとはばかりの、なんともこまっちゃくれた子供だったなと今にして赤面する次第です。そんな環境で育ちましたから、将来は文筆で身を立てたいなどと恐れを知らぬ希望を抱いたものです。

大学卒業後は放送局で働いております。著作権、番組制作、番組広報、洋画の吹き替え、コンピュータオペレーションなどをやりまして、五年前から査査の仕事をしております。放送基準に則り、番組、CMのチェックをします。人権、職業差別、女性蔑視、法規違反、人種差別、心身障害者差別、政治的公正、公序良俗などいろいろな観点から番組、CMをただしていくのです。現場からは検察官のように嫌われることもあります。放送の質的向上のため敢えて憎まれ役をとめています。ドラマなど事前に台本をチェックしている

ものですから、筋が見えておりまして、うちでテレビを見て
いるとき、展開をちよいとしゃべったりして女房に嫌な顔を
されることがあります。

勤めながらもその気になれば、少年時代の夢の万分の一も
かなえられたでしょうに、平凡なサラリーマンとしてあと数
年、次はヴァガボンを決め込もうと思っています。

君が振るあまりに白き手が哀し

―田舎の駅が夕日に赤く染まる二月の思い出―

父と私と就職と

本 城 英 明 (氷上町)

関東に住むようになってから十六年が過ぎ、平成五年五
月より十七年目に入っています。

生まれてから高校を卒業するまでの間、丹波で生活してい
た私にとっては、あとしばらくすると当然のことながら、関
東での暮しが丹波で過ごした期間を上回ることになります。

昭和四十八年に大学四年生だった私は(大学生時代は大阪
市内に住んでいました)、父親に「ねえ、就職はどないした
らええの?」と聞きますと、答えは、「ワシに任せとけ」

でした。

任せたのはいいのですが、ちっともそのような話題が出て
こないまま年は明け、昭和四十九年も三月に入ったある日、
「おまえ心理学科卒業やから、精神病院でやったら使うてく
れるやろ。明日その理事長のところへ会いに行こう」と、父
親に言われました。そして、お世話になる精神病院の理事長
宅を父と訪ねました。

「こいつが私の息子です。大学と家との間にある道しか知
らん人間です。給料はいりませんよってに、二年くらい使う
てもらいたいんですけど」と父が頼みますと、相手の理事長
は「わかりました。給料と仕事の内容は事務長と相談して決
めますわ。ほなら四月一日が今年は大安ですよってに、その
日から来とくなはれ」と答えられました。そのようなわずか
な会話で就職は決まりました。

私が今でも忘れられないのは、初月給のときです。理事長
の妹という人より、「本城さん。今月の給料を見て明日から
仕事に來ないなんて言わないでね」と言われて、貰った給料
袋を開けると中には三万五千円が入っていました。それで私
は大感激したことです。

父親が理事長に依頼した二年間という期限が近づいた昭和
五十一年三月十七日、転勤で関西を離れていた父親が私のと
ころへ姿を見せ、「ワシの大好きな人が建てとった病院が出

来上がった。五月くらいからやったら仕事が出来るやろからそこへ行け。理事長の方にはワシの方から言うとかくからそれから新しい病院の場所は埼玉県越谷市や」と言いました。その言葉で次の職場場所に移ることになり、同時に関東での生活が始まることになりました。

時は流れ、私の就職を決めてくれた父はすでに亡く、平成五年五月三日、丹波の実家で父を偲び法要を行いました。

転勤に想う

増井 攻（山南町）

二十三年前、今の家内に「勤務地はどこですか」と聞かれ、「広島、神戸、横須賀ぐらいです」と答えて、なんとか結婚の条件を満了したのですが、その後、転勤十回の内訳に、青森はあっても神戸はなく、「契約違反よ」ということになっているが、幸いここ十年余りは横浜の自宅から通勤しているため執行猶予中である。次の勤務地が長崎から青森であれば「単身でどうぞ」とテレビドラマが明日の我が身となること間違いなしというのが現状である。

思い出に残る転勤は、十七年前の四月一日にむつ市勤務と

なり、五歳と三歳の子供を連れて赴任したことである。上野発の夜行列車を野辺地駅で降り、二時間近い待合わせののち二両編成の列車で下北半島を北上した時のことは、未だに鮮かな記憶である。北国の駅のアナウンスが外国語のようで理解できず、二人で顔を見合わせて「なんていうた？わかった？」首を横に振るのもどかしく、時計と時刻表を交互にしばらく見つめて、信じられないことに二時間近くも北国の早朝、売店もないところで待たなければならなかったこと。砂ぼこりが舞う駅前をうろうろし、やっと見つけた店の二階で、建物が風で揺れるのを感じながらインスタントコーヒーをすったこと。昨日まで住んでいた横浜は桜の花が満開であったのに、車窓から眺める風景は一面の雪原と強風で見にくくゆがんだ松林という白黒の世界で、自分が馴れ親しんだ風景とは大きな違いだったことなど。

地方勤務は長い観光旅行と考えれば楽しいものである。その年は花見の時期がもう一度あった。しかし二度目は、桜だけでなく、梅などを含めたあらゆる木々の花が一度に開花し、同時に若葉も芽を出すという、珍しい状況が普通のこととしてあったのだ。春においては梅が始まり、桜で春に入り、新芽とともに藤の花で春から初夏へと移る、これが四季というものなのに、草木は同じでも、どこかが違っている。

夏の朝、イカ売りの掛け声を、スイカ売りと間違えて家を

飛び出した妻が、手ぶらで帰ってきて、「イカだって」「イカでもないじゃないか」でまた飛び出し、今朝水揚げしたばかりのイカを何杯かうれしそうに求めてきたものだった。スイカ売りは知っていてもイカ売りの行商は初めてであり、地方の特産を安く地元分配到この地方特有のものである。採りたてのイカは美味しいが、釣るのもまた面白い。岸壁から疑似針でする夜釣りは、まさにゲームである。面倒なエサつけもいらず、入れて微かな手の感触で竿を上げると、逆さまにイカが揚げてくる。バケツに半分ほど採れる。イカ素麺が美味しい。

青森の夜明けは早い。丹波とは一時間ほど早いのではないだろうか。朝食前に家族と海岸を散歩することがあった。ある朝知りあいの漁師にもらった鰯かれ一尾、夕方組板の上で跳ねたために、妻が「キャー」と悲鳴をあげながら包丁を持ったまま部屋に飛び込んできた。鮒や鰯とはちがうんだなと感心したものだ。

冬の朝五時起きで、昨晩積もった雪の除雪作業がある。時には胸元まである場合もある。この雪をスコップで除くのだが、間違っても風上とか、高い所に揚げてはならない。発泡スチロールのようなもので、また自分のところに戻ってくるのだ。この雪では雪ダルマはできない。子供達のため雪ダルマをと、雪ダンゴからコロコロやってみても大きくなら

ない。そのうちダンゴもなくなる。だから雪合戦もできない。スキーかソリが唯一の雪の活用法である。飲んで帰るとき、決して近道をしてはいけなさと教わった。雪は一面を覆いかくして美しいが、その下には何があるが解らないのだ。肥溜めの中に落ちた人もよくいる。そんな時は、きつねに騙されただでことすます。これはどの地方でも同じである。結局二年少しいても、地元の人達が仲間どうして話す内容は、十分に理解できるまでにはならなかった。

故郷は自分を確認するところ。

田舎に住んでいた期間より異郷の生活が長くなった私であるが、たまに帰郷すると、丹波の風景やおいを肌で感じ、何かほっとする。しかし子供達を田舎に連れて行っても故郷にはならない。親達のご都合である。

「お父さん、田舎の本がきていますよ」、いつの頃からか我家にも『山ざる』がくる。「いいわね、お父さんは、……いろいろあつて。」このいろいろとは、『山ざる』、柏陵新聞に加え、同窓会、郷友会が毎年あることで、故郷との繋がりが強いことをいっており、「九段会館に行ってくるよ」に對する和田山出身の妻がとる表現である。お土産を持って帰るとニコニコして「丹波の黒豆が一番ね」とご機嫌顔である。これからもずっと続くことを願っている。

私の経歴

久安敏夫（柏原町）

昭和二年三月、私は柏原中学を卒業と同時に、東京築地の海軍経理学校へ入学、昭和六年に同校を卒業しました。以来海軍々籍に属し、昭和二十年三月には海軍主計中佐をもって終戦を迎えましたが、その間軍需省の設立とともに軍需官を命ぜられ、主として軍需物資のアルミニウム等の生産確保に努力いたしました。

そのころ特に通産省鉱山局においては航空機増産のためにアルミニウム用原鉱石の確保に問題が集中、 Al_2O_3 の原鉱石の開発・精練等のために金山の選鉱設備を活用することに決しました。

私は軍需省通産局の一員として、この設備を有する北朝鮮の雲山大雄洞（日本鉱業所有）の設備および北海道鴻の舞金山（住友鉱山所有）の設備を至急に解体移設することとなり、その交渉に北朝鮮総督府に出張しました。零下二十度の寒中に突貫工事を施工、また北海道・鴻の舞金山の設備移動も特急工事にて、それらの施設を伊豆の宇久須鉱山に移設していたのですが、その中途、清水港において米軍の爆撃を受け、

すべては烏有に帰しました。

また石炭の生産促進のためにも従事、九州三井炭鉱にも出張するなど、努力を重ねたものですが、これもあまり効果があがらなかったものです。

終戦とともにしばらく浪人生活をしておりましたが、そのうち航空自衛隊に復帰、調達実施本部（防衛庁）厚計部隊長として航空自衛隊再建のため、新規航空機の調達に努力しました。その後年齢の関係で予備役に編入され、退職後は日本航空電子工業に就職しましたが、昭和五十六年、老年のために退職、その後は一応税理士として登録、辛うじて生活いたしておりましたが、いまは年すでに八十三歳にて、もはや完全な浪人生活に入っている次第です。

以上が私の略歴ですが、私如き軽業無能の者が郷里の皆様方に申しあぐべきことは何もございませぬので、何卒これでご勘弁をお願い申し上げます。

社会主義国の崩壊についての私見

余 田 士 郎（市島町）

過日、テレビによく登場する高坂正堯氏の講演会に行つて来た。彼もこの様に早くソ連が崩壊するとは考えていなかったらしい。小生もそう思っていた。しかし、それはそれとして、小生の考え方を別の面から述べるとすれば、今回の出来事は、「性善説」が終焉し「性悪説」が正しかったことを証明した事件であつたと考へる。

何故ならばほんとうに、純粹に人間が性善ならば、統制経済、即ち計画経済（共産主義とか社会主義とかは別として）、マルクスの資本論はほとんど理想に近い社会を形成してゆくはずであつた。ほんとうに人間の性が「善」ならば、自分の使命に、良く働き、平等に助け合い、世のため人のために献身し、これほど効率のいい経済体制は考えられなはずであつた。

しかし人間は「性悪説」の言うとおり、競争原理と自己主張と不平等階級主義を求めた。そこには平等ではなく差別の心理が働いた。だからこそ知恵と努力によつて競争して行つたのである。そしてこれが原動力となつて社会の進歩を促進

させたといえるのである。そこに「欲」という害毒が発生し、軍備とか国家とか民族とか、はては自己主張のあまり、戦争までも産み出してきた。戦争のために科学が進歩するという否めない事実も出てきた。

こう考えると、人間とは残酷な生き物といわねばならないが、最後の一步の所で止まる知恵を持っていたことが幸いであつた。これを理性という人もいるが、小生はこれが神の摂理だと思つてゐる。

では何故人間は競争心を持ち、人より良い生活なり地位なり、優れた能力を持ちたがるのであろうか。小生は常々、物事を考えるときには、枝葉を払つて、根本原理に立ち返つて考えよと言ひ聞かしている。そうすれば、裸の木と根と幹とから單純に原理原則がわかつてくるというものである。話を元へ戻そう。

先の問題の根本は「人間には生命があり、それが無限ではなく、有限確定的なものである」と考えるところからではないだろうか。人類としては子々孫々に受け継がれるであろう人類も、個としてみたときには「有限確定の生命なのである」。本来ならば、その各々が勝手に生きてゆければ、何の問題も起こらないだろうが、そうはさせじと秩序が生まれ、常識が制約し、法律の成立にまで発展してきたのではないだろうか。

すべての人の生命が基本的に無限であって、特別の事件、例えば天変地異とか、病気で短命になる以外に老いることがないとしたら、人間の精神構造はもっと違ったものになっていったことだろうし、民族主義とか宗教による戦争も起こらなかったであろう。しかしそんな現実離れたことをいっても仕方があるまい。

「性悪説」が勝ったというか、証明されたというか、そんな世の中で、できるだけ個を大切にして、妥協の精神でやってゆく一番いい方法をこれから模索して、人類の生命の尊厳さを万人に知らしめ、永遠の発展を望むか、ノストラダムスの予言ではないが、ブツツン人間が出てきて、一度全人類を滅亡させてしまうしかないのではなからうか。

二十一世紀こそ、ほんとうの意味で人類が原点に立ち返って、自分達の秩序を決めてゆくとときだと考える。原点々々と口で言っている、真にその意味を解している人が何人いるだろうか。その手始めに世界地図を平版に書くときは原点（経度と緯度の0の交点）を中心にするように直すことから実行してはどうだろうか。

今の日本の世界地図は緯度はまあまあとして経度はずい分ずれている。大体中央に日本がくるように書いてある。従って極東のハズレにあると言葉だけは知っていても、考え方は自国中心に自然になってゆくように出来ている。これを原点

主義で原点を中心とした地図を、子供―幼児の頃から見せておくだけで、その考え方は相当変わるはずである。環境の性格へ及ぼす力の偉大なことは充分承知のはずである。

どうか「性悪説」を滅ばすための一九九九年が来ないことを願いたいものである。

（付記）環境が人間を作り上げて行く例としてここに一つ示す。よくアラブ人は時間を守らないといわれる。そしてそのことに罪悪感を持っていない。唯々「アラアの思し召しにより」と言う。これらは彼等の長い生活の中で形造られてしまった、環境から来た性格の一例である。

あの砂漠の中では、いつ砂嵐が来るかわからない。もし途中で砂嵐に遭ってしまったえば時間に遅れても、それは決して本人の罪ではない。「アラアの神（自然）のなせる技である」。従って何人もそれを咎めることは出来まい。こんな環境で長く生活をしてゆく内に、時間に対する観念が、われわれと異なってしまったのであって、このことから、環境の大切なことというか、環境の恐ろしさというか、そんなことを考えるのである。

郷友会総会に出席して

鈴木 大 助（柏原町）

以前より、度々郷友会へのお誘いのお便りをいただきましたが、なかなか参加することができず心苦しく思っております。

もう四、五年も前のことになるでしょうか、比較的自由な時間のとれる立場になっておりましたので、一度参加してみようかと九段会館まで出向き、会場の中を外から少し覗き見て、あまりの場違いな雰囲気（大先輩という感じのお方が多く、とても私のような若僧が入って行ける雰囲気ではありませんでした）に怖じ気づき、そのまま逃げるように帰ってきたこともございました。

そんな折、過日行われました「上山顕先生の出版と米寿を祝う会」に、著書の版元であり、仕事の関係で知り合うことのできましたホンゴー出版の池田忍さんに連れられ、はじめに参加させていただいた次第です。その際、司会の坂上勝郎さんから、「参加者中、一番年の若い鈴木大助君に……」と突然、スピーチを指名され、ちよつと戸惑ったこともありました。（昭和三十一年生まれの三十七歳で、そう若くはない

のですが）

それ以後、二度ほど会に参加させていただき、多くの郷土の先輩の皆様とお知り合いになることができ、大変光栄に思っております。特に、私の仕事とも関わりの深い、出版関係の仕事をしていらっしゃる先輩が多数おられることを知り、驚きとともに、大変うれしく思っております。

私は郷里で過ごした中学生ごろまでは、野球や陸上競技に夢中になっていたスポーツ好きの子供でしたが、高校卒業後、グラフィックデザインの勉強のため上京し、大学卒業後は、印刷会社デザイナーとして勤務した後、現在はフリーランスの立場で、エディトリアルデザイン（本や雑誌等の編集・出版にかかわるデザイン）の仕事の傍ら、専門学校で教壇に立つ生活をしております。

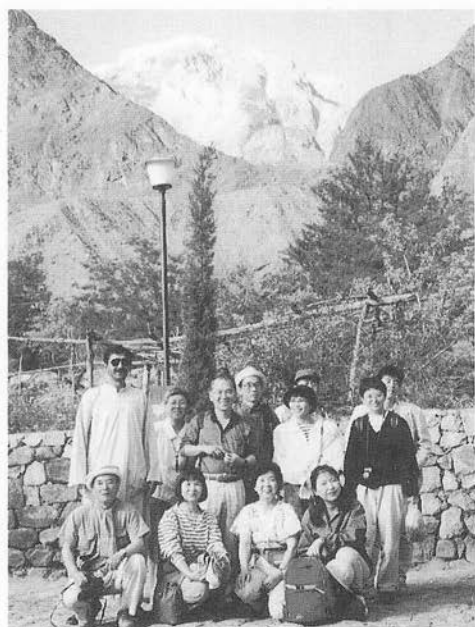
フリーという立場上、仕事の関係以外では人づき合いが稀薄になりがちな生活のため、郷友会で先輩の皆様とお会いできるのは、たまのことではあってもうれしい機会です。

最近は帰省することもあまりなくなり、郷里の友人との付き合いもほとんどなくなっていました。東京での郷友会が、郷里の友人との旧交を暖める場になればよいのにと思っております。

一人でも多くの方の参加をお待ちしています。

山ざる兄弟、カラコルムを行く

吉川 誠 司（松井庄・旧姓渡辺）



カラコルムを背景に記念撮影

パキスタン最北端に位置するフンザ、一般にはあまり聞き慣れないところだが、ヒマラヤ山脈の北西、カラコルム山脈に囲まれた山岳の奥地で、周囲どちらを向いても七千メートル以上の山々が真白く輝いている。氷河の水で潤う一大オアシスで、南の斜面には一面に杏の木々が色濃く生い茂る。花

咲くころはまさに桃源郷の別天地だろう。ここまで来るのは、並大抵のことではない。恐怖の難所の連続で、今にしてみればよくも無事帰れたものだと思う。

五年前、私達の七人兄弟（氷上町朝坂出身、渡辺姓）は、フランス、スペイン、スイスを二週間かけてファミリー・ツアーとしゃれこんだ。この旅が好評だったので、今度は少し変わった所をと、パキスタンのフンザ秘境の旅と決まった。

七人のうち四人が東京在住、あとの三人は丹波とその周辺に住む。今回は、長兄と三男が参加できなかったが、次男の私を頭に五人の兄弟、夫人も加わって総勢十二名。成田空港に揃ったのは五月十日、十二時を過ぎていた。二時出発予定が三時に変更、電光板はまた四時に変わる。サービスでは悪評を買うパキスタン航空だが、気を遣ってか、ビールを一杯奮発してくれる。いらだちも薄らぎ、のんびり行こうぜ。出発前は未知の希望もあって、元気なもの。ついに六時の出発。大宮からの早着組など成田空港で八時間我慢したことになる。北京でも二時間機内で待ちぼうけ。

○ イスラマバード空港に着いたのは午前二時を回っていた。

そのままだった私の腕時計は午前六時を指していた。手押し車は山積み荷物。中にはウイスキーが「うんさ」と眠っている。禁酒の国パキスタン、見つければ没収である。真夜中

ともなれば税関検査もほどほど、OKのサインが出る。心地よいスリルを味わいながら足早に空港を出ると、南国特有の暖気がほのかに肌に伝わる。

○

ラウルピンデイのフラッシュマンズ・ホテル。英国統治時代からの、庭の大きな由緒あるホテルではあるが、今はさびれてその面影はない。ぐっすり憩う暇もなくパキスタンの夜は明ける。カメラ片手に朝の散策に出る。ホテルの庭の大きな木の中から、かん高い鳥の鳴き声。

タクシーの運転ちゃんが日本人を見るや次から次と止まって、いい景色の所へ案内すると、手真似で迫ってくる。こちらも得意のポーズ、両手でバツテンとやり返す。朝食後、昨夜の運ちゃんと愛敬たつぷりのガイド「マリック」が待っている。バスは中型トヨタ製の冷房車、わりと新しいこのバスでフンザまでの五日間の旅が始まるのだ。

○

ホテルを八時に出発。喧騒の町ラウルピンデイ、行き交う人々は大柄で、顔には髭をはやしている。人種によって頭に乗せる帽子が違ふという。だぶつく上着が妙によく似合う。見るものすべてに、異国情緒が溢れ、好奇心をかき立てられる。来たぞ、パキスタン。

ガンダーラ遺跡で有名なタキシラを横目に見ながら、煉瓦

工場の煙突が次から次へと車窓に映る。パキスタンでは、煉瓦なくして家は建てられぬ。大木の街路樹並木が続く日陰の中をバスは快くひた走る。灼熱の太陽、炎天下での生活の知恵。のんびりした風景が続く、時には大きな橋が洪水のため崩れ落ち、車は迂回して川底を走る。車は段々と高度を上げていく。山の斜面には松林が増える。日本の松とよく似ているが、葉が長く、やや垂れ下がっている。谷間には水田が光り、丘の段々畑には麦が黄色く色ばむ。高原の農業地帯で、北部山岳地とは比すべくもない裕福なチャタール高原である。農家が山の上まで転々と散在する。峠からは急な下り坂で、一気に千メートルほど下がって行ったところにバラグラムの村がある。今までの街並みとは「ゴロッ」と変わり、失礼な言い方だが、ゴミ箱をひっくりかえしたような貧民市場の様相、思わず「ワー、こりゃひどい」と声が出る。町で追われた泥棒や無法者の逃げ込む村だそうである。すぐ下にはパキスタンの生命の源、インダスの大河がゆったりと流れる。

ベシャムを過ぎると、道は徐々に登りになり、インダス河の川面より二、三百メートルも高いところを走るようになる。二、三百メートルと一口にいうが、例えば、東京タワーから下を見下ろした光景を想像すればいい。東京タワーには窓ガラスと手摺があるが、ここには何もないのだ。どんな危険なところにもガードレールがなく、道路の端は断崖の谷底へと

直結する。山の急斜面を切り取ったように作られた道。このあたりから肝つぶしの道が始まる。木の生えない脆い岩肌は、雨の度にゴロ石・岩が道に落ちてくる。今しがた落ちたような石に再三出合う。道が三分の一ほどえぐり取られた処には、注意を引くために転々と石が置いてあるだけ。また補修済みの道は、頭ほどの大石で埋め立てられ、バスは、その上を超スローで越えるのだが、左右にゆらりゆらりと傾き、川側に傾いたときには千尋の谷底が目前に迫る。「キャー」と女性群の悲鳴がつづく。男は口には出さねど肝玉の引きつる思いは同じ。カーブの手前からでも追い抜きをかける。前が見えなくなり、川の上に車が半分浮いているかのようだ。

「たまったもんじゃないよ」

なるべく川の方は見ないように思うのだが、見ていないとなお不安なのか、つい見てしまう。

対岸には、岸壁の上にへばり付くように民家が点在する。全く、道など作りようがない。隣へ行くにも、ターザンではないが、綱渡りか、ちよつとやさそつとでは行けないだろう。煩わしい下界と一切の交流を断ち、動物同様の生活を営む山岳民族の生活を垣間見る。

日が傾き始める。地区地区には検問所があつて、道幅いっぱいには竹竿で作った遮断機がおりている。パスポート名簿をその都度渡して通してもらう。夜ともなれば、検問も厳しく

時間もかかる。竹竿が降りてライトの光の中に銃を持った四、五人の兵がストップをかける。

「あらー?」「こりゃ、やばいぞ」

隊長らしき人が何かガイドに話しかけては車内をのぞき込む。車内はシーンと緊迫。そのうち、二人の兵士が銃を持って車内に乗り込んでくる。そのうちの一人が僕の横に座ったが、なにも言わない。無言のまま発車。皆、緊張したまま何一つ言葉もない。私は、何かが起こって護衛をしてくれたのだらうと思ひ込んでいたのだが、皆それぞれに、心中は穏やかではない。あとで聞けば何のことはない、ホテルの村まで兵士を送ってやったのだ。

「ガイドのバカ野郎、一言ぐらい何とか言えよ」

チラースのシャングリラ・ホテルに着いたのは夜の十時を過ぎていた。今日の五百キロ、十四時間の旅も無事終わった。あーあ、疲れた。

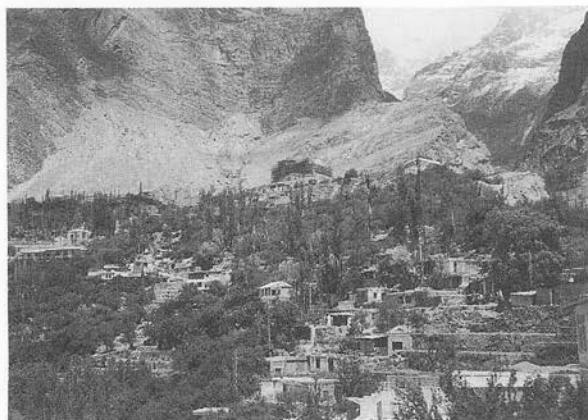
○

チラースの朝は快晴。ホテルの庭下にはインダス河が緩やかに流れている。対岸の岩山も美しい。谷の奥には白い峰々が見え始める。朝の散歩に村の子供が珍しそうに寄ってくる。写真をとって兄の方に五ルピーやったのだが、いらぬ、弟にやってくれという。

「はおー」

日本ではとくに忘れられてしまった、いたわりの気持ち。弟に渡して、二人で好きなようにするんだと手真似でやった。多分わかってくれたと思う。

シャングリラ・ホテルを出て間もなく、初めの吊橋がある。その手前、黒色の大きな岩に仏教時代の「線刻仏画」が鮮やかな線で刻まれている。道路を隔てた岩山の上にも三つ、四つ、下からはっきりと見える。昔、この線刻画の石碑は信仰



の対象として神聖な場所であったに違いない。このあたりから黒く光った岩肌の山になる。地場の人は、この黒い岩から夏暑いときに浮き出る油をとって薬用油とする。岩山と砂漠化した風景が続く。草木、一切の生命を拒絶する月の世界のような風景が、どこまでも続く。

ギルギットに近づく、ナンガーバルバット、世界第三の巨峰（八、一二五メートル）の一人立ちの大雄姿が、厳かに目の前に現れた。ため息が車内を埋める。ギルギットの近郊にはシルクロード、中国とインドを結ぶ古道が今なお残る。この辺りは、当時の商人たち、また仏教盛んなりし頃、求法僧や旅人の憩いの地であったのだろう。

ギルギットを中心とする北部地方はヒマラヤ山脈の北側にあり、印度洋からの夏のモンスーンはヒマラヤ山脈で遮断されるので、雨はほとんど降らない。そのため、岩山とガラクの砂漠となるのだそう。その反面、この地方の山々は、夏こそ安全な絶好の登山地域となる。七千メートル級の山々に囲まれた氷河の水で緑が潤う。カラコルム・ハイウェイが外国人旅行者に解放されて七年目。ギルギットは北部観光の中心的拠点として、今後もさらに親しまれていくだろう。

昼食のため立ち寄ったセリナ・ホテルの三階。総ガラス張りの食堂はフンザ川にラカボシの連峰が白く雪を被り、画に描いたような景色が百八十度のガラス越しに見える。さすがだ。辛いが食欲をそそるギルギット料理を腹一杯に食べた後、フンザに向う。バスはまたしてもV字谷の中腹を走る道に入る。ギルギット付近では、束の間にしろ、平らな道で心安らぐ思い。このままフンザまで気楽に行けるものと思っていたのに、またかの思いに、帰りは二度とこの道は通りたくない、

飛行機で帰るぞ！ 今だから書くが、四男の嘉三など、帰るバス反対組の火付け筆頭だった。

フンザ地方に入ると、ラカボシ七、七八メートルの連山が見える高台に、見晴らし台の茶屋がある。厠などあるはずもない。小便是雑木林の中に散っていく。

もうフンザの終点は近い。ポブラ並木が増える。対岸の畑も立ち木が色濃く、その中に点々と農家が見え、のどかな風景となる。子供達がにこやかに手を振って迎えてくれる。観光慣れしない純朴さに好感を覚える。

○

バキスタン独立後も二十七年間、国内の自治王国として、ミールという藩王に任されてきたが、現在は廢藩。イスラム教でも、「イスマリーリー」派を信仰し、その宗教指導者はアーガーハン。「アーガーハン基金」によって、学校や病院、ホテルなどを建設し、住民の福祉に努めている。他の宗教と比べて戒律が緩やかで、女性は顔を隠さない。背丈も我々と同じ。人柄は純情無垢、親密感の持てる人達である。

ホテルの売店で、わが女性群が宝石の陳列ケースをのぞき込んでいる。土産物にはあまり関心のない私もその一人に加わる。この地方特産の貴石、ラピスラズリ（瑠璃）の首飾り、一番良いのをだして「百ドル」とくる。初めからハツタリをかけてこない。それは我々にもわかる。六男の功は値切るの

が下手だし、あまり好きではないらしい。

「けんちゃん、これは良いものだから買うときよ」と、逃げてしまふ。「けんちゃん」とは、私の子供の時から通称で、いまだにそれで通っている。その時私は、八十ドルと決めていた。陳列ケースの上にはいじくり廻した宝石が散らばっている。陳列戸棚は開けっぱなし。口数の少ない青年主人は、釣銭を用意するのに消えていった。五分経つても帰ってこない。日本人を信用しているのか、あきれたものだ。隣の衣服帽子屋の主人はまだひどい。店にいたことなし。勝手にとつて、うろつく主人を探して金を払う。嘉三は、となりで買ったバキスタンの丸い帽子を片手に、ロシア製の毛の防寒帽を被り、得意のポーズで店に入ってくる。夕食前のひとときである。

○

暗闇の中に満天の星空がくつきりと浮かぶ。夕食の後、星見の散歩に出かける。山裾のナガルの家々に夜の灯が点々と光る。澄みきった夜空の星は手に取るように美しい。標高二千五百メートル、ここフンザは七千メートルのウルタル氷河から吹きおろる冷気に包まれる。長居はできない。ホテルに帰る上り坂は酸素の不足でフーフーと息切れがする。

ベッドに潜り込む。ライターを点けてみるが、十回に一回程しか点かない。酸素不足のためらしい。寒い。セーターの



上にまた着込む。暫くの間寝入ったか、突如息苦しさに目が覚める。胃がむかむかして厠に駆け込む。私のゲーゲーという声に同室の功が起きて心配気にのぞき込む。また寝てみるが益々息遣いが激しくなつて苦しい。電気は停電している。功が暗闇の中を走り回り管理人を探すがいない。嘉三に知らせてくれる。ニュースは次々と部屋に伝わり、停電の真夜中騒然となる。高山病ということで皆の意見が一致する。

フンザに医者などいるはずがない。医者のある下のギルギットまでは、百十キロ、ジープをチャーターしても二時間はかかる。ところが、ジープをチャーターしようにも、ガイドもホテルの管理人も別のところで寝ているため、どこにいるかわからない。だいぶ前のことで

はあるが、私は軽い心臓発作を起こしたことがある。そのことを弟たちは知っていて、深刻に心配したようだ。高山病と心臓疾患の結びつきは非常に危険なのだ。

夜の三時頃になつてようやく、胃の中のものを激しく出しつくした。息苦しさの中にも、いつのまにか眠りに就いていた。朝起きて、二、三歩歩いてみたが、昨夜の強烈な苦しみで力は抜けているものの、どうということはない。用心のため午前中休むことにする。みんなに迷惑をかけてしまった。この最果ての地で、正直、帰れぬかもしれぬ思いをした。短時間で回復、みんなと行動できるようになったのは何ごにも代え難い思いであった。

○

午後フンザを出発して帰途につく。今日はギルギット泊まり。ギルギットのサダルバザールにバスを止め、モスクの横の細い道を吊橋に抜ける。暫く付近を歩き回り、カレー粉、香辛料を売る店に上がり込んで注文すると、いろいろのスパイスを粉にしてカレー粉にブレンドする。一袋が五ルピー(二十三円)。田口さんも上がり込んで少年の手捌きを珍しげに見ている。おかげでカレー粉もよく売れた。田口さんなど五袋も買ったよ。黒胡椒も買ったし。少年の嬉しさを内にひめた「てれ」気味の様子がかわいい。勇敢なボロ競技の練習風景を見て、今夜のホテルは昨日昼食に立ち寄ったセリナロッ

チだ。

北歐風の最高級のこのホテルは、久しぶりにバスタブにつかって汗を流せる。いいもんだ。夕食は例の三階、ガラス張りの展望食堂。今日は五男圭三の誕生日。老人が我々のテーブルに近づいて来て三味線の元祖のような楽器（シタール）でバキスタン民謡を奏でる。チップが効いたのか、変わった曲をつぎつぎに演奏した。このホテルは立派だけれども、小便ができないのがシャクの種。東洋人を全く無視したこの便器は何だ！我々は背伸びしても届かない。日本人を馬鹿にするなよ。「なめたらあかんぜよ」

ここ六日間イスラマバッドとギルギットを結ぶ飛行機は飛んでいなかった。かすかな望みも消え果て帰りはこの来た道一本しかない。またバスの旅となる。記念写真を撮り、

「サヨナラ、ギルギット」

○

カラミの休憩処で給油のための小休止となる。ここはバキスタン人のお茶呑み休み処。崖に突き出たコンクリートの広場には縄網の貸ベットの置いてある。ここで青天井を眺めながら一夜を過ごすのだ。一泊二十円。煙のすすで黒くいぶされた薄暗い食堂。可愛い少年がチャパティを焼きながら我々に笑みを送ってくる。

ベシヤムのモーテル。ここがバスでの最終夜。すぐ下にイ

ンダス河が流れる。一度はインダスの雪解け水に触れてみたいとゴロ石の間を皆でおりにいく。白く濁った水。冷たい。手を洗い、心を清め、飲んでみる。案外いける、飲めるよ、ああおいし、と誰かの声がある。住民が二、三人水を汲みにやってくる。食事に使う水も飲み水も皆この水を使う。インダスの見えるホテルのベランダに集合。最後の一本となった養老の気付薬は旅の疲れを癒してくれる。断崖絶壁の道はすべて終わり、ほっと一息、活気が蘇える。

イスラマバッドに入る手前に、仏教遺跡のダルマラージカを訪ねる。タキシラの遺跡の中でも最も古く重要なものらしい。飛石づたいに小川をわたり、木々の間の参道を登って丘の上に出ると、半分崩れ落ちた巨大なストゥーパがある。基礎の石積み部分はいまだに寸部の狂いもなく、実に精密に組立てられている。水を流す下水道も石組みで溝を造る。当時使用されていた箇所を散見する。世界に誇るガンダーラの仏、石像彫刻の技術の基盤を見る思いである。

日もまだ高い五時過ぎ、イスラマバッドの最高級国際ホテル、マリオットに着く。このホテルは首都の顔。ロビーは外国人で賑い座る場所もない。我々は野良着姿の山帰り、こんなホテルには似合わない。ホテルの売店は十室以上もあるが、一人の客もない。皆バザールでわんざとお土産の絨毯を買ったが、まだ買い足らぬ女性達と、こんな一流ホテルで買い物

をする「あほ」はないと言いながら、冷やかし半分に見て廻るものの、またしても絨毯屋に入る。冷かし半分なのだが、いくらでも値を下げる。飢えた魚が餌に食い付くように客を離さない。戸を開けて買うまで出さない。問屋で買った一枚十ドルのマットも五ドルまで下がる。よし「買った」と十五枚買う。宝石も同様、こちらの言い値でどうにでもなるのだ。一体全体どうなっているんだ？

○

六日間のパキスタンの旅の最終夜を、高級ホテルでぐっすり休み、朝六時にイスラマバッドの空港を後にした。出発して十五分もすると機内アナウンスが始まる。語句は定かでないが、只今前方下にはパキスタンの美しい山ナンガーパールバットが見えております、どうぞ、ごゆっくりお楽しみ下さい。高度一万メートルの空から、八千メートルの大雄姿が雲間に浮かぶ。真白く眼下に美しい。我々の通ったギルギット、フンザを探してみるが、山また山の重なりで認めることができない。カラコルム山脈を越えるとタクラマカンの大砂漠地帯。左側には天山山脈の白く輝く美しい連峰。すばらしい自然の姿に見入るうちに、天山山脈は遥か彼方に去っていく。想像を絶する広大な大地、人の住めない死のタクラマカン砂漠が、延々と何時間も続くのだった。

病床にて

渡辺久子（氷上町）

めぐり会ふもかりそめならずこの日頃

親しき人を思ひいづかも

唇に層なす皮の剥がれゐる

わがたまゆらの命の凝りか

紫陽花の水面耀ふをむらさき

かすかなる悔のよぎる真昼ま

屋根雪のなだれしあとの春の夜の

しじまにかよふ夫のぬくもり

廂打つまばらに太き雨に覚め

うなじに熱き血の音を聞く

胸奥なる一点つねにみつめぬて

そのみはただあけぼののいろ

しぐれ降る檜の梢に木枯しの

吹き残したる枯葉二ひら

永却の輪廻転生百八の

鐘ひしひしと内を経めぐる

（平成元年八月、六十二歳歿、旧姓池上）

福知山線複線電化物語

梶原 清（篠山町）

私は昨年七月、参議院議員を引退し、日本自動車ターミナル株式会社（本社・東京都千代田区平河町、全共連ビル五階）の社長に就任しました。参議院議員二期十二年のあいだ大変お世話になりましたことに厚く御礼を申し上げます。

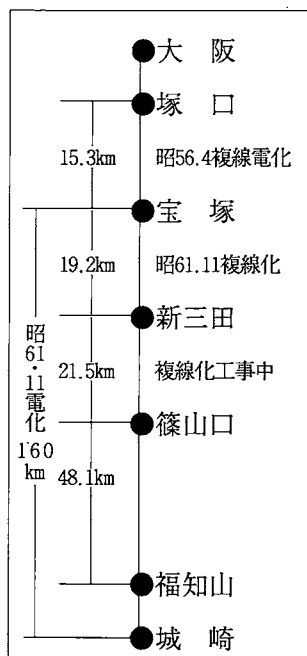
私は長年にわたって福知山線の複線電化問題と取り組んできましたが、この複線電化がどのように進められてきたかを別図で示しました。本誌の平成四年六月号（第二十三号）でご紹介したのと重複する部分があるかと思いますが、これまでの経緯を時系列的に整理してご説明し、何かのご参考になれば幸甚です。

■福知山線複線電化促進期成同盟の動き

大阪から神戸、京都、奈良、和歌山の各方面へは、ずっと以前から国鉄（ＪＲ）と私鉄が平行して走り、激しい競争をしています。ところが、福知山方面は単線の国鉄だけで、運転回数は少なく、スピードも遅く、狭い乗降口が両側にある車両が使われていました。

昭和三十年代に入り、沿線の住宅開発が進むのに伴い、福知山線の複線電化を早急に進めてもらいたいとの声が沿線各地から持ちあがりました。そのため、伊丹市の故・伏見正慶市長の呼び掛けで、昭和三十六年八月、大阪、尼崎、伊丹、川西及び宝塚の沿線各市による国鉄福知山線複線電化促進期成同盟会が結成されました。若干おくれ、三田、西宮、神戸も参加し、大阪―三田間の複線電化を促進するため熱心な陳情活動が続けられました。

非常に重要なことは、兵庫県当局がこの沿線各市の運動に対して常に強力なバックアップを行ってきたことです。この点、昭和二十五年四月から五十三年四月まで七期二十八年続いた京都府の蜷川革新府政は公共事業に対して極めて冷淡な態度をとり、山陰本線の複線電化にも力を入れませんでした。これが同線の複線電化がおくれた大きな原因になりました。



■篠山線の廃止問題

大阪方で右のような動きがある一方、昭和四十五年九月、多紀郡内で篠山線（篠山口⇨福住間一七・六キロ、主として珪石輸送と兵員輸送のために昭和十九年三月に建設）の廃止問題が持ち上がりました。

昭和三十五年にも当時の福知山鉄道管理局（以下福鉄局）が篠山線の廃止を持ち出しましたが、地元がムシロ旗を立て、牛まで連れ出してモウ（猛）反対をしましたため沙汰止みになったことがあります。これに懲りて、昭和四十五年には福鉄局は綿密な事前調査のうえ、篠山線の利用者住民と膝をつき合わせ、直接話し合う大衆説得のやりかたをしました。勢い、地元四町（丹南、篠山、城東、多紀）の足並みが乱れ、四町長は篠山線問題の一切を兵庫県当局に一任しました。

そこで兵庫県の一谷定之蒸副知事（当時）と国鉄の一條幸夫大阪駐在常務理事とがたびたび話し合われ、まさに意気投合。一條常務理事は、「国鉄財政が危機的な状況にあるのに、なぜ福知山線なのか」と強烈に反対する国鉄の本社幹部を懸命に説得して、複線化促進の方向づけをされ、他方、一谷副知事は篠山線沿線四町に対する説得、廃線のための条件整備に尽力されました。まさに、人間関係、相互信頼関係がなければ仕事はできるものではない、という好個の事例であったと思います。

こうして、①兵庫県の地域開発計画の推進とあいまって、福鉄局は福知山線の複線電化を進めるものとし、昭和五十五年をその完成のめどとする。②兵庫県は、福知山線の複線電化について、沿線の開発を促進する等側面的な協力をする。この二つを骨子とする「国鉄福知山線三田地区・篠山口間の複線電化に関する覚書」が昭和四十六年八月二十七日に福鉄局長と兵庫県知事との間で締結されました（注・範囲が三田地区―篠山口間となっているのは、福鉄局の管轄区域が三田地区以北であったからです）。篠山線の廃線条件に関する覚書が、同日、兵庫県知事を立会人として沿線四町長と福鉄局長との間で交換されました。

■都市交通審議会の答申

丁度そのころ、運輸大臣の諮問機関である都市交通審議会（現在は運輸政策審議会に吸収）が、運輸大臣から「大阪圏における高速鉄道を中心とする交通網の整備増強に関する基本的計画」について諮問を受け、審議を続けておりました。

約一年八ヶ月にわたる審議の結果、昭和四十六年十二月八日に答申が行われましたが、福知山線の複線電化については国鉄の大阪駐在常務理事の意向がほとり入れられ、①塚口―三田付近―丹南付近（篠山口）を複線化すること、②そのうち、塚口、三田付近の複線化を緊急に実施することとされま

した。

■宝塚までの複線電化（第一期計画）

これを受けて、塚口―宝塚間一五・六キロ（注・尼崎―塚口間は従前から複線電化されていました）の複線電化工事が第一期計画としてとりあげられました。

昭和四十八年二月二十二日に運輸大臣の認可を受け、直ちに着工されましたが、用地取得が難航したため八年後の五十六年四月に完成しました。駅設備も一新し、踏切もほとんど立体化されて、大阪―宝塚間が両開き式ドアの電車が走る都市鉄道に衣替えしました。

■大もめにもめた第二期計画

国鉄は第二期計画として、宝塚―篠山口間四〇・七キロの複線工事と宝塚―城崎間一六〇キロの電化工事の認可申請を運輸省に提出しましたが、運輸省は、複線化は新三田までしか認めない。新三田―篠山口間の複線工事は絶対に認めるわけにはいかないと態度をとりました。

そこで、当時の坂井時忠兵庫県知事が「福鉄局長が篠山口までの複線化を昭和五十五年度完成目途に進めることを約束していたではないか。運輸省が国鉄の申請を認可しないのは重大な約束違反だ。認可しなければ訴訟を提起する」と激し

く迫されましたが、「運輸省切つての剛の者」との勇名を馳せておられた住田正二鉄道監督局長（のち運輸事務次官。現・東日本旅客鉄道株式会社社長）は、「何が約束違反だ。運輸省が兵庫県と覚書を交換した覚えはない。覚書を交換したのは国鉄の地方組織である福鉄局長だ。運輸省がそれに拘束されるいわれは全くない。国鉄財政はまさに破局的な状態になっており、政府は国鉄の新規設備投資を極力抑制する方針をとっているので、絶対に認めるわけにはいかん」。

このことについては、第二十三号の本誌にも概略触れましたが、私にとってはまさに「故郷の大事」。一旦、新三田までが認可になってしまえば、篠山口までの複線化は仕切り直しとなり、少なくとも十年以上延びてしまうと見るのが世の常識。そこで覚悟を決めて三拝九拝、「実は私の故郷ですの……」と必死に頼み込みました。何か別のやりとりもしたように思いますが、それはともかく、幸いなことに昭和五十二年九月二十六日篠山口までの複線工事の認可をいただくことができました。

年を逐うごとに国鉄財政が窮迫の度を深めていくなかで、福知山線の第二期計画を推進していただくのは本当に大変でした。

私は昭和五十五年参議院全国区選挙に当選して以来、参議院運輸委員会理事、自民党の交通部会副部長、国鉄財政再

建特別委員会委員などをつとめていましたので、当時の国鉄経営が逐年累増していく膨大な長期債務をかかえて如何に大変な状況にあったかはよく承知していました。そうした状況のなかで福知山線の複線電化を進めるために多額の投資をすることが如何に困難であるかも十分承知していました。

そのために私は、夏の概算要求時、年末の予算編成時の陣中見舞をはじめ、国鉄本社、運輸省、大蔵省への陳情を地道に続けてきました。地元の方がたを案内して他の議員と一緒に国鉄本社や運輸省へ陳情したことが何度かありましたが、私は昭和四十六年の覚書を持ち出して国鉄当局を激しく追及するようなことは一度もしたことはありません。

第一に、あの覚書が締結された経緯。覚書の内容がいわば双務契約的になっていること。その後の客観情勢の変化、特に福鉄局が兵庫県知事との覚書を誠実に履行するため、複線工事の運輸大臣認可がないにもかかわらず、昭和四十七年から四十八年にかけて三田付近―篠山口間の所要面積の七十数%の用地買収を行い、輸送力増強の名目で極めて「勇気」ある約九億円の先行投資を行っていること等を考えると、この覚書を持ち出して国鉄当局を激しく「追及」するようなことは絶対にできないし、してはならないと私は考えておりました。

地元の方がたの目には恐らく不甲斐ない国会議員だと映っ

たと思いますが、この世の中で仕事をするには、先ずよい人間関係をつくることが一番大切であるというのが私の信念なのです。

おかげで、国鉄本社の岡田宏建設局長（のち常務理事、技師長、日本鉄道建設公団総裁）には格別のご尽力をいただき、国鉄解散直前の昭和六十一年十一月一日に宝塚、新三田間一九・二キロの複線工事と宝塚―城崎間一六〇キロの電化工事の完成を見ることができました。

■新三田―篠山口間の複線工事

このような次第で、国鉄時代には第一期計画のうち新三田―篠山口間二・五キロの複線工事が積み残しになりましたが、まずこの事業をJR西日本に承継していただき、さらに平成三年十月に設置された特殊法人・鉄道整備基金の、無利子貸付金による大都市鉄道の整備」という新しいタイプの助成制度（旧国鉄時代には運輸省の大都市交通施設整備費補助の制度がありました）が設けられ、その第一号として福知山線の新三田―篠山口間の複線工事をとりあげていただきました。

平成四年二月所要の手続を済ませて、同年三月日本鉄道建設公団が事業着手。工期は平成三年度末から平成八年度。事業費は、地元負担で施行する橋上駅の建設などを除き、鉄道整備基金対象は百四十四億円。その財源内訳は、

1 鉄道整備基金の無利子貸付金（五年据置十年償還）

四〇％（五、七六〇百万円）

2 地方公共団体の無利子貸付金（五年据置十年償還）

四〇％（五、七六〇百万円）

うち兵庫県の負担額 四〇％×2／3＝三、八四〇百万円

市町の負担額 四〇％×1／3＝一、九二〇百万円

（三田市、篠山、西紀^{にしき}、丹南、今田^{こんだ}各町）

3 財政投融资等 二〇％（二、八八〇百万円）

となっています。

私が国鉄の駅員、車掌をしていた当時は、篠山口―大阪間の所要時分が二時間十分前後でしたが、現在は約半分の一時間十分前後になっています。篠山口までの複線工事が完成すれば、対向列車に対する待ち合わせがなくなり、さらに大幅に短縮されることは言うまでもありませんし、電車をより回数を多く走らせることが可能になります。

■篠山口以北は駅間距離が長い

問題は水上郡内の複線化ですが、篠山口以北は駅と駅との間隔、つまり駅間距離が非常に長いので、複線化のメリット、必要性は非常に大きいはずです。

複線工事を行うとなると、前述のとおり鉄道整備基金の“無利子貸付金による大都市鉄道の整備”という手法による

ものと思いますが、複線化のポイントはその線区の採算性、投資効率ですので、まえにも申し上げたように利用者を増やす施策を一つずつでも前進させて行くことだと私は思っています。

■片福連絡線の建設が様相を一変させる

首都圏には都心を縦貫する中央線、総武線が走っていますが、大阪には中心部を東西に縦貫する国鉄線がなく、これが大阪圏の鉄道網の一つの弱点になっています。

このため、前に述べました都市交通審議会が行った答申のなかで、京橋―梅田付近―尼崎を緊急に新設すべき路線として掲げられました。これが片町線京橋駅と福知山線尼崎駅を大阪都心部地下で結ぶ片福連絡線構想で、この路線の建設によって、①大阪都心部の都市機能の高度化、②片町線、福知山線沿線の開発、③J Rの大阪環状線（実延長二一・七キロ、駅数十八。昭和三十九年三月二十二日全面開通）等の混雑緩和に大きく役立つものと期待されています。

延長が二・五キロ。駅の数が両端駅を含めて九駅。駅部は第三セクターである関西高速鉄道株式会社（NTT無利子融資制度を活用して自社工事として整備し、駅部以外は日本鉄道建設公団が整備し、完成後関西高速鉄道株式会社に譲渡することになっています。平成元年はじめに所要の手続を

すませて工事が進められていますが、完成予定は平成七年三月末（延伸される見込み）。

これが完成しますと、福知山線から大阪都心部に直通乗り入れができ、大変便利になることは言うまでもありませんが、メリットはそれだけではありません。と申しますのは、現在、福知山線は東海道本線の尼崎―大阪間の線路を共用しております。言葉をかえて言えば、東海道本線の線路の一部を“間借り”しているのですが、福知山線を複線電化し、都市型の電車を頻繁に走らせるとなると、列車運転本数の多い東海道本線の間借りでは何かと支障なり隘路が生じてきます。

そこで、大阪都心部に直通乗り入れをする、“福知山線の専用線路”を建設しようというのが片福連絡線構想の一つの狙いになっています。

ちなみに、最近における東海道本線の尼崎―大阪間の列車運転本線は上り下りとも一日四一五本、うち福知山線が一五本。片福連絡線完成後は片道七、八十本が福知山線から片福連絡線に乗り入れ、残りが従前どおり東海道本線を利用して大阪駅、新大阪駅に乗り入れる見当のようです。こうなった場合、福知山線とその沿線地域の様相は一変するのではないでしょうか。これらを視野に入れて、福知山線問題を考えていただきたいと、私は思っております。

郷友のみなさまへ

☆『山ざる』誌はいま、約千三百名の郷友と郷里の学校・役所等に無料でお送りしています。今年から毎年十一月一日の発行となりました。月号残部がありますので、ご希望の節は事務局にご連絡ください。☆関東水上郷友会の運営および本誌の発行は、すべて会員有志のボランティアによって行われていますが、それぞれ娑婆に仕事を持つ身、何かと不行届きの点は、どうかご寛容のほどをお願いいたします。☆会の通信費や本誌の制作実費等に要する資金は、もっぱら会員篤志家のご寄付や協賛広告料、年会費で賄われていますので、何とぞご協力を願います。☆年会費は郷友会々則に、二十余年前から「千円」と規定されていますが、強制するものではなく、これもひとえに郷友のご理解を期待するところです。☆協賛広告料は本誌のもっとも大きな資金源です。色刷り裏表紙二〇万円、表紙裏一〇万円、文中の一頁三万円、 $\frac{1}{2}$ 頁一万五千元、名刺広告五千元です。我と思われる方、どうかご協力お願いいたします。

展 覧 会

●常岡幹彦氏個展

— 玄に向かつて93・その四 —

常岡さんの日本画展が、今年も五月十八日から三十日まで、東京セントラル絵画館で開かれた。立山幻月、白渺、と題する一〇〇号の大作二点のほか、八十号二点、五十号以下二十点の計二十四点。

ちなみにこの山ざる誌24号の表紙を飾った青垣町の晩秋「霧はるか」(15M・平成四年作)もそのうちの一点である。

今年の代表作「立山幻月」は、常岡さんが立山の山荘に泊まった深夜、俄かな雷鳴に目覚め、外に出て眺めると雷雲と流霧の間隙にひととき煌々たる半月が現れた。その荘厳な大自然の寸劇を一〇〇

インフォーメーション

号の大画面に切りとったのだという。深夜の峻嶺と雷鳴と強風と、雲霧と残雪と月光とが織なすハーモニー、その下方には、山荘の灯が幽かに置かれている。



写真上：「立山幻月」(100号)

左：「月下漁火」(50号)

下：「黒部白日」(80号)



「黒部白日」は、清水を湛えた溪谷の深淵、それをかこむ峨々たる雪峰と霧氷に包まれた木々、太陽までが空に凍てつく。これまた大自然の「気の静寂」を引き出そうとするのか。

「月下漁火」は、夜更けの海と空との交わるあたりに、漁火が点々と見え隠れする。月光が雲と波と岸辺の草木を浮かばせる。この静と動との呼応が、靄い。日本海の「精悍」を描くのか。

いずれも、大自然の大きいなる摂理と、人為のはかなさとを対比させようとするのであろうか。彩色を拒絶した墨と白との世界で、それを試みようとするのは、画家として究極の挑戦のほうである。

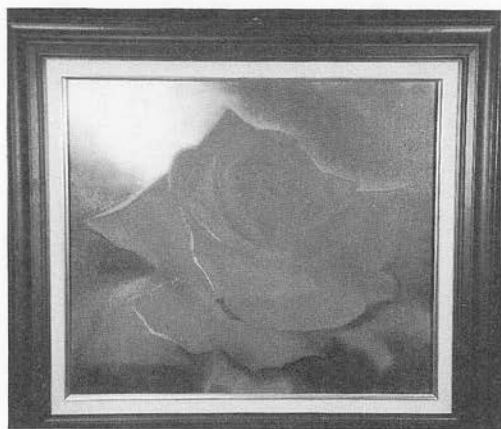
ほのぼのとした淡い色彩のコントラストを巧みに駆使する従来の常岡さんの画風―それは日本画の伝統手法なのだが―が、この数年来、その一方では、一転して墨と白との世界、大いなる「玄に向かつて」常岡さんは挑戦を続けている。

それとこれとが、これからの常岡さん

の、つまり晩年の画境に、いったいどのような融合を見せてくれるのだろうか。郷友とともに注目して待ちたい。(玄)

●村上末吉氏個展

平成四年九月二十八日より十月三日の六日間、千代田区神田小川町一―七の草土舎、メセナビル新築開店を記念して三階サロンで、村上会長の油彩による個展



が開かれ大変盛会であった。案内状に「花の神秘 自然の美に取り憑かれ…」とあったが、その言葉のとおり、バラを中心に花また花でうめつくす三十点の出品であった。会場に入るなり、画面一杯に花一輪だけを描いた真紅のバラが大きく迫ってくる。しかも、その一輪だけを描いた作品が次から次へと十余点連続して陳列されていたのは全く意表をつかれたが、見てゆくうちに今回の村上さんの作画に対するこだわりが伝わってきた。

「ただそのままを描くのは絵ではない」は村上さんの口ぐせだが、描く対称(花)のうしろから白色光のライトを与え、ことさら逆光を強調した上で、その光と物を更に解釈して、そこに神秘を探ろうとする。ひと口でいえば、光の白と陰影からくる黒、その間に光を透かす花弁と二重三重に重なる真紅の花弁の微妙な変化。成功した何点かからは不思議ないのちを感じる。ゆつくりと会場をなかなば程まわったところで「これは今回限りです」とい

う作者の言葉を聞く。

他に花びん一杯に盛った花々の一角を切りとるように描いた作品(すべての作品に画題がなかった)、また牡丹やシクラメンを大きく描いた作品などを見てみると、今回のコダワリ(姿勢)の中からは次にはどのようなスタイルであれ、今ま以上に村上さんの内面からの不可視の世界が生まれてくるように思う。(幹)

同好会

●氷上ゴルフ同好会

△成績表▽

第四十八回 東京よみうりカントリークラブ

平成四年六月二十二日

優勝||村上久美子、二位||渡辺隆男

三位||橋爪 忠、B B||渡辺貴美子

第四十九回 東松山カントリークラブ

平成四年九月二十九日

優勝||大石佐代子、二位||畑 義則

三位||足立謙悟、B B||村上久美子
第五十回 大熱海国際カントリークラブ
平成四年十二月十七日

優勝||村上 昇、二位||松岡昭宏

三位||岡林逸男、B B||大石佐代子

第五十一回 沼津ゴルフクラブ

平成五年四月九日

優勝||岡 吉明、二位||足立謙悟

三位||村上久美子、B B||松岡恵美子

第五十二回 富士カントリークラブ

平成五年六月四日

優勝||松岡昭宏、二位||松下文男

三位||広瀬寿和、B B||松岡恵美子

第五十三回 鳩山カントリークラブ

平成五年九月十六日

優勝||松岡昭宏、二位||塚口 智

三位||水船智央、B B||渡辺隆男

●氷上囲碁同好会

平成四年四月から同五年九月までの参加者別勝敗表は別掲の通りです。毎月第

三土曜日午後一時より、さすがホール(春日建設本社地下一階)にて開催しておりますが、毎回の参加人員は平均六人で、いささかさみしい状況です。

腕前のほうは、五段から級位者まで、バラエティに富んだ人々の集まりですから、ちょっと腕だめしと思われる方々、あるいは、これから碁でもはじめてみよかなとお考えの方、遠慮はいりません。どしどし参加してくださいませようお待ちしています。会の終わったあと、会場近くのティー・ルームでの四方山話も、また楽しいものです。(坂上)

※勝敗表(○数字は参加回数)

藤田⑭49勝44敗 上小沢⑬40勝57敗
増田⑫26勝40敗 小日向⑪29勝30敗
坂上(勝)⑩34勝40敗 前川⑧17勝25敗
谷口⑥23勝3敗 足立⑥21勝15敗
下中④13勝17敗 川畑②7勝2敗
坂上(豊)①5勝0敗 広瀬①6勝1敗
荒井①3勝1敗

柏陵同窓会

●柏原高校に同窓会館

—卒業生に募金運動展開—

柏原町の柏原高校は、四年後の平成九年に創立百周年を迎えるが、柏陵同窓会（吉見文憲会長）では、その記念事業として「同窓会館」を建設することを計画、同窓生たちから建設資金を募っている。

柏原高校は、姫路、神戸、豊岡に次ぐ県下で四番目の公立校として明治三十年四月に開校された。旧制中学、旧高等女学校を含めたこれまでの卒業生は三万一千人を超え、県下で屈指の伝統を誇っている。

同窓会館は、校史百年を祝う記念碑にと計画したものだ。計画によると、柏原高校の校門脇にある旧体育館を取り壊して、その跡地に建設。鉄筋二階建てで延べ床面積約千平方メートル、一階には会議室、和室（三室）、浴室などを整備

し、二階は折りたたみステージや映写室などを備えた大ホール兼屋内運動場にするという。

総額は建設費、設計管理費、備品購入費などを合わせて三億五千万円。その全額を寄付で集めることにしており、すでに募金活動も始まった。あらかじめ同窓会員一人ひとりに打診、返信ハガキで金額を回答してもらったところ、七月八日現在で約二千七百人から返事があり、八千七百万円の申し込みを受けている。すでに送金している会員も多い。同窓会では、卒業年次ごとに世話人、目標額を決め、同級生の横のつながりを軸に募金活動を行っている。

同窓会館は、同窓生の集まりの拠点になるのはもちろんだが、母校で学ぶ後輩たちへのプレゼントという意味合いが強く、体育の授業や部活動、合宿など在校生たちが多方面に利用できる教育施設になるという。

募金期間は来年三月末まで。折あしく

も景気低迷の時期と重なったが、母校の百周年を飾るにふさわしい大事業だけに、同窓会では会員たちの理解と協力を求めている。

柏陵同窓会会長

吉見 文憲氏 逝去



吉見文憲氏（市島町上牧）は九月二十二日急性肺炎のため逝去された。行年八十歳。

吉見氏は一高、東京帝大法学部卒業。柏原高校に永年勤務の後、豊岡高校校長、大阪青山短大教授を務められた。昭和六十三年柏陵同窓会会長に就任、母校創立百周年記念事業の同窓会館建設資金の募金に奔走中であった。今年六月二十五日の柏陵同窓会関東支部の会にも元気な顔を見せ、募金の協力を訴えられていた。

柏陵同窓会では会長の遺志を受け、同建設推進委員会で引き続き募金を続ける。

●柏高第七回卒業同期会

四月の或る日、同期会の案内をいただき出席させていただきました。私は横浜に住んで長いのですが、同窓会には常にご無沙汰で失礼しておりました。



今回は、会場が横浜・中華街の大珍楼ということでした。自宅から近いこと、

この機会を逃がしては次の機会がないような気がして、早く皆様にお会いしたくなり参加いたしました。卒業以来三十数年ぶりの出会いでしたが、話しているうちに全員の若かりし頃の顔を思い出すことができました。同郷、同窓とは好いものです。長い消息の空白も全くなかったかのように打ちとけて和氣藹々、楽しい一日を過ごしました。

皆様しつかりとお暮らしのご様子、充実した日常の雰囲気を感じられ、とても嬉しく思いました。次の機会を楽しみにしております。
(山内 弥生)

足立さつきが帰ってまいります

オペラ歌手足立さつきは文化庁から派遣されて二年間のミラノ留学を終え十一月帰国いたします。

帰国第一声『さつきウェルカムパーティ』

を左記のとおり開催いたします。会員の皆様さんのご来場をお待ちいたします。

・日時 平成五年十二月十四日(火)

十八時開演

・会場 千代田区大手町 ホテルKKR

東京竹橋、孔雀の間

・会費 一万二千元

申込所 足立さつき後援会事務局

03-3858-1219

寄付者芳名録

ご芳志まことに有り難うございました。厚く御礼申し上げます。広告協賛金とともに、会の運営費や『山ざる』誌の制作資金として活用させていただきます。

片山 日幹殿 五〇,〇〇〇円

小谷 正雄殿 三〇,〇〇〇円

足立守・久子殿 一五,〇〇〇円

谷垣 正雄殿 一五,〇〇〇円

秋山 一男殿 一〇,〇〇〇円

近藤写真製版所殿 一〇,〇〇〇円

訃報

平成五年八月三十一日までに事務局に届いた訃報は左記の通りです。(五十音順)
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

谷垣 博殿	一〇、〇〇〇円
谷垣美代子殿	一〇、〇〇〇円
野村 節三殿	一〇、〇〇〇円
山田 淑子殿	一〇、〇〇〇円
荻野 武殿	九、〇〇〇円
木呂子恵美子殿	六、〇〇〇円
足立 徹殿	五、〇〇〇円
飯田 三郎殿	五、〇〇〇円
井本 義一殿	五、〇〇〇円
久保 知義殿	五、〇〇〇円
清水 正雄殿	五、〇〇〇円
須原 清殿	五、〇〇〇円
高見 幹男殿	五、〇〇〇円
田中 篤郎殿	五、〇〇〇円
西ヶ谷厚子殿	五、〇〇〇円
西川 宣孝殿	五、〇〇〇円
国村きぬゑ殿	四、五〇〇円
喜田 綾子殿	四、〇〇〇円
植村 章子殿	三、〇〇〇円
森田宏・とみゑ殿	三、〇〇〇円
吉田 明生殿	二、〇〇〇円
林田 孝子殿	一、〇〇〇円

安藤 道子殿	平成四年十二月二十九日
大江 康嗣殿	平成五年五月
大西 俊治殿	平成四年三月二十日
岡本憲太郎殿	
梶浦浩二郎殿	平成三年十一月十三日
久保 善信殿	平成三年十二月二十九日
小谷 正雄殿	平成五年六月六日
塩見つるゑ殿	平成三年二月一日
田中 健治殿	平成四年六月八日
内藤 敏夫殿	平成四年一月
西原 のゑ殿	平成四年八月
福島 輝子殿	平成五年一月二十三日
須原 清殿	平成五年十月一日

本誌次号の原稿締切りは平成6年8月20日です。

どんなテーマでもかまいませんが、編集上以下のように分類しております。

- ①ふるさとの話題▶ふるさとの近況を伝えるトピックスなど。
- ②ふるさと随想▶思い出の山川／子供の頃／故郷を出るとき／その他
- ③近況・エッセイ▶旅行や趣味／世相雑感／私の近況など
- ④インフォメーション▶展覧会／同好会／催し／同窓会など

■ワープロで打たれた方はプリントと一緒に複写のフロッピーをお送りください。

原稿枚数：400字詰め原稿用紙3枚（1,200字）程度

送付先：〒102 東京都千代田区神田小川町1-11 DMSビル内
関東氷上郷友会事務局

お便り 短信



足立 治氏 (青垣町)

昨年はちょっとからだをこわしました。

やはり年には勝てません。

気をきかし程よく帰る見舞客

(4・6・26)

足立美都子さん (柏原町・旧姓山本)

ますます充実していく『山ざる』。毎号楽しく拝見しております。

できるだけ大勢のかたが投稿されますようご尽力ください。いろいろなかたがたの文を拝見したいと願っています。

(4・6・12)

足立守久氏 (青垣町)

同 澄子さん (青垣町・旧姓古藤)

毎号『山ざる』を送って頂き感謝申し上げます。丹波をなつかしく思い出しながら、また旧友を思いうかべながら、楽しく拝見しております。

『山ざる』が送られて来るたびごとに、田舎がなつかしくなり、青垣に帰っております。

(4・4・2)

飯田光雄氏 (青垣町)

今年も立派な『山ざる』誌、ありがとうございます。表紙の画、口絵の写真、なつかしい言葉や地名のいっぱいあった文章など、何回も読み返しております。

(4・7・1)

植村章子さん (春日町・旧姓善積)

立派な『山ざる』ありがとうございます。ますます充実して楽しみにいたしております。郷里のことがわかって楽しいです。

(4・7・9)

久米 裕氏 (柏原町)

『山ざる』二十三号、昔懐かしく、す

みずみまで読ませていただきました。格調高い表紙、口絵写真の四ページは佐治川、奥の方は佐治？、

昭和七、八年、佐治より柏中に自転車通学していたとき(中学一、二年)、この川の下道路を通った懐かしい風景です(芦田辺ですか?)

郷友会の発展を祈ります。

(4・6・16)

酒井明朗氏 (山南町)

同 悦子さん (山南町・旧姓谷口)

いつも『山ざる』をなつかしく拝見しています。先日会員名簿で三十七年ぶりに友人に電話して、なつかしく話しました。

(4・6・25)

澤田みさをさん (柏原町)

今号も楽しく読ませていただきました。各分野で、ご活躍の会員のみなさまがたの様子に、感心申しあげております。今後とも、ご活躍のほどお祈り申しあげます。

(4・8・21)

清水正男氏（山南町）

会誌『山ざる』御送付いただくたびに、たいへんなつかしく、うれしく拝見いたしております。各号ともにスバラシイできばえで、感心いたしますとともに、編集を担当していただいている委員のかたがたのお骨折りに、ここから感謝いたしております。

わたくしも八十一歳を迎え、毎日元気で、楽しく余生を送っております。あと二十年くらいは、引き続き『山ざる』の愛読者でありたいと願っております。

氷上郷友会の益々の発展をここからお祈りいたしております。（4・6・12）

莊 正衛氏（柏原町）

二十三号一二一ページの「会員のみなさまへ」にこたえて一筆啓上。

会費払込用紙（払込通知書）の裏面に、原稿用紙風の枠を印刷して、近況、意見など、会員との対話通信の小欄を設けてはいかがでしょうか。五十程度のものであれば、だれにでも簡単に書けると思

います。題して、会員から『ちよっと一言』（4・6・22）

須原 清氏（市島町）

①足立源治氏の訃報は、五週間の入院生活をおえて、帰宅静養の第一歩のときだけに、ショックだった。

②春日建設(株)で、故伴仲さんたちと初めて顔を合わせた竹村政雄氏も、しばらく会わないと思っていたら、既に鬼籍！

往事 渺茫都似夢

旧遊 零落半帰泉

——白居易——

③波多氏の「郷愁」に小生、昭和十六年ごろの曾遊の北鮮を追想、同氏の若き日の情熱と今日のお仕合せをしのんだ。（曾遊以前に一度行った・来たことのあるという意の漢語——編集者注）

○示唆に富む谷垣富子氏の「郷里に思う」都市に充満する悪臭に、田園正に荒れんとす。人間性の喪失、教育の頹廃！

（4・6・19）

須原 清さんを悼む

渡邊 隆男

山ざる誌の校了まぎわに、須原さんの訃報が入った。そういえば近頃伏せておられると聞き、お見舞に伺わねばと思っていた矢先のことだった。十月一日の朝、心不全と腎不全を併発、急逝されたという。八十六歳だった。安らかなれ。

須原さんは市島町下竹田の産、日商岩井の元社長・西川政一氏の実弟である。

誰だったか、須原さんのことを「ミスター郷友会」と呼んだ。郷友会には皆勤



で、顧問の一人だった。快活かつダンディで、無類に人がよく誰とも気さくに交わった。イングリッシュを頻発すれば漢詩も流暢、そんな読書人でもあった。郷友の一团で郷里の西山家を訪ねたこと、台北の故宮を参観したこともあった。初江夫人も一緒だった。会食で夫人を愛妻と呼び、感謝の盃を高く捧げて皆をホロリとさせたこと、そんな思い出がとめどなく翔けめぐる。粋な帽子に白い羽根飾りを残して、氷上のシラノ・ド・ベルジュラック逝く。ボン・ボワイヤージュ。

徳田八郎衛（柏原町）

『山ざる』という会名への異論を誌上で拝見しました。わたくしも同意見。篠山出身者の会と思って、最初から拒否反応者さえいます。『ひかみ』で十分です。篠山出身者も併せ飲みこむ意気ならば『西丹波』でも結構です。（京都府のかたがたは、天田郡を奥丹波と呼ぶので誤解はないと思います。）

この春から中目黒の防衛研究所で、法

文系出身者のなかの一人だけの技術畑出身として勤務しております。お手伝いできることがあれば、お申しつけください。

（TEL〇三―三七―三三六―一内五七八）

（〇三―三七―三三六―四九）

（4・6・23）

長尾貴美代さん（氷上町）

毎年丹波の様子、楽しく拝読させていただいております。ありがとうございます。

（4・7・7）

林田孝子さん（柏原町・旧姓田）

美しい山ざる。なつかしい山ざる、御送付いただきまして、誠にありがとうございます。厚く御礼申しあげます。九十二歳という老人になりました、ひとしおの想いでございます。

（4・7・1）

山本紀子さん（山南町・旧姓西垣）

『山ざる』いつも届いたその日のうちから遅くとも二、三日中に、すみからすみまで読ませていただきます。

年齢、地域は多少異なっておりますが、ほとんどの文面から受けます印象が、

「うーん、あったあった、そうだったなア。わたしも体験したなア」など、感激しながらむさぼり読ませていただいております。

（4・7・10）

余田七郎氏（市島町）

いつも御苦労さま。父に見せるため、すぐ仏前にあげて、翌日から見るようにしています。

来年は関西旅行を考えているので、そのとき寄れたら田舎のほうへ廻ってみようかと思っています。変りかたにおどろき、浦島太郎の気分になると思います。

（4・6・12）

渡辺ひろ子さん（旧姓徳田）

郷友会のみみなさま、お変わりございませんか。平成三年祝寿会には、みなさまにお祝いしていただき、そのうえ、おこころのこもった記念品をいただき、厚く御礼申しあげます。

『山ざる』表紙丹波の秋、また霧深き山々、思い出は尽きることなく懐かしさでいっぱいでございます。

（4・6・8）

関東氷上郷友会々則

(名称)

第1条 本会は関東氷上郷友会と称する。

(目的)

第2条 本会は会員相互の親睦を図り、併せて郷土の発展に資することを目的とする。

(事業)

第3条 本会の前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 毎年1回以上全会員の参加集会を催す。
- (2) 八十歳の会員を祝寿する。
- (3) 毎年1回機関誌『山ざる』を発行し会員に頒布する。
- (4) 会員有志によるサークル活動を奨励する。
- (5) その他本会の目的を達成するために適当と認められる事業。

(会員)

第4条 本会は兵庫県氷上郡の出身者及び氷上郡に縁故のある者を会員とする。

(会費)

第5条 本会は会費として会員より年額一〇〇〇円を申し受ける。別に必要あるときは理事会の決定による額を申し受

けることができる。

(寄付金)

第6条 寄付金は随時受納できる。

(役員)

第7条 本会に次の役員をおく。

理事

若干名

会長

1名

副会長

若干名

常任理事

若干名

会計担当理事

2名

監事

2名

(役員の任務)

第8条 会長は本会を代表し会務を統轄する。副会長は会長を補佐し会長事故あるときは副会長のうち1名が会長職を代行する。理事は会務を執行し、常任理事は理事会から付託された事項または緊急事項の処理に当たる。監事は会務及び会計を監査する。

(役員の選任)

第9条 役員は総会において選任する。

(役員の任期)

第10条 役員の任期は2年とし重任を妨げない。

(役員の報酬)

第11条 本会の役員は総て無報酬とする。

(名誉会長・顧問)

第12条 本会に名誉会長及び顧問をおくことができる。

2 名誉会長及び顧問は理事会の議を経て会長が委嘱する。

3 名誉会長及び顧問の任期は役員の任期に準ずる。

(会議)

第13条 会議は総会と理事会とし、総会は通常総会と臨時総

会とする。

2 通常総会は毎年11月に開き、必要に応じ臨時総会を開

催することができる。

3 理事会は理事をもつて構成し必要に応じ開催する。

4 会議は会長が招集し、会議の議事は出席者の過半数に

より決する。

(委員会)

第14条 会長は本会の事業を分掌するため理事会の議を経て

委員会を設け、委員を委嘱することができる。

(会計報告)

第15条 本会の会計年度は毎年10月1日に始まり翌年9月30

日に終わるものとし、会計報告は通常総会において行うこ

とを原則とする。

(会則の改訂)

第16条 本会則の改正は総会の議を経て決定する。

役員氏名 (平成五年十月現在、敬称略)

会長 村上末吉

副会長 吉住重造 渡邊隆男

顧問 足立三治 上山 頭 植村章子 岡田一男

佐々木盛雄 谷垣正雄 田 英夫 波多洋三

細見綾子

監事 荻野 武 藤田正雄

常任理事 足立かをる 足立和巳 足立謙悟 小田富士夫

坂上勝朗 田中篤郎 常岡幹彦 鶴田ゆき子

出町京子 宮野 近

理事 足立勲平 足立静雄 足立誠一 安達陽一

秋元多美子 芦田重秋 小川晴通 大木正徳

大野善三 岡 吉明 粕谷 進 木村つた江

木呂子恵美子 小山年博 田中 寛

高見嘉都司 千種倫幸 堀井隆川

前田和市 村上 昇 村上善英 安原三智子

若林敏郎

92年 1～12月

政治・行政

▼市島町徳尾の「観光道路」完成

(1・23)

▼山南町が新成人の意見聞く 働ける場があればUターン 田園文化都市を望む
「日役や近所づきあいはいはきらい」ちゃっかりしている若者

(2・2)

▼氷上・多可郡のし尿処理施設「南桃園」老朽施設を全面更新 処理規模も大幅アップ 事業費四十五億円見込む 平成六年度完成めざす

(2・6)

▼春日町宮住宅の牛河内団地近く完成

(2・9)

▼助産費二十四万円にアップ 出産意欲向上に期待も 被保険者負担を軽減(氷上町)

(2・20)

▼市島簡易水道が完成 七年の歳月と十

四億円投入

(2・27)

▼篠山町天王峠の粗大ゴミ不法投棄対策で道路沿いにサク設置 隣の能勢町(大阪府)と「共同作戦」

(3・1)

▼新年度予算次々と

・柏原町 民生福祉の充実に力を
デ
イサービス始める

・篠山町 四十八滝の森林整備 遊歩
道や植栽一万本

・市島町 環境整備など重点に

・春日町 総合運動公園建設へ 大路
小校舎改築など

・山南町 秋に新町三十五周年式典

(3・8)

▼丹波十町予算案総額は五六五億円 前
年当初比七・四％減 福祉、教育、環境
が中心

(3・8)

▼山南町の木戸町長が辞意出す「病気で
職責全うできない」

(3・22)

▼青垣町で県緑化大会 式典や林業を考
えるつどい

(3・29)

▼全国で初の施設が完成 ゴミの焼却灰
を資源化(柏原町)

(3・29)

▼篠山町議会二減の条例案可決 議員定
数を二十に

(4・2)

▼高齢化率さらにアップ 丹波全体で二
十％台に 丹南町だけダウン(氷上、多
紀福祉事務所まとめ)

(4・12)

▼篠山町長選現職の新家さん三選

(4・16)

▼業務委託でゴミ一掃 シルバー人材セ
ンターと契約(市島町)

(4・19)

▼丹南町が「ふるさと創生奨学金」進学
者の向学心支援

(4・23)

▼全町下水道に向け基本構想を練る 柏
原町生活排水対策審

(5・10)

▼山南町長選に足立梅治氏初当選 ゴル
フ場開発計画は進める

(5・14)

▼ウィーン市長来丹「森は環境面でとて
も大切」歓迎会の講話で強調

(5・21)

▼税の適性化めざす 家屋の複合図作成

へ(春日町) (5・21)

▼高級車「3ナンバー」が急増 元年度の三・二倍(柏原財務事務所まとめ) (5・24)

▼丹波の空気はきれい 河川の水質汚濁の原因は家庭の雑排水(柏原保健所環境測定結果) (6・4)

▼丹波地域の就業人口第一次産業は十八・七%減 第二次、第三次産業は増(国勢調査第二次集計) (6・14)

▼町花「サギソウ」を守ろう 自生地の保存整備へ(今田町) (6・25)

▼梶原清参院議員が勇退 二期十二年の功績たたえ謝恩会 (6・25)

▼ゴルフ場計画を断念「用地買収が進まない」柏原町へ開発業者が通告 (7・2)

▼下水処理工事に利子補給 西紀町が制度創設 多額の負担を援助 (7・2)

▼生活排水の汚染進む 多紀郡の河川でめだつ大腸菌群数 (7・16)

▼強い酸性度にびっくり 丹波地方の雨

を測定(丹波環境セミナー) (7・19)

▼五ヶ野ゴルフ場開発 山南町若林地区で測量調査も反対 町の説明に理解は困難 (7・26)

▼丹波地域の経済活動より盛んに 急伸のゴルフ場利用税 県全体のシェア上昇 (7・30)

▼参院選兵庫選挙区 河本氏トップで初当選 本岡、片山氏議席守る 投票率ダウン最低記録 (7・30)

▼川代溪谷を鳥獣保護区に地元の公述人ら賛成の意見 (8・2)

▼窓口職員が英会話 外国人登録事務を円滑に(柏原町役場) (8・6)

▼赤水対策に処理池 市島町の簡水上垣浄水場 (8・23)

▼本年産米単品種集中化に拍車「コシヒカリ」七割へ「日本晴」は減少し十二%(兵庫食糧事務所柏原支所まとめ) (8・27)

▼氷上郡平成三年の人口動態 出生は七二人、死亡は七八四人 死因トップは

心疾患で五年間固定 (8・30)

▼丹波の百歳老人は九人 女性八人、最高は百三歳 八十八歳以上高齢者は四十九人増 (9・3)

▼西紀町のニュータウンへ 九十区画の造成が完成 計画人口五三〇人(9・6)

▼山南町長が懸案の「ゴルフ場」問題で議会に「説得を続け計画を推進」(9・10)

▼JR石生駅周辺整備で活性化委員会を設置 (9・13)

▼近代化施設に全面更新 氷上・多可郡し尿処理施設南桃苑で三十日に起工式 (9・20)

▼丹波十町の平成三年度決算見込み十六年連続全町で黒字 伸び率の規模は昭和五十二年度以来の大幅 (9・27)

▼丹波の森協会とウィーン市十三区が友好親善の提携仮調印 (10・18)

▼山南町へ中国から表敬訪問 (10・25)

▼埋蔵文化財保護条例に罰則規定(県合格者ゼロ再募集へ 多紀郡消防本部) (10・29)

発足以来初めて (10・29)

▼県の機関、毎週土曜閉庁 文化会館などは営業 (11・5)

▼春日町三井庄地区総会で総合運動公園受け入れを決定 (11・15)

▼青垣町長選 平岩氏無投票で八期当選 町議補選は三人の激戦 (11・26)

▼丹波の人口 十一万九千八百八十一人 (丹波県民局集計) (12・13)

▼丹波の新成人は一、七二二人 前年比八二人の増 (12・17)

▼平成五年の転作等目標面積 丹波は四十五・七ヘクタール緩和 (12・17)

▼豊かさの実感まだまだ ごみ処理や下水道に不満 (県民全世帯アンケート中間集計) (12・27)

事業

▼石生駅無人化撤回をJR西日本福知山支社へ水上町が要望 周辺整備や大型事業に影響 (1・26)

▼柏原町の小倉地区 建設事業で活気づ

く 河川改修とほ場整備 (1・26)

▼ふるさと桜づつみ回廊事業進む 近く丹波七町で一、四四〇本植樹 平成四年度から山南町井原、五年度は水上町西中 (1・30)

▼JR市島駅無人化に市島町は関係町と共同歩調で全町あげて反対署名運動 (2・2)

▼篠山口駅までの複線化決定 沿線住民の願い実る 工期五年、事業費一五〇億円 (3・12)

▼篠山口駅周辺の公共下水道 設計測量に着手 (3・19)

▼西紀町下水道事業を一気に 特別会計設置 (3・19)

▼「三宝ダム」現地で起工式 六年間で五億円投入 (春日町) (3・22)

▼竹田バイパスのルート決定 市島町の関係地区で説明会 (4・5)

▼地名ケヤキ並木道が完成 駅前グリーンベルト部分は今年度中に (4・5)

▼福知山―青垣―津山間念願の国道四二

九号に昇格 北近畿豊岡道は四八三号に (4・9)

▼桜づつみ事業を認定 うるおいのある水辺に 山南町井原の加古川左岸 (4・26)

▼丹波地方の公共土木事業費は約七十億円 北近畿豊岡自動車道の用地買収 山南町和田橋架け替え (柏原土木事務所) (5・17)

▼柏原農林業務所の主要事業費は四十六%伸び十三億円余 柏原町大新屋にキャンプ場 (5・17)

▼篠山川沿いにバイパス 篠山町和田―盤若寺間の一・二キロ (県道篠山―丹波線) 待望の開通式 (5・24)

▼篠山町の篠見四十八滝 保全林整備が完成 丹波を代表する森林浴場に (5・28)

▼全国街路樹コンクールで篠山町の「城下町線」に特別賞 潤いのある歩行者道 路 (5・31)

▼一般県道岩崎―市島線 バイパス(下

竹田)が完成 (6・28)

▼国道三七二号バイパス完成開通へ 篠山町福住・安口二・二キロ (7・23)

▼県道柏原・谷川・中線の奥野々峠のトンネル化 来年度着工 (8・2)

▼国道四二九号の青垣―生野間の生野峠など交通難所解消へ改良促進協議会が発足 (8・30)

▼福知山線複線化でJRと丹南町が十一集落で説明会 (8・30)

▼青垣町と加美町境播州トンネル(国道四二七号)二十一日待望の貫通式 (9・17)

▼新しい京橋(氷上町西中)が完成 散策道や景観にも工夫 (10・8)

▼柏高正門前環境整備へ 今年度は橋梁改築 来年度以降は道路拡幅 (12・10)

▼運転者の憩いの場に 近畿地方で初の「道の駅」さんなん仁王駅(山南町井原)に完成 (12・17)

学校・教育

▼柏高ワングル部が村おこしの登山路整備に協力 譲葉山へ橋架け替えも (1・16)

▼氷上郡の今春の小学校入学児童数八百人台に落ち込む 四十人以上は六校だけ 宗広小一〇二人、新井小三四人、上久下小四六人、小川小二七人、和田小七一、芦田小三五人、佐治小二四人、神楽小二〇人、遠坂小七人、竹田小三二人、前山小一六人、吉見小二六人、鴨庄小一八人、三輪小一六人、春日部小二七人、大路小三二人、進修小三五人、黒井小四三人、船城小二五人、南小三九人、中央小六七人、西小三七人、北小三三人、東小四八人、 (1・19)

▼学校週五日制アンケート 子どもや先生は賛成 保護者の反対意見強い(氷上郡教委まとめ) (3・5)

▼公立高一般入試の競争率は一・〇五倍 (3・5)

▼氷上町が国際人へ飛躍願って中学生と教員を独へ派遣 (3・12)

▼丹波の公立高校で入学試験 柏原高校では定員割れ (3・19)

▼山南町の体育館完成式 ピアノ開きで祝う (3・29)

▼氷上、多紀郡の校長移動

田村一之崇広小校長、上野敏夫久下小校長、上島成和中央小校長、田原肇和田小校長、山本義敬北小校長、八木甫瑳子東小校長、足立剛南小校長、中野千鶴子小川小校長、谷田卓男神楽小校長、芦田康三吉見小校長、大久保重明三輪小校長、勝川浩幸西小校長、小山迪夫鴨小校長、長澤弘春日部小校長、安達凱夫高平小校長、山本律青垣中校長、高見弘信春日中学校長、近成恭司篠山小校長、毛利敏治雲部小校長、紙屋祐次郎福住小校長、谷田昌城南小校長、岸本皓今田小校長、小山敏篠山養護学校長、貫井三男篠山中校長、安井利昭多紀中学校長、川崎瑞夫西紀中学校長、酒井一丹南中学校長、大路靖岡野小校

長、西山浩西紀北小校長 (4・2)

▼柏原高校の百周年事業で後輩達に「会館」建設を計画 柏陵同窓会の全額寄付で (4・9)

▼柏原高校に米国KM高校から二十一人目の留学生 (4・12)

▼柏原高校の大学合格者 国立大に四十八人、関関同立に六十四人 (4・19)

▼氷上西高校に感謝状 校外学習が他の模範 社団法人京都府青少年育成協議会から (5・10)

▼篠山鳳鳴高校の国公立は現役三十人が合格 進学希望者は九十五% (5・10)

▼柏原町新井小にホタルクラブ発足 再び飼育に挑戦 (5・31)

▼氷上高校のいきいきハイスクール創生事業 観光農園や家畜動物園 地域児童や生徒と交流 (6・14)

▼柏原高校ワングル部男子県高校総体で初優勝 十七年ぶり全国大会へ (6・11)

▼柏原高校に校旗寄贈 昭和二十年入学

の同窓生が母校の創立百周年を前に

(6・25)

▼春日中(学校週五日制の協力校)に配慮 第四土曜日は教科の勉強ひかえる (郡中学校長会申し合せ) (7・5)

▼氷上町西小の通知票スタイル一新 評価をより具体的に 表紙にクラス写真も (7・16)

▼氷上高女子バレーボール部 全国高校総体で四年ぶり三回目のV (8・9)

▼「柏校吹好会」が後輩達に高価な楽器贈る 創部三十周年を記念 (8・13)

▼十二日から学校週五日制がスタート 留守家庭の子が問題 小学校に指導員配置 (9・10)

▼柏高文化祭テーマは「アジアの声が聞こえますか」 真の国際化の推進に各学級が演劇や展示 (9・20)

▼春日町進修小「環境教育」で成果 花栽培やコイ飼育など 自然と共に生きる (10・4)

▼柏原町の崇広小が来年夏の再会を願っ

てホタルの幼虫を放流 (10・25)

▼川の環境を守ろう 市島町で各小学校が錦鯉放流 (11・1)

▼氷上高校文化祭 農産物販売に人気 商業科十年の歩みも (11・5)

▼篠山で県高校駅伝 柏高女子七位に入賞 男子の激戦に沸く (11・12)

▼生徒数の減少で氷上西校の問題 氷上郡地域推進協議会から県教委へ「施設整備配慮を」初めて要望書に明記 (11・15)

産 業

▼県下の「木炭」主産地―春日町野瀬需要増だが後継者なし 高齢者六人が伝統守る (1・16)

▼十年前に比べ丹波地方の農家戸数十一%ダウン 一種兼業が大幅減少 養豚農家は四分の一に (柏原農林事務所発表) (1・30)

▼丹波でもシカの被害続出 青垣、氷上町で生息調査実施 (2・2)

▼「観光はがき」第三弾 名所史跡をア
ピール(柏原郵便局) (2・9)

▼丹波年輪の里が「日本のスギ展」家具
から小物類まで多彩なスギ製品展示

(2・13)

▼今春の高卒就職者の初任給平均は十三
万八千一三八円 (2・23)

▼春日町船城西部の工場建設予定地増え
る。ミサワ関連四社が起工式(2・23)

▼Uターン転入者に奨励金 若者の定住
促進へ西紀町が条例提案 (3・8)

▼省資源にびったり ソーラー時計塔を
設置(丹波年輪の里) (3・26)

▼市島町北岡本に出店計画 ホームセン
ターファミリィ (4・16)

▼シャクナゲまつり盛大に 栽培講習会
や苗販売に人気(西紀町) (4・23)

▼氷上郡に異業種の交流はかる「プラザ
ひょうたん」が発足 講習会や共同開発

(5・10)

▼コブコウベの貸農園がオープン 市
島町与戸奥で (5・14)

▼経営の刷新めざしてJ A運動三カ年計
画作る 農地貸借促進へ規程(J A丹波
ひかみ) (5・28)

▼漢方の里の活性化へ「見事ノ! 葉草染
めオーレンの根毛で」 (6・7)

▼地元へ就職希望急増 初めて丹波の来
春高卒予定者の五十%超す (6・11)

▼人気呼ぶ「朝市」老人の生き甲斐援助
(市島町未来塾) (6・11)

▼高校に工業科導入を 県教委に要望書
提出へ(氷上郡工業会) (6・18)

▼不正規流通を防ぐ 本年産米全量集荷
へ推進大会(丹波地区農業) (6・21)

▼子供や老人招いて一緒に炭の窯出し
(青垣町の丹波木炭倶楽部) (6・25)

▼「川遊びを楽しもう」自然石で水辺空
間 西紀町の友渕川 (6・28)

▼スカイスポートアイランド完成 若者
のフライト基地に「町の活性化」に一役
(市島町未来塾)

▼黒大豆の定植に挑戦! 都会女性招いて
交流(多紀郡農業青年クラブ)

(7・2)

▼林業の衰退に歯止めを 若手業者がス
クラム 県内初の共同作業(氷上郡素材
生産業者の緑栄会) (7・9)

▼市島ワイン「霧丹波」を発表

(7・16)

▼二十年勤続者に家を進呈 深刻な人手
不足にユニークな求人策 都市から続々
応募(青垣町の「木栄」) (8・2)

▼「新泉源」掘り当てた「草山温泉」へ
給湯(西紀町遠方) (8・9)

▼修成建設専門学校に屋内演習場が完成
雨の日も授業OK (8・13)

▼地域農業の健全発展を 都市住民と交
流促進 氷上郡農業委員研修会で決議

(8・13)

▼女性の建築士を養成 高校出たばかり
の二人(氷上町森田工務店) (8・23)

▼のどかな田園丹南町東吹にウニ養殖の
工場が完成、「海の幸」栽培の時代へ

(8・23)

▼有機農業の実態を体験 韓国から研修

生六人が春日町古河の中野さん宅で実習

(9・3)

▼外国人労働者増に備え雇用時の留意点
学ぶ初の研修会(氷上郡工業会)

(9・6)

▼特産の「市島ぶどう」今年の生産量は
二十トン

(9・20)

▼新しい地域づくりに大臣表彰 春日町
国領ホビーファーム管理組合(9・24)

▼リンゴワインや柿ジャム 青垣に処理
加工施設 果樹類の生産拡大に力

(9・27)

▼寂しいノ黒井商店街十店に 危ぶまれ
る名物誓文払い 店じまいのほりが目立
つ

(10・4)

▼モミガラ一手に引き受け! 地域の産物
すべて還元(市島町の有機センター)

(10・11)

▼丹南町油井地区でれんげの里づくりス
タート 二十ヘクタールを花いっぱい

(10・18)

▼丹波地区最大の量産店「春日シヨッピ

ングセンター・アルティ」二十日にオー
ブンへ

(11・12)

▼本年産米集荷はほぼ終わる うるち米は
限度数量の約九十% もち米は五十三・
八%に(丹波地区農協実績)

(11・19)

▼山の芋を真空パック 皮をむいて包装
かぶれの心配なし 柏原町の呉羽プラス
チックが「包装フィルム」を開発

(11・22)

▼農業粗生産額ダウン 畜産全体の価格
が減る

(11・29)

社会・文化

▼山南町文化財に青田神楽を指定

(1・12)

▼井原橋南に仁王像 国道一七五号脇待
避所 建設省も公園化へ

(1・9)

▼常岡画伯の絵が「現代日本画集」のカ
レンダーに 題「石楠花の頃(室生寺)」

(1・12)

▼窃盗犯は二十件減少 交通事故も減る
(柏原署まとめ)

▼青垣町沢野の「ボラ山遺跡」竪穴式住
居跡など出土 高地性集落、かも 珍
しい内陸部での発見

(1・26)

▼昔ながらの炭焼きを復活 有志で本格
的な窯築く 貸し窯にも(青垣町東芦田
殿谷地区)

(1・30)

▼回収トレーを材料にペン立て、植木鉢、
貯金箱(主婦の店成松店)

(2・6)

▼横穴式石室(六世紀)が出土 篠山町
泉、教育の森、整備を前に鉄砲山古墳で

(2・9)

▼春日町平松の片山から郡内最大級の円
墳 横穴式石室(六世紀後半)が出土 地
方の有力者を追葬

(2・20)

▼好天に誘われ十万人 柏原八幡神社の
厄除け大祭

(2・20)

▼丹南町味間南の文保寺の楼門改修へ
室町末期の風格残す

(2・23)

▼山南町和田で岩尾城まつり 城跡で撮
影会や宝さがし

(3・1)

▼米寿迎えても腕は確か 現役顔負けの
仕事ぶり 信頼される名工由良末蔵さん

（市島町梶原）

（3・5）

▼柏原町の成徳寺 銅板に葺き替え改修
信勝（三代目）の宝篋印塔を整備

（3・8）

▼篠山ABCマラソン 一万一千人ひた走る

（3・12）

▼これはツチノコ？ 正体不明の骨に大騒ぎ 市島町尾端の山中で発見

（3・15）

▼山南町歴史資料館で絵馬の特別展

（3・22）

▼市島町の民族資料館で泊雲、泊月、芋錢展 記念句会なども企画

（3・26）

▼柏原駅に全国四番目の、明治のポスト
黒色の角柱スタイル

（3・29）

▼日本一“石の基盤” 石見神社（柏原町
大新屋）で除幕 新井の森林組合が奉納

（4・2）

▼量販店の協力で急増 昨年度の牛乳パックの回収（丹消連調べ）

（4・5）

▼柏原町歴史民族資料館が信勝（柏原藩
三代目藩主）の掛け軸を入手（4・16）

▼デモやめジャズ演奏 連合丹波若者向

けにイメチェン 丹有労連は結成後初の
式典やデモ行進

（4・26）

▼鬼の架け橋を題材に「ふるさと公演」
に向け練習に励む 日舞の西崎祥さん

▼椎の実や柏原藩連太鼓と共演（4・26）

▼“花の海”に囲まれて丹南町油井のれ
んげまつりに七千人

（4・30）

▼柏原町の名物料理に 特産物を使った
「柏の葉寿司」―主婦のアイデア料理を
商工会が売り出す

（4・30）

▼一千万超の高額納税者 丹波は百三十
人、八割が譲渡所得者（柏原税務署管内）

（5・7）

▼十三年間の成果に博士号 混合注射液
の研究 柏原病院の浅原さん（薬剤師）

（5・10）

▼トレーや牛乳パックの回収箱に生ゴミ
投棄 “マナー違反”めだつ

（5・17）

▼丹波年輪の里オープン五周年祝う
貝原知事らがクロガネモチ二本を植樹

（5・21）

▼いやがらせて発砲？ 柏原町南多田の土
谷さん方に銃弾

（5・28）

▼第二電々が福知山にPOI（接続点）
新設 市外電話サービス競争激化

（5・31）

▼丹波少年自然の家に巨大なテーマポー
ル 開所十五周年祝い伊丹の高齢者木彫
クラブが製作

（6・4）

▼人と環境にやさしい生活を 丹波で初
の環境講座（丹波生活科学センター）

（6・7）

▼氷上町に美術館を寄贈 植野アジア芸
術振興財団が「故郷に恩返し」中国の書
画やニューギニア民俗資料も

（6・11）

▼高齢者コーラス全国大会「シルバーエ
コーささやま」が地元で開催 三十団体
が出演申し込み

（6・18）

▼“ホタルの里”を楽しむ 山南町青田
の環境づくり効果発揮

（6・18）

▼“青垣にアトリエ”を 日本画展の地
域おこし ログハウス業者が若手画家に

PR (6・28)

▼高齢者の「やすらぎ」に 柏原町デイサービス始める (7・5)

▼柏原にカブトムシ山を 町内の若者グループが養殖に取り組む (7・9)

▼旧石器時代の石器出土 丹波では五番目の発見 市島町の「梶原遺跡」 (7・12)

▼青垣二千一年日本画展 二十六都道府県から二五八点の応募 (7・12)

▼カボチャの「博物館」 「おばけ級」からひとくちサイズまで春日町の荻野さんが趣味で四十四種類を栽培 (7・12)

▼氷上町谷村の玉光山古墳 円筒埴輪の破片が出土 郡内で三例目の発見 古墳時代中期の円墳 (7・19)

▼大釜で「サウナ風呂」 ログハウス「ごりんかん」に設置 (青垣町東芦田の村おこしの会) (7・23)

▼山南町の田応教 教主後継者推戴記念に日本一の大香爐を建立 世界恒久平和を祈願 (7・19)

▼県下第一級の大木 山南町谷川の高座神社のフジギが県文化財指定に (7・26)

▼丹波の夏まつり
・市街地で三年ぶりに復活のデカンショ祭り (篠山町)
・迫力満点の花火大会 二日間に五千五百人 (柏原町)
・成松の愛宕祭りは伝統受け継ぐ造り物スカイアート大会も (氷上町)

▼全国歌壇にさっそうと春日町の吉見道子さん 短歌研究新人賞で最終候補八人に残る (8・27)

▼氷上町新郷の伊尼神社で伝統のすもう大会復活 (9・10)

▼飲食店経営者ら決起「みかじめ料」を拒否 氷上郡暴力団追放推進協議会を結成 (9・13)

▼秋まつりが楽しみ 山南町北和田で子供みこしを奉納 春日町黒井で地域あげて黒井城まつり そうめん流しに人氣篠山町黒岡の春日神社の「丹波夜能」 (9・13)

▼ふるさとの史実を後世に「梶原郷土誌」を自費出版 (市島町の荒木さん) (9・7)

▼「山の駅」一周年の柏原駅シャッターに描いた柏高生の絵画を除幕 (9・27)

▼国内でも珍しい淡水魚「ハリヨ」の生息明らかに 氷上町教委が天然記念物に指定 (10・1)

▼兵庫・青垣もみじの里健康マラソン 過去最高の二、九五八人申し込む (10・1)

▼山南町太田の慧日寺 鎌倉の禅宗様(唐様)に修復 十二月八日に落慶法要 (10・11)

▼氷上町清住の「ホテル館」来年のホタル祭り夢見てボランティアが飼育 (10・11)

▼賢清上人のルーツ訪ねて氷上町香良の岩瀧寺へ 佐渡の金井町から調査 寺領の範囲も明らかに (10・15)

▼三七二号の今田町三百メートルの歩道

に立坑焼のエト十二体を設置(10・15)

▼企業も福祉のお手伝い 工務店の社員が交代で入浴サービスに 助っ人(青垣町社協) (10・22)

▼本場日本で柔道勉強 工場勤務の一方柔道教室に入門 ブラジルの日系男性三人 (10・22)

▼日展で八回目の入選 難しいポーズに挑戦(柏原町の彫刻家磯尾隆司さん) (11・1)

▼K・M高校留学生のゲリーさん「留学は貴重な体験」と柏原高校を訪れ講演 (11・8)

▼正月用品の購入拒否を 暴力団の資金封じがねらい 篠山署が千八百店に協力要請 (11・8)

▼ふるさとの歴史や文化財を十年かけ調査 青垣町の谷田勝さん「栗住野村史」を発行 (11・12)

▼暴力追放の輪広がる 加入増加で二百四店に(氷上郡) (11・15)

▼市島町の芦田翁の顕彰碑除幕 全国に

先がけ「ほ場整備」 (11・19)

▼「歩兵七十聯隊史」を発行 ノモンハン、本土防衛、軍旗奉焼……極秘資料を初公開 丹南町の酒井さんが五年がかりで完成 (11・26)

▼川代ダムを野鳥天国に 住民が愛護協会を設立 (12・3)

▼「日本のお正月楽しみ」山南町へオーストラリアの学生 (12・13)

▼柏原町の奇勝「鬼の架け橋」落下騒動に終止符 周辺の雑木を伐採 (12・20)

▼市島町の「梶原遺跡」第二次調査終わる 縄文時代から中世まで出土 (12・24)

▼すっぱり雪景色 ホワイトクリスマスマス (12・27)

■93年1〜7月

▼春日町の村上町長入院中に辞職願いつ提出、翌日死去 任期中で無念の退任 (1・10)

▼天然記念物の価値十分 市島町上牧の厳島神社のイチイガシの大木 (1・14)

▼氷上郡の交通事故増えたが死者減る 物損事故は過去最多 (1・14)

▼喫煙行為が大幅増 昨年の少年非行状況(篠山署のまとめ) (1・14)

▼景気対策に二十二億円 大型補正予算で増額 道路、河川事業など(柏原土木) (1・17)

▼スリランカの農業研修生迎え学習会開いて交流(丹南町大山小) (1・17)

▼柏陵会館建設へ四月から募金活動開始 (1・21)

▼「氷上市」実現に本腰(氷上青年会議所) (1・21)

▼国営の東播用水事業二十三年かけ完成 川代ダムから送水 (1・24)

▼氷上町の生活排水処理、受益者負担を大幅軽減へ 事業の促進ねらい条例改正 (1・28)

▼新斎場計画が暗礁に 柏原町は「地元」の要求満たせない (1・28)

▼柏原町上小倉の樋詰遺跡から中国の古銭二十一枚出土 日本製の「私鑄銭」か 七世紀の堅穴式住居跡も (1・28)

▼ユリ山を開発、スカイスポーツで「むらおこし」 (青垣町口塩久) (1・31)

▼昭和五十九年以来の大雪 三〇〜五〇センチの積雪記録 臨時休校した学校も (2・4)

▼満天の星と語ろう 耐寒登山で山賊鍋 (丹波少年自然の家) (2・4)

▼「地区住民を意識」七十五% 結婚問題で被差別体験 (氷上郡教委が意識調査) (2・4)

▼能面打ちに生きがい 小面、翁面など力作五十点丹波新聞社で作品展 (山南町の津瀬武雄さん) (2・7)

▼折杉神社 (市島町徳尾) でカユ占い晩

稲やブドウは豊作 田植えは日照りで雨不足 (2・7)

▼入学児童は年々減少 二十人台の小学校が十三校 (氷上郡内) (2・11)

▼人気の「織田釜めし」郷土食生かした駅弁 J R柏原駅で販売 (2・11)

▼老人ホーム入所など四月から町が窓口 県から町へ措置権移譲 (2・14)

▼赤井一族の鎧を発見 春日町黒井の兵主神社 (2・14)

▼春日町長に無投票で萩野政一氏初当選 (2・18)

▼市島町の丹寿荘が寝たきり追放で食堂も拡大 車イスで食事もできます (2・21)

▼二日間に九万三千人 さすが柏原の厄除さん 好天に恵まれにぎわう (2・21)

▼「丹波の森公苑」着工 青垣町には「シカ公園」 (2・25)

▼「農協に預けたい」が約三割 農地保有合理化促進事業で意識調査 (丹波ひか

み農協発表) (2・28)

▼柏原八幡神社の三重塔、檜皮屋根の改修始まる 全面改修二十七年ぶり (2・28)

▼地域のバス路線守ろう 集落ごとに乗車運動 (氷上町西地区) (3・4)

▼空き缶処理に威力 缶回収機「くうかん鳥」 (3・4)

▼新年度予算案次々と 青垣町 総合運動公園に着工 市島町 三輪小全面改築へ 丹南町 味間小の改築完成へ 西紀町 下排水事業を一気に (3・7)

▼卒業記念に錦鯉放流 (春日町進修小学校) (3・7)

▼各町の予算案出揃う 柏原町 下水道元年スタート 氷上町 東小第一校舎改築 (3・11)

▼最古級の埴 (からすき・七世紀中ごろ) が出土 市島町の梶原遺跡 (3・11)

▼「修羅」使って石運び 卒業記念に花壇作り 春日部小六年 (3・11)

▼週休五日制順調に 少数だが「ヒマ」な子も(春日町で) (3・14)

▼丹波十町新予算案総額は七百六十三億円余 積極型、高い伸び率 (3・18)

▼学校間でパソコン通信 子らにエイズ教育も(氷上郡教委) (3・18)

▼マツタケ増産に篠山町が本腰

(3・21)

▼死亡事故急増、柏原署が各町長へ事故抑止で要望 (3・21)

▼青垣町の「丹波布」県の伝統工芸品に指定 (3・21)

▼檜皮(ヒワダ)・柿(コケラ)茸きの第一人者 国選定保存技術保持者に村上栄一さん(山南町篠場)を認定

(3・25)

▼旧制柏原中同級生達が故上田三四二さんの歌碑を柏原八幡神社に建立

(3・25)

▼山南町の和田橋架け替え工事始まる

(3・28)

▼二紀会同人の中野さん(春日町)が青木繁記念大賞入選 画風も一変して気力十分 (3・28)

▼校長異動 西垣和美柏原高校長、浅井晃曉篠山鳳鳴高校長、新家盛次氷上高校長、西垣正新井小校長、谷口慎吾上久下小校長、大野昶遠阪小校長、藤原敦實佐治小校長、藤田富子竹田小校長、高見幸伸前山小校長、足立洋子船城小校長、三方彰一黒井小校長、上田雅之大路小校長、萩野康夫和田中校長、大槻修一氷上中校長、山本太朗市島中校長、小林弘二畑小校長、大西克彦後川小校長、佐野忠義大牟小校長、足立治大山小校長、奥原弘古市小校長、酒井紀男西紀南小校長、野々口睦己今田中校長 (4・1)

▼週休二日制条例を否決(丹南町議会)

(4・1)

▼多紀郡の合唱団「音楽の都」で公演(丹波の森協会が派遣)

(4・4)

▼氷上町が「岩龍寺と賢清上人」発刊

(4・4)

▼氷上郡の高齢化率初めて二十％台に

(4・5)

▼散策道のカラー舗装 桜づつみモデル事業完成(青垣町)

(4・8)

▼求人数が大幅に減少 不景気の影響くつきり(柏原職安)

(4・11)

▼機械田植え十アール当たり七千五百円農作業の標準賃金(多紀郡)

(4・11)

▼授業時数確保に工夫「学校週五日制」の課題 春日町の小中学校中間報告まとめる (4・15)

▼市島町・長尾テニスコートに照明灯都会人との交流の場に (4・15)

▼景気低迷感一段と強く 経費節減がトッ普 中信が中小企業動向調査 (4・18)

▼樹齢三百年の老木ピンチ 氷上町清澄の達身寺の山門がわりのクスノキ

(4・18)

▼「総合学科」の新設を「移転」もほめかす 焦点の氷上西高問題 (4・22)

- ▼篠山鳳鳴高校 国公立大に七十四人合格 現役の健闘目立つ (4・29)
- ▼減少する丹波の耕地面積 三十年間に二、三〇〇ヘクタールも 家畜飼養農家は激減したが大規模化 (5・2)
- ▼泥んこになって田植え 水田活性化事業で体験 (山南町金尾子ども会) (5・9)
- ▼「デカンショ恋唄」と「八上城」を振り付け 西崎祥さんが柏原で舞踊講習会 (5・9)
- ▼青垣に野生鹿管理施設 (5・13)
- ▼三十歳以上の結婚推進 仲介報償金や祝い金(市島町) (5・16)
- ▼漏水で応急補修工事 篠山城跡の東馬出し (5・16)
- ▼青垣町神楽小が地元の間伐材を活用して特別教室 (5・16)
- ▼柏原八幡神社の三重塔は雷火の焼け残り転用 再建より二百年前の部材 宝輪に「元和四年」の銘 (5・20)
- ▼篠山養護学校新築 待望の独立校舎に (5・20)
- ▼高額納税者千万以上は三十九人 前年より九十一人減る「土地長者」 減が原因 (5・20)
- ▼病院並みの器具導入 お年寄りがリハビリ (青垣町の特別養護老人ホーム) (5・23)
- ▼柏原町の平岡さん七十二歳で毎日バレーボールの練習 生涯スポーツの模範で町長が特別表彰 (5・23)
- ▼総樫造り也足寺の山門、百七十年ぶりに大改造 古い部分を残して修復 (山南町梶) (5・23)
- ▼「町堂斎場建設に反対」隣接の香良地区が看板(氷上町) (5・27)
- ▼完全週休二日制の時代 氷上郡広域行政事務組合 (5・27)
- ▼伝統の「技」を一堂に 青垣で全国もめん展 (5・27)
- ▼福知山線の複線化 四年後完成に向けて丹南町中心に用地買収 (5・30)
- ▼警戒ため池は二十九カ所 防災対策の強化を(篠山土地改良管内) (5・30)
- ▼二十八年ぶり宝鎖取り替え 柏原八幡神社の三重塔の修復進む (6・3)
- ▼氷上インター周辺整備で街づくり会社 氷上町が出資金 第三セクターで運営 (6・3)
- ▼福祉先進国に学ぼう ドイツ、デンマークへ視察団三十人を派遣(多紀郡福祉連合会) (6・3)
- ▼氷上町にダニの薬剤テスト実験場 健康住宅普及協会が設置 (6・6)
- ▼谷川下水道に着手 和田処理区は最終年に(山南町) (6・6)
- ▼山南町北和田のワープロ教室好評 (6・6)
- ▼七日市遺跡は旧石器から平安までの複合遺跡 研究家の注目集める(県教委) (6・10)
- ▼篠山口―福知山間複線化 早期実現へ要望活動展開へ (6・10)
- ▼胃がん死亡がトップ 肺がん(男子)

大腸がん(女子)が次ぐ 臓器別がん死
亡の推移(氷上町) (6・10)

▼氷上郡の商業振興に情報局開局など提
言(県立中小企業総合指導所)

(6・17)

▼太鼓競演やコーラス 盛大に市島町の
花しょうぶまつり (6・17)

▼「除草、防虫まかせて!」これぞ「環
境にやさしい農法」水田に「アイガモ隊」

(春日町の長井さん) (6・20)

▼野外活動の利用相次ぐ 柏原町の丹波
悠遊の森 (6・20)

▼故郷で水墨画展 氷上町出身の安田
虚心さん (6・20)

▼篠山保健所、エイズ対策を強化

(6・24)

▼シェア低下の柏原町商店街 活性化プ
ラン作りの委員会発足 (6・27)

▼春日町紹介ビデオ五百本作る 希望者
には販売も (6・27)

▼篠山藩の古文書、陣笠など里帰り 旧
藩士の大原家が歴史美術館に寄贈

(7・1)

▼氷上西高の位置問題 青垣と他町が
“分裂” (7・1)

▼市島町下竹田で大豆の苗植え 立木ト
ラストの一環 (7・4)

▼兵庫県議会の議員定数現状維持を氷上
郡町村長会と議長会が要望 (7・4)

▼ゴミの“不法投棄”許さない 監視員
制度スタート(青垣町) (7・8)

▼関西氷上郷友会が優勝旗六本を寄贈
郡中学校体育連盟 (7・8)

▼ヌートリアに四苦八苦 稲の苗を食い
荒らす(氷上町上新庄) (7・11)

▼広島の花が丹波走る 反核・平和の火
リレー (7・15)

▼篠山町の「かじかの里・わんぱく広場」
が「手づくり郷土賞」受賞 建設省が認
定 (7・18)

▼今年の梅雨の降水量、この五年間で最
高 (7・18)

▼丹波の遊休農地四百ヘクタール 解消
へ積極的に取り組む(柏原農林事務所)

(7・18)

▼衆院五区谷氏トップで連続七選 吉岡
氏も再選果たす (7・22)

▼竹田川に「ゴリ」戻る 河川工事一段
落で川の汚れ薄らぐ(市島町) (7・25)

▼丹波地方のゴルフ場、前年度より利用
者減る (7・29)



平成4年11月29日

会 計 報 告 書

関東氷上郷友会

(平成3年10月1日～平成4年9月30日)

会計理事・足立和巳

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	676,744	現金 109,381- 郵便貯金 107,099- 振替口座 323,990- 普通預金 136,274-	出 版 費	1,218,954	「山ざる」23号 製作費及び発送 費
年会費収入	377,000	延221名	通信・印刷費	112,238	総会及び役員会 案内他
総会費収入	414,000	6,000円×69名	総 会 費	499,855	総会関係支払
役員会費収入	90,000	3,000円×30名	長 寿 祝 費	36,379	長寿者記念品
編集会費収入	0		会 議 費	222,386	新春役員会定例 役員会他
寄 付 金	277,500	延29名	慶 弔 費	15,450	故足立源治副会 長生花代
広告料収入	729,000	延62名	支払手数料	14,443	郵便振替手数料 及び送金料他
受 取 利 息	7,624	郵便貯金分 6,625- 普通預金分 999-	消耗品費他	0	
雑 収 入	24,400	総会時、黒豆販 売代	繰 越 金	821,305	現金 54,872- 郵便貯金 61,871- 振替口座 166,090- 普通預金 38,472- 定額預金 500,000-
HM 資 金	344,742				
合 計	2,941,010		合 計	2,941,010	

監査の結果、上記の通り相違ありません。平成4年11月23日 藤田正雄 荻野 武

建築材料販売工事

建設大臣許可 第 1834 号

中央建材工業株式会社

専務取締役
東京支店長

荻 野 武

(市島町出身)

本 社 名古屋市千種区高見 1—6—1
電話 052 (761) 6181 (代表)

東京支店 東京都中央区銀座 7—14—3
電話 03 (3543) 8106 (代表)

大阪営業所 大阪市西区江戸堀 1—8—15
電話 06 (443) 6665

豊田営業所 愛知県西加茂郡三好町大字三始西田 3—4
電話 05613 (4) 3121

仙台出張所 仙台市青葉区高松 2—11—15
電話 022 (273) 5724

札幌出張所 札幌市中央区南一条西 7—12
電話 011 (271) 3961

新潟出張所 新潟市米山 5—1—25
電話 0252 (45) 1705

松本出張所 松本市野溝木工 1—6—58
電話 0263 (25) 0351

広島出張所 広島市西区中広町 1—4—16
電話 082 (291) 3780

財団法人 東洋療法研修試験財団 理事

社団法人 日本鍼灸師会 名誉会長

鍼 専 門

杏 林 堂

院 長 小 川 晴 通

新宿杏林堂

〒163東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル5F

電話 03-3348-0721 FAX 03-3348-0722

故宮博物院の名蹟



中国歴代皇帝が継承した美術史上屈指の名画
・法書二〇〇余点。原寸、原色の完全複製。

宋 梁楷 潑墨仙人図（紙本・墨画）
頒価 38,000円（軸仕立 124.5×39.4cm）

二玄社 東京都千代田区神田神保町2-2 電話03-5210-4700 振替東京4-28782 内容見本呈

二玄社の定期雑誌

本格的腕時計の専門誌

[インターナショナル・リスト・ウォッチ]

INTERNATIONAL
WATCH

- A4判変型
- 季刊 年4回
- 定価 1300円(税込)

自動車評論のオピニオン誌

CG

- A4判
- 月刊 毎月1日発売
- 定価 1010円(税込)

ひと・くるま・社会をソフト面で考える

NAVI

- A4判
- 月刊 毎月26日発売
- 定価 680円(税込)

古今の名車を美しい写真で紹介する

SUPER CG

- A4判変型
- 隔月刊 奇数月の22日発売
- 定価 1800円(税込)

二玄社 東京都千代田区神田神保町2-2
電話03-5210-4700/振替東京4-28782

代表取締役社長 渡邊隆男

心に刻まれる感動の一瞬。

スポーツにはドラマがある。

あらゆるスポーツウェアのご相談は当社へ

 **ノーブルスター株式会社**

取締役会長 吉 住 重 造 (春日町中山出身)

〒101 東京都千代田区東神田2-4-7 電話(03)3866-9121(代)

消費税・法人税・所得税・相続税・贈与税
の相談・代理申告

船越税理士事務所

税 理 士 船 越 祥 郎

(春日町多田出身)

〒196 東京都昭島市郷地町 2-17-9 電話(0425)44-5997

株式会社 三 葉 水 道

代表取締役 橋 爪 忠

(氷上町黒田出身)

〒276 千葉県八千代市八千代台西 7-5-29

電話 0474-84-7121番 FAX 0474-82-9626番

門と塀と庭 ブロック 門扉 車庫
プレハブ サンルーム ベランダ 温室

株式会社 大_{ダイ} 樹_キ

代表取締役 岡 吉 明

(柏原町出身)

〒351 和光市南1-11-40 電話 (048)463-4420 (代表)

大菱印刷有限会社

田 中 寛 (山南町出身)

〒110 東京都台東区台東1-27-5 大塚ビル

☎03-3833-1595

同郷の著者による珠玉のエッセイ集

様々な出会い

上山 顕著／四六判 352頁／定価2000円

[大船調映画]の盛衰を描くドキュメント

撮影所のある街 大船物語

升本喜年著／四六判 242頁／定価1500円

株式
会社 **ホンゴ出版**

代表取締役 池田 忍

東京都中央区明石町 2-16-501

〒104 ☎03(3248)6625

郵便振替 東京 3-144071

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます

電気主任技術者第一種免状 第2-319号
技術士(電気部門)登録証 第15810号
エネルギー管理士(電気)免状 第2857号
エネルギー管理士(熱)免状 第5191号

若森技術士事務所

所 長 若 森 敏 郎

〒302 茨城県取手市白山5-4-13
TEL 0297(72)0907

丹波茶・宇治茶の御進物 御贈答に 明日香園の健康銘茶を!

《明日香園のオリジナルブランド》 ウーロン茶の缶ドリンクが
ただいま大好評です。各種御注文は本社工場にて直接承ります

創業明治四年 伝 統 銘 茶

株式会社 明日香園

代表取締役社長 池畑豪士郎

本社：東京都千代田区九段北2-3-2 電話(03)3265-2579

本社工場(御注文承り先) 兵庫県氷上郡柏原町南多田3146

電話(0795)72-3588 フリーダイヤル0120-163588

直販店：西武百貨店池袋本店B1 電話 5952-5076(直通)

調布市中央図書館
文芸誌「たきおん」同人

木 村 つ た 江

東京都調布市東つつじヶ丘 2-39-5
電話 (03) 3300-6895

株式会社 **近藤写真製版所**

取締役社長 **近 藤 勇 夫** (国領出身)

東京都新宿区下宮比町 2 番17号 電話 03-3260-6281 (代表)
FAX 03-3260-6527

足立和巳

自宅 府中市栄町一―一五―二七
電話(〇四二三) 六四―七二二七

足立勲平

〒251 藤沢市鵠沼 藤ヶ谷一―七―四
電話〇四六六(二二七) 二六四六
(二二二) 六四六一

足立静雄

足立誠一

〒248 鎌倉市鎌倉山四―八―二五
電話 〇四六七―三一―三六〇〇

(株) ミワシステムズコンサルティング

代表取締役 足立謙悟

〒220 横浜市西区岡野一―十三―十三
TEL(〇四五) 三二―一五四一八
FAX(〇四五) 三二―一三八〇一

株式会社ニュー東京フーズ

社長 足立卓巳

〒284 千葉県四街道市美しが丘二丁目一九―一
電話 (〇四三四) 三二―四八七七番

足立良平

電話 (〇三) 三五〇八一八二三八

井本義一

〒194-01 町田市能ヶ谷町一六二六―七
電話 〇四二七―三四―五六一九

日本損害保険協会
特級(一般)資格 第特一三五八六号
飯田保険事務所

飯田光雄

〒285 千葉県佐倉市白銀四―十四―五
電話 〇四三(四八五)〇五〇三
FAX 〇四三(四八五)〇二九一

上田脩

〒112 東京都文京区小石川五―一七―六

生田清弘

〒157 東京都世田谷区成城一―七―七
電話(〇三)三四一五―一八九三

上山顯

〒106 東京都港区元麻布二ノ一一ノ三六ノ五〇三

日製産業株式会社

相談役

大 木 正 徳

〒105

東京都港区西新橋一丁目四ノ一四
電話(〇三)三五〇四一七一一番

前 参議院議員
現 日本自動車ターミナル株式会社取締役社長

梶 原 清

〒102

東京都千代田区平川町二丁目七十九全共連ビル5F
電話 〇二―三二一六三―六一二一(代)
自宅 電話 〇二―三二一六三―六一二一(代)
〒152 目黒区東ヶ丘三―三―三八アルカサーノ東ヶ丘302
電話 〇三―三四一八―一一二二五

大 野 善 三

自宅 電話 〇四二七―四六―八七九〇
〒228 相模原市相模台七―二五―八

粕 谷 進

〒276 八千代市八千代台南二―七―一一
電話 〇四七四―八二―〇七〇九

小 田 富 士 夫

岸 田 勇

〒343 越谷市東越谷二―三―三二
電話 〇四八九―六六―五二二六

木呂子惠美子

坂上勝朗

久保春雄

静岡大学教授

坂本重雄

〒300-03 茨城県稲敷郡阿見町中央一―一―102
電話 ○二九八―八七―七八四三

自宅 〒422 静岡市小鹿三丁目四―五
電話 ○五四(二八二) 八〇五八番

社団法人日本産業用ロボット工業会

理事 小森康宏

〒157 東京都世田谷区北烏山三―一三―一四―五一〇

佐々木盛雄

〒161 東京都新宿区中井二―十一―十八

笹倉 強

〒352 新座市栄四ノ五ノ二五
電話 ○四八―四七七―五六四〇

デイー・エス・デザインワークス

アート・ディレクター 鈴木 大 助

〒272 市川市南行徳三―一七―二六―二〇六
電話 ○四七三―九八―九四四〇

須原 清

〒164 東京都中野区南台五の三〇の六
電話 (〇三)三三八―一六二二番

正呂地 群 治

〒105 東京都港区芝大門二―一六―十二
(正呂地ビル)
電話 (〇三) 三四三一―二六五三

勢川 武 彦

〒164 東京都中野区東中野二ノ一七ノ二〇
電話 (〇三)三三六―一八六七六番

高見産婦人科

医学博士 高見 嘉 都 司

東京都板橋区熊野町四〇番地
電話 (二九五六)〇六〇〇番

田 中 篤 郎

田 中 憲 雄

〒251 藤沢市西富二一八―七
電話 ○四六六―二六―七九二九

谷 垣 正 雄

東京都杉並区高井戸西一―二四―一七
電話 (二三三二) 一〇七六番

医学博士 常 岡 昭

眼科・常 岡 医 院

〒154 東京都世田谷区桜新町一―一九―一四
渡部ハイツ二階
TEL (03) 三四二八―八八七七

常 岡 幹 彦

鶴田 宏

田 英 夫

東京都千代田区永田町二一―一
参議院議員会館220号室
電話 (三五八) 三二二一 内線五二二九

中 居 篤 子

〒113 文京区本駒込六―二五―三
電話 ○三―三九四―六四三六

新 田 浩 迪

〒222 横浜市港北区師岡町四一八グリーンヒル大倉山C-106
電話 ○四五―五四―三四二九

日本舞踊
端 唄
西 崎 祥
根 岸 妙

〒223 横浜市港北区大棚町五〇〇―八
電話 (〇四五) 五九一―六六五五

野 村 豊

〒156 東京都世田谷区船橋七―四―一二
電話 ○三―三四八―九九三〇

波 多 洋 三

〒112 文京区春日二一―一七一二
電話 (〇三)三八一一―二八六〇番

畑 義 則

伴 野 剛 敬

〒240-01 神奈川県三浦郡葉山町長柄字南郷一六四―一五五
電話 〇四六八一―七五一六七四五

秀 仔

宗教法人 青葉山 真照寺

八王子 青葉靈苑 管理

(都営八王子霊園となり
新規墓地分譲案内中)

住 職 堀 井 隆 川

〒193 東京都八王子市元八王子町三一―三三九七
電話 (〇四二六) 六三一八四〇三

瑞豊産業株式会社

代表取締役
社長

水 船 隆 昌

〒102 東京都千代田区五番町六
グレイス五番ビル7F
電話 (〇三)三三二二―七三三五

(財) 兵庫現代芸術劇場

常務理事

満 浦 謙 之

〒650 神戸市中央区下山手通四―一六―三
兵庫県民会館4階
TEL 〇七八(三三三)一一五〇・一一五一
FAX 〇七八(三三三)一一五二

国際行政書士協会会員
東京都行政書士会会員

行政書士 宮 野 近

〒192 八王子市打越町一・二一三―三
TEL 〇四二六(三三三)四三八五

ウエディングドレス専門創作卸

(株) シャルム商会

常務取締役
東京店店長

村 上 昇

東京店 〒164 東京都中野区弥生三ノ五ノ三
電話 (〇三) 三三七四―〇二一五(代)
本社 〒604 京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話 (〇七五) 二二二二―〇二一五(代)

村 上 久 夫

〒168 東京都杉並区高井戸東三―四―十二
電話 (〇三) 二三三三―一七一三四番

森 田 宏

〒206 多摩市貝取三―四―一―三〇六
電話 〇四二三―七四一五―一二三

コスモ海運株式会社

代表取締役
専務取締役

義 積 保

〒110 東京都台東区東上野三丁目一八番七号
(東京建物上野ビル七階)
電話 〇三―三八三二―〇七〇一
FAX 〇三―三八三二―五二〇五

渡 邊 隆 男

集	編
記	後

☆毎年五月に出していた本誌を、今年から十月に変更した。十一月恒例の懇親会に一人でも多くの郷友が集

まるように、会の直前に出して、そのもりあげに役買おうというわけである。

☆出席してみたい気はあっても、知らない人ばかりではないか、若者の出る幕ではないだろう、とか、何となく気ずつないものが、だれにもあるにちがいない。

☆丹波育ちは、例外もあるが、大むね引つ込み思案型、受け身型のお人好しで、人づきあいヘタだ。そのくせ内輪弁慶で、いったん気を許すと空けつびろげで遠慮がない。良いことなのか悪いことか？。

☆思いきって出席してみれば、来てよかったと思うのがこの郷友会。意外な人との出会いもあるもの。江戸で揉まれて垢抜けした？丹波っ子衆の生きざまを目のあたりにするのも、また楽しからずや。

☆かく申す小生も、たしか四十年前も前、二十五、六歳のときだった。いっぺん行っ

てみたれと、勇を鼓して郷友会に出席した。丸の内のクラブの小さな部屋で、入ったとたんに会場を間違えたかと思った。インガリした年輩の紳士が十二・三名、

Uターンを考えたが時すでに遅し。話題が日本経済から世界情勢へと展開する。よく通るやや鼻声でとうとうと政界を語るのかかの有田喜一さん。そこへ丹波弁

でしきりとヤユを入れるのが日商の西川政一さん。毅然とした髭の紳士がさわやかな口調で「中東の火種は永久に消える

ことがないでしょう。あれは実は宗教戦争なんですから」と。その数年後総理大臣になった芦田均さんだった。私のカタクナな自己紹介に、しつかりやり給え、とのご宣託。あの感動は今も忘れない。

☆そのころからすれば、昨今の郷友会はまことに気さくなもので、百名内外の老若男女がにぎにぎしく集う。年に一度の会ですぞノ 故里の香に牽かれる方々、

サーサイラハイ、イラッシャイ、十一月二十日の土曜日、九段会館に大集合!!

☆会員名簿は一年おきに掲載しております。住所変更の節は左記事務局へお知らせください。出身地や生年、職業やご趣味など未記録の方、振替用紙の通信欄でも結構ですからぜひおしらせください。

☆山ざる誌は会員参加を目的とした会誌です。お氣がるにご投稿ください。千数百人の郷友があなたの原稿を期待しているのです。締切りは来年八月です。(五)

山ざる 第24号

平成五年十一月二日発行

〈編集委員〉

足立静雄 池田 忍 木呂子恵美子
足立和巳 大野善三 小田富士夫
坂上勝朗 田中篤郎 常岡幹彦
鶴田ゆき子 宮野 近 渡邊隆男

発行者 関東水上郷友会会長・村上末吉

〒102 東京都千代田区神田小川町1ノ11

DMSビル内・関東水上郷友会・事務局

☎〇三(三三九三)〇七〇七

振替・東京一〇二二三三〇

製作 株式会社三玄社

おもわず新しい



“包装文化を創造するネクスタグループ”

ネクスタ株式会社

本 社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京支店	111	東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F	Tel 03-3861-2331
大阪支店	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-939-1281
名古屋営業所	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
九州営業所	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ ラッパイ株式会社

本 社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京工場	121	東京都足立区中央本町5-22-12	Tel 03-3849-6611
千葉工場	270-02	千葉県東葛飾郡関宿町台町2192	Tel 0471-96-1721
名古屋工場	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
大阪工場	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-939-1281
福井工場	919-04	福井県坂井郡春江町江留下相田63-66	Tel 0776-51-5886
福岡工場	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ パッケージ株式会社

本 社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
栃木工場	349-13	栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938	Tel 0282-62-3321
兵庫工場	675-11	兵庫県加古郡稲美町蛸草1438-1	Tel 0794-95-0257

